

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Typology and Universality of the Cognition of Space Division through the Analysis of Demonstratives

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 集而 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004508

指示詞にみられる空間分割の類型とその普遍性

吉 田 集 而*

Typology and Universality of the Cognition of Space Division
through the Analysis of Demonstratives

Shuji YOSHIDA

This paper attempts to show the universality and relativity of the unconscious cognition of space division among humans. Since the cognition of direction, i.e., folk orientation, has been discussed elsewhere [YOSHIDA 1977, 1980a], the cognition of distance, the other fundamental factor in space cognition, is the focus of this paper.

Demonstratives were selected for analysis because their essential component is spatial and also unconscious, and they occur worldwide. Although the spatial component of demonstratives is stressed here, demonstratives have many other components. The spatial components of demonstratives of 479 languages and/or dialects are examined. The lexeme is treated as a unit of demonstratives in principle, but the independent form of demonstratives is used as a unit in the case of polysynthetic languages.

Through the analysis of the spatial components of demonstratives, 47 types of cognition of space division are formulated. These types are assigned to seven super-types; two divisional type (2-type; consisting of “near” and “far”), speaker-centric type (S-type), speaker-hearer type (H-type), vertical up/down type (V-type), four directional type (D-type), aside-type (As-type), and back space type (B-type). Among them, the H-type is closely related with the personal pronoun system and is complex in terms of a definite space division.

There are four common types: 1) 2-type (217 out of 479 languages and/or dialects, 45.3%), 2) 3F-type (consisting of “near”, “far” and “further”, 83 languages, 17.3%), 3) 3H-type (consisting of speaker’s space, hearer’s space and the other space without both

* 国立民族学博物館第2研究部

spaces, 50 languages, 10.4%), and 4) 3M-type (consisting of “near”, “middle” and “far”, 29 languages, 6.4%). Twenty-nine types are specific, and are found in only one language. Though many languages are assigned to few common types, such as 2-type, 3F-type, 3H-type and 3M-type, the diversification of the types of cognition of space division is rather large, being found especially in New Guinea, Oceania, and America.

The etic unit of distance cognition is hypothesized in this paper to clarify the general features of distance cognition among humans. There are three levels of distance cognition; biological, physiological, and cultural. In the biological level, space is divided into three; individual, social and outer social spaces. Individual space is purely egocentric and differs from Hall’s personal distance which is the distance between two individuals or among more than two individuals [HALL 1966]. On the physiological level, space is divided into four; kinesthetic, aural, visual, and outer visual space is added. The critical lines of each space are a) touching limit line, b) hailing limit line, and c) visible limit line, respectively. At the cultural level, space has seven divisions: kinesthetic, aural and visual spaces are sub-divided into two, respectively, and outer visual space is added to them.

It can be argued that individual space coincides with kinesthetic space in humans. That the use of the touching limit line is almost universal (98.1%) is explicable by this hypothesis. In other words, the touching limit line is universally recognized, since it has a fundamental, biological basis. Although this limit is extended psychologically, such aspects are not considered here. Though the line is defined as the “touching limit line” through worldwide, the actual limit varies to some extent among cultures. This is interesting in terms of proxemics.

Space division at the physiological level is potentially universal, according to the result of the analysis of spatial component of demonstratives. Space division at the cultural level is specific among the cultures, and the seven divisions are enough for discussing the spatial component of demonstratives of the world’s languages.

- | | |
|--------------|----------------|
| 1. イントロダクション | 1.4. 普遍性に関する研究 |
| 1.1. 空間の認識 | 1.5. 方法論について |
| 1.2. 民俗方位 | 1.5.1. 資料の性質 |
| 1.3. 距離の認識 | 1.5.2. 指示詞 |

- 1.5.3. 単位性について
- 2. 結果
 - 2.1. 距離的空間分割の分節点
 - 2.2. 空間分割の種類
 - 2.2.1. 1分型および2分型
 - (1) 1分型
 - (2) 2分型
 - 2.2.2. 話し手を中心とした類型(S型)
 - (1) 3S型
 - (2) 4S型
 - (3) 5S型
 - (4) 6S型
 - (5) 8S型
 - 2.2.3. 「聞き手に近い」空間をもつ類型(H型)
 - (1) 3H型
 - (2) 4H型
 - (3) 5H型
 - (4) 6H型
 - (5) 8H型
 - 2.2.4. 方向性をもつ類型
 - (1) 上・下の方向性をもつ類型(V型)
 - (2) 4方位をもつ類型(D型)
 - (3) その他の方向性をもつ類型(B型, As型)
 - 2.2.5. 分類のシステムについて
- 3. 考察
 - 3.1. 言語群における特徴
 - 3.2. 種類の出現頻度
 - 3.3. 分節点の出現頻度
 - 3.4. 距離による空間分割の一般像
 - 3.5. Proxemics との相関性
 - 3.6. 種類の変化
 - 3.7. 指示詞の構成要素
- 4. 結論
 - 4.1. まとめ
 - 4.2. 今後の問題

1. イントロダクション

1.1. 空間の認識

空間というものを抽象的に認識することはかなりむずかしいことである。人が空間というものを認識するもっとも基本的な形は、空間中に存在する物の位置を通してである。その場合、物は単にみえるものだけでなく、聞こえるものや、におうものでもよい。

普通、空間は3次元的なものと考えられているが、人間の基本的な生活は平面上、すなわち2次元的世界にある。さらに、空間を認識する人間自体が、その空間の中に存在していることが常態である。そのとき、2次元的世界は、彼を中心として広がる世界と考えることができる。そこでは、物の位置は方向と距離によって認識されることになる。

地図というものは、この意味において画期的な発明であった。空間を認識する主体をその空間外に導き、明確な2次元的世界の認識像を人にあたえるからである。地図的空間認識は、方向と距離による空間認識の発達した形であると考えられる。民俗レ

ベルの空間の認識というものは、発達した地図的空間認識をも時にはふくめなければならぬであろうが、より基本的には方向と距離による空間認識を中心にすえればよいであろう。

1.2. 民俗方位

方向というものは、とりもなおさず人間の身体的構造を基礎としている。人間の眼が顔の前面に集中していることが、前方と後方の方向性を人間にあたえる。起伏ある地表面を歩く人間にとっては、上方、下方は重要な方向である。そして、前方を基準として形成される左右という方向性がこれにつぐ。この方向性は前方の確立によって始めて成立する方向であり、他の2つとはことなつた性質をもっている。

この3つの方向性が人間にとってもっとも基礎的なものであり、民俗方位はこれらをもとにして発達してきた。そして、この方位を身体的方位 (bodily orientation) となつた [YOSHIDA 1980a: 78-79]。この報告では、北ハルマヘラ島諸族の民俗方位の認識の分析から出発して、先に述べた点をふくめて民俗方位の一般的特徴にいたるまでを検討した。本報告はこれに引きつづき、民俗レベルにおける空間認識のもうひとつの要素である距離の認識について検討しようとししている。

1.3. 距離の認識

民俗レベルでの距離の認識を把握するために、私は指示詞をとりあげることにした。物を指示するということは、かなり原初的な言語の機能のひとつであり、かつ、現在においても頻用されている機能である。また、指示詞は deictic¹⁾ であり、ある意味では話し手中心の語集群であり、先に述べた距離の認識の典型的なものと考えてよい。さらに、指示詞は、原初的な言語機能をもつた語集群であるため、まずほとんどの言語にもみられるものと考えてよい。すなわち、指示詞の分析によって人類にとっての空間における距離の認識の全体的な俯瞰を可能にする。また、意味領域、あるいは domain としても、かなり明確なもので、とりあつかいが容易であるという利点もある。そして、指示詞のもつ空間の距離の認識というものは、無意識的なものであり、かつあるセットの中から必ずどれかが選ばれるという性質をもっており、一旦学習されるとかなり根強くその人の中に定着し、その言語の指示詞の空間分割の仕方にとらわ

1) もともとはギリシア文法から派生した用語で、ギリシア文法では指示詞にだいたい相当する。

一般的意味素性をもたず、言語的 (すでにのべたというようなこと) あるいは非言語的な文脈 (たとえば、目の前にいる) によってその意味することが同定できるものを deictic という [PALMER 1976: 126-129]。

れてしまう。それ故、各言語の距離的空間分割を明らかにすることは、ことなつた言語における相互理解をよりたやすくするという側面ももっている。

ところで、空間の距離分割については Edward Hall [1973 (1959), 1963, 1969 (1966), 1968, 1974] のすぐれた研究がある。彼は人間の空間の利用の仕方というものをみごとにえがきだした。彼は、この方面の研究を proxemics と名づけた。この語は proximity と emic から合成されたものと思われ、空間の利用の仕方というものは、各文化によってことなつているという考え方をその基礎としている。彼はかなり強い Whorfian であり、同じような感覚器官をもちながら、その体験される世界というものは文化によってことなつていくという考え方をその前提として持っている。また、彼の仕事は驚くほど多方面にわたっているが、彼の仕事を特徴づけるものは言語的なものの分析よりは、身体的活動の分析が主軸になっていることである。勿論、彼は空間にかかわる語彙や文学作品にも眼を向けているし、それらをも proxemics の中の 1 分野であると考えている。

本研究を Hall の proxemics と比較すると、本研究の特徴がより明確になる。簡単にその要素を上げれば、表 1 のようである。

すなわち、本研究では、対象となるものは人間にかぎらない。音

であれ、においであれ、人間に感じられるものが対象である。また、分析に際して、ことばを中心としており、非言語的な要素はほとんど考慮されていない。そして、Hall において、各文化ごとの空間利用の特異性の抽出が主要目的であったのに対して、本研究はむしろ、人間文化の普遍的な側面にその重点がおかれている。

表 1 Hall の研究との比較

Hall の proxemics	指示詞の空間成分の分析
対 人 間 非 言 語 的 emic	対物(感じられるものの全て) 言語的 etic

1.4. 普遍性に関する研究

人類学分野における普遍性に関する研究は、Chomsky [1957] の生成文法の研究による影響が非常に強くみられる。勿論、それらとかわからないすぐれた研究（たとえば、Lévi-Strauss [1946, 1962], Murdock [1967] など）もあるが、より明確に普遍性の問題に目を向けさせたのは、Chomsky の仕事であろう。そして人間の文化の深層構造には何か普遍的なものがあるのではないかという考え方が急速に高まってきた。

こうした普遍性への探求の傾斜の中で、Berlin と Kay が示した問題は、Lévi-

Strauss などの研究とはことなった視点からのものであった。彼らの Basic Color Terms [1969] は、2つの点で注目されるものであった。ひとつは、世界中のどの民族にとっても、標識化される色というものは、同じ色であったということである。それは、人間の色に関する視覚認識というものが、とりもおさず同じものであったということをも明らかにしめしている。第2は、これらの標識化には、規則的な順序というものがあるという発見である。彼らが提示した資料は、同時代的なものであるが、同時にそれは進化論的な変異のパターンをしめしているというものであった。

Lyons [1968] は、Conklin [1955] の Hanunóo 族の色彩語彙の研究を引用しながら、語彙というものは、その社会にとっての文化的に重要な区別点というものを反映していると主張する [LYONS 1968: 431-433]。そこには Sapir [1921] の考え方と軌を一にする考え方がみられる。この Conklin の例に対して Kay [1970] はこの両者の違いが方法論上の違いにもとづくものであることを指摘するとともに次のように主張する。彼らの見出した普遍的な色に対する標識というものは、決して Conklin の発見と矛盾しない——Conklin のそれは emic な認識であり、その背後にある、あるいはそれをこえた etic な認識というものが、ことなったレベルであるという [KAY 1970: 27]。Kay がこのように主張する背景には、多くの音素の研究から音声の研究が発展したように、emic な意味の分析研究を続ければ、etic な意味という側面も明確になってくるであろうという、かなり楽観的な彼の見方がある [KAY 1970: 25]。

しかし、物理学的に定義できるような音声素性 (phonetic feature) に対応するような etic な意味素性 (semantic feature) を考えることができるであろうか。弁別的素性 (distinctive feature) によって音素 (phoneme) をとり出すように、意味の弁別的素性をとり出して emic な意味成分 (semantic component) をとり出すことはできる。しかし、Nida のような補助的意味成分 (supplementary component) [NIDA 1975: 32-39] まで拾いきれるであろうか。また、音声素性が物理学的に定義できたように、普遍的な意味素性を定義づける方法があるのであろうか。現在の段階では、普遍的な意味素性が存在するかどうかを答えるところまでにはいたっていない。しかし、Kay が考えるほどに単純なものでないことは確かである。

Berlin と Kay の研究は、この問題に対して別の見方をも提示している。すなわち、ある色の周辺部は言語によってさまざまの変異がみられるが、その色の中心点は、各言語を越えて普遍的であったという指摘である [BERLIN & KAY 1969: 13]。彼らの指摘は、具体的な色におけるその中心と周辺という対応であるが、この関係はさ

らに広い対応づけにも利用できるようである。すなわち、意義素 (sememe) は中心的な意味成分と周辺的な意味成分からなると考えられる。そして、普遍的な意味素性というものは、この中心的な意味成分とより密接に関連しており、周辺的な意味成分はより文化特異的な意味素性と結びつく傾向をもつと推定される。一方で、形態素 (morpheme) あるいは語彙素 (lexeme) というものにも、より普遍的なものより文化特異的なものがあると考えられる。しかし、どの語彙素がより普遍的であり、どの語彙素がより文化特異的であるかを述べることはやさしいことではない。容易に他の言語に翻訳できる語彙素は、より普遍的である可能性が高く、翻訳のむずかしい語彙素はより文化特異的であろうという予測はつく。それ故、もしある文化の特異性を明らかにしたいと望むならば、より翻訳のむずかしい語彙素にかかわる現象をとりあげればよいという一般化は可能である。先の Berlin と Kay の研究においては、はじめから普遍性の高い語彙素が選択されており、しかもその中心的意味を問うということによってなされたものであった。

Berlin と Kay の色彩語彙の研究は、普遍的な意味というものがそれらの語彙にあるかどうかと疑われていた時に、その存在を明示した点において画期的なものであった。そして、彼らの研究以後、多くの色彩語彙に関連する論文が発表されており、その影響力は非常に大きなものがあった。

Berlin は、その研究の後に、人間の生物の認識の仕方にも普遍性があることを示そうとした [BERLIN 1972, 1973, 1976; BERLIN, BREEDLOVE & RAVEN 1973, 1974]。それは、unique beginner—life form—generic—specific—varietal という5つの階層的序列をもった認識構造であり、それぞれの概念と命名法にも一定の規則性があるというものである。たとえば、「植物—木—サクラ—シダレザクラ—八重のシダレザクラ」といった例がそれであり、specific と varietal レベルでは語彙素は合成語彙素となる。彼の説は、語彙の意味に普遍性があるという点からさらに進めて、人間の認識の仕方にも普遍性が認められるという説であった。しかし、この説はまだ一般に受け入れられたものではなく、その仮説を疑う論文も提出されている (たとえば, Bulmer [1974], Randall [1976], Messer [1978] など)。

C. Brown は、Berlin のなお疑問のあるこの説の上に立って、かつて Berlin と Kay が色彩語彙で用いた理論を用いて、動物や植物の民俗分類における life form category に色彩語彙と同様に規則正しい出現の序列というものがあることを主張した [BROWN, C. 1977, 1979]。C. Brown の行なったこの試みは、理論的には Berlin と Kay の理論の踏襲であり、二番煎じであるばかりでなく、その議論の中心的な概

念である life form category の検討が粗雑であり、その結論が成立するかどうかは極めて疑わしい状況にある。なお、民俗生物学に関する問題は別稿で、詳しく検討する予定である。

さて、Berling [1970] は、親族名称における Lounsbury [1963] の還元法則 (reduction rule) の発見は、さまざまな親族名称のシステムを有効に比較研究できる道を開いたという。いくつかの還元法則によって、親族名称のシステムの、もっとも基本的なパターンが抽出できるだけでなく、どのような還元法則がそれに用いられているかによって、より明確な比較が可能であるという。それは emic に定義された親族名称を etic な親族関係の図式に転換することなのであろう。

Greenberg [1966] の marked/unmarked の対立は、単に言語学の範囲において普遍的にみとめられるものではなく、親族名称の語彙にも適応が可能であり、さまざまな分野の類型化にも有効である。親族名称ではすくなくとも、世代、直系親族と傍系親族の区別、相対的な性の区別という概念は普遍的なものであると述べている。

本報告に近い分野では、Forchheimer [1951] の人称代名詞の類型論がある。しかし、この研究は、人称代名詞の形態的な面に重点がかけられ、また一方で、双数 (dual) や三数 (trial) を総て複数という項目にふくめてしまったため、その結論は奇妙なものとなってしまっている。

のちに、彼の資料を用いて、Ingram [1978] が、人称代名詞の類型化を試みた。Forchheimer の欠点はよく克服されているが、資料の制約ということもあって、予想されるような類型以上のものは提出されていない [吉田 1979: 18-20]。

Head [1978] は、同じく人称代名詞のていねいさにかかわる性質について検討している。その中で、(1)複数形を用いることはていねいさをあらわす、(2)3人称を2人称として用いる場合もていねいさを表わしている、という現象がかなりの広い範囲にわたってみとめられることを提示している。

これらの人称代名詞に関する研究では、常識的な予測を追認した程度の結論であり、それらの意味付けあるいは特徴付けが明確でなく、あまり評価できない。

このような普遍性に関する研究をみると、いくつかの問題点を指摘することができる。それはとりもなおさず、方法論と相関している。すなわち、かなりの数の言語あるいは文化を比較の対象とするため、比較の方法を簡素化しなければならない。たとえば、ある語彙群の分析というように範囲を限定し、中心的な意味のみを考察の対象とするといったようにである。現在の状況では、数百の個別文化を、その総体として比較するような方法論はまだ見い出されていない。そのため、ある領域における、

しかも簡素化した方法においてしか比較を可能にしえない。この方法論上の制約が、その結論としての普遍性に問題をなげかける。

ひとつは語彙群の設定あるいは文化項目の設定の仕方にかかわる問題である。C. Brown の life form の選択基準の不適合はその一例であろう。また Ingram の人称代名詞の研究もこの点に部分的にかかわっている。また一方で、周辺的な意味を捨て、中心的な意味だけを比較の対象とするとき、その普遍性は、各個文化の理解にはほとんど寄与しないという側面が強くなる。Berlin の生物の認識の一般法則というものはそれにあたるであろう。

語彙群の設定は、主題とのかかわりにおいて、注意深く行なうしかない。また、普遍性の研究が文化の理解にほとんど寄与しないという批判は、ある点で的を射ており、ある点でそれは不当な評価であろう。日米文化の比較からは日本文化のグローバルな意味での特殊性は明らかにならないという批判とどこかにしている。それは、研究の方向性の違いのようなものである。人間の文化に種特異的なものがあるであろうことは想像に難くない。その種特異性をどこまで認めることができるかといった問題を普遍性の研究はとりあつかおうとしている。いわば、それはレベルのことなりというものであろう。そして、種特異的なものが、人間の文化の中核にからんでいる場合もあれば、ほとんどかかわらない場合もある。あるいは、種特異的レベルから文化特異的レベルに変換する操作をもうひとつ必要とする場合もあるであろう。そうした問題は、今後の研究によって徐々に明らかにされるであろう。

1.5. 方法論について

1.5.1. 資料の性質

本報告で用いる資料は、わずかの例外を除いて、各言語の文法書から抽出したものである。辞書を併用したもの、また辞書のみから資料を抽出したものもわずかにある。さらに直接、informant から得た資料も少数ふくまれている。このように、文法書を主な資料としていることが、本報告のひとつの制約となっている。それは、各文法書における指示詞に関する記述の精度と関係している。informant を用いた一次資料と文法書からの二次資料の精度は当然ながらことなる。そして、文法書の精度を直接問うことは、一般にむずかしい。しかし、一言語について複数の文法書があるときは、それらを用いて検討することによりある程度の精度を上げることができる。そして、そのことが同時に文法書にたよることの問題点をも明確にする。

たとえば、Afro-Asiatic の Cushitic 語群の Somali 語の場合をみてみよう。Somali

表2 Somali語の指示詞と場所の副詞

		De Larajasse & Sampont [1897]			Kirk [1905]			Tucker & Bryan [1966]		C. Bell [1968]	
		S.	Pl.	場所の副詞	S.	Pl.	場所の副詞	指示詞	場所の副詞	指示詞	場所の副詞
近い	m	kan, gan, han	kuan, kuankan	halka(n), mèsha(n), hagga(n)	kan	kuan	halkan, mèshan	-kani		-kan (-gan, -han, -àn)	halkan
	f	tan, dan, shan	tuan		tan	tuan		-tani		-tan (-dan, -da, -sha)	
やい	m	ker, ger, her	kuer	—	—	—	—	-keeri		-keer	—
	f	ter, der, sher	tuer					-teeri		-teer	
遠い	m	kas (kà) gas (gà) has (hà)	kuas	halkas, hagas, meshas	kas, kà	kuas, tà	halkas, mèshas	-kaasi		-kaas (-kas)	halkas (halkaa)
	f	tas (tà) das (dà) shas (shà)	tuas		tas,	tuas		-taasi		-taas (-taa)	
ほらにい	m	—	—	halko, halkà, meshà, mesho, shishai	kò	kuò	halko, haggo	-kooyi		-koo	halko
	f				to	tuò		-tooyi		-too	

語の4つの文法書に記された指示詞および場所の副詞の比較を表2に示した。まず、この例をみると、そのとりあつかいに違いがあることを認めるであろう。De Larajasse & Sampont [1897] と Kirk [1905] の文法書では、単複の区別を明示しており、一方 Tucker & Bryan [1966] と C. Bell [1968] では、単複の区別は指示詞の中では示さず、接尾辞としてとりあつかっている。本報告では後に述べるように語彙素を主としてあつかおうとしているため、単複や、性の区別は問題にならない。また品詞上の区別も重要な問題とみなしていないが、このような違いは各言語の文法書の指示詞についての記述には、もっと大きな変異の幅が認められる。

ところで、問題は、De Larajasse & Sampont では、もっとも遠い場所を示す指示詞を欠いており、Kirk ではやや遠い場所を示す指示詞を欠いている。この違いは、指示詞の空間成分の類型化を行なうとき、直接的な影響があらわれる。すなわち、どの文法書を用いるかによって、Somali 語の空間認識の類型がことなることになる。多くの言語では複数の文法書を比較検討して、その類型化を行なったものではない。むしろ、ひとつの文法書からの類型化が中心であり、ここにみられるような危険性を常にはらんでいる。それ故、ここで類型化されたものは、それぞれの文法書によれば、という条件が付帯している。勿論、多くの文法書はかなりの信頼度があるものと考えられるが、こうした危険性をはらんでいることは否定できない。

先の Somali 語の場合、方言とみる可能性もなくはない。たとえば、Quechua 語の場合 Cuzco-Collao 方言 [CUSIHUAMAN G. 1976] と San Martin 方言 [COOMBS, COOMBS & WEBER 1976] とでは、さらに遠い指示詞があるかどうかでことなっている。Cuzco-Collao 方言のさらに遠いものを指示する chachay は、はじめの音節のくりかえしによってより遠いを表現しており、San Martin 方言でも存在する可能性がなくはない指示詞である。ところが、San Martin 方言では記述されておらず、同時期の同じシリーズでとして出版されていることから著者らの間にコミュニケーションがあったかもしれないことが想像され、方言差と考えた方がいように考えられる。

先の Somali 語の場合は、-keer, -koo という指示詞はあまり用いられていないと

表3 Quechua 語の方言による異なり

Quechua 語 の方言	指 示 詞			場 所 の 副 詞		
	近 い	遠 い	さらに遠い	近 い	遠 い	さらに遠い
Cuzco-Callao 方言	kay	chay	chachay	kaypi	chaypi	chachaypi
San Marin 方言	kay	chay		kaypi	chaypi	

いう C. Bell の記述 [BELL C. 1968: 15] から、4種の指示詞から2種の指示詞に変化しつつある例であることが推定される。そして、先の2つの例は、脱落する途中の地方的変異である可能性も考えられる。しかし、類型化に際しては、Somali 語は4種の指示詞があるとし、Quechua 語の場合は、方言によって2種の類型があるとしてここではとりあつかっている。

文法書を用いた場合の、本研究にとってより重要な問題がある。それは、指示詞の空間成分の区別点の記述が一般にあいまいな点である。informant を用いた場合、その境界線は、かなり明確にとり出すことができる [吉田 n. d.]。ただし、心理的に拡大された指示詞の用法はその中にはふくまれていない。たとえば、明らかに手のとどく範囲にあるのに、“that paper” と生徒の論文をアメリカの教授がというような場合である。教授にとって、その論文に心理的に距離をおきたいとき、たとえば内容的に共感できないような論文であるとき、彼は “this paper” というよりは “that paper” というであろう。このような心理的に拡大された遠近感というものを除いたもっとも基礎的な遠近感は、必要があれば何センチとか何メートルといったように測ることさえできる。勿論、そうした計測が後に述べるようにこの問題についての適当なスケールとは考えていない。重要な点は、かなり明確な境界線が存在するという点であり、informant を用いた場合にはその境界線をとる出すことができるが、文法書からではむずかしいという点である。文法書にみられる指示詞の空間成分の区別点は、near, far, remote, further, very distant, far away といった相対的な区別や、this, that, this one here, that one there, that one yonder, といった訳語的表現がほとんどをしめる。私のほしいものは、もっと明確な区別点であった。

この文法書によるあいまいさは、それぞれの文法書をいくら詳しくよんでも解決されるものではない。まれに詳しくかかれた文法書や、informant を用いての調査で得られた資料をもとにして、区別点の基準をたて、それを外挿することにより類型化を試みた。そして、その仮説としての基準点の有効性を検証するとともに、その仮説が成立するとすれば、どのようなことが明らかになるかを本報告で論じている。

なお、例として引用する場合、それぞれの原文献に従っている。そのため表記法に統一性はないが、各語の指示詞の形態の比較を行なうことが目的ではない故に、それで充分であると考えている。また、言語の名称は Voegelin & Voegelin [1977] に原則として従っている。言語のグループについても彼らの分類のもっとも大きな単位を採用しているが、アメリカは地域的に分けている。これは、後に A. Bell [1978] の資料との比較をも考えに入れている。そのため、言語の分類は、非常に便宜的なもの

と考えてもらってよい。

1.5.2. 指 示 詞

人間のもつ距離的認識を抽出するために指示詞を分析の対象とした。しかし、指示詞のもつ、総ての機能および意味を分析するものではない。

指示の体系は、限定的 (definite) と非限定的 (indefinite) な指示に分けることができる。本論では、非限定的な指示(たとえば, some や any)はこの範囲にふくまれている。限定的な指示において、非選択的な every のような指示も除かれている。また、二者択一的な the other のような指示も除かれている [COLLINSON 1966: 20-34]。すなわち、一般に指示詞 (demonstrative) とよばれるものである。

指示詞から派生したといわれる定冠詞 (definite article) [Lyons 1977: 650] は、時として指示詞との区別がむずかしい場合がある。しかし、定冠詞は後に述べる anaphoric (照応的) な機能をもつものであり、本報告の対象外にある。

指示詞の機能としては、空間的な指示機能、時間的な指示機能、anaphoric な機能、tacit (暗黙の) な機能があると考えられる。Fillmore は、gestural, symbolic, anaphoric の3つの機能に分けている [FILLMORE 1971: 40-41]。gestural というのは、先の空間的指示とはほぼ対応し、彼の anaphoric な機能は時間的な機能をも含んでいるようである。そして、symbolic と彼がよぶ場合は、電話で “Is Johnny there?” という場合の there や、講義中に “this campus” というときの this のようなもので、実際に指示するのではなく、互いに知っていることによって指示が可能な場合をいう。しかし、彼のあげる例は、gestural な機能ではないが、空間的な指示機能であることに変わりはない。電話の場合ならば、「そこにA君はいますか？」と日本語でおきかえることができ、その場合には「そこ」であって決して「あそこ」でないことによって、Fillmore のような symbolic という機能を認める必要はないと思われる。

anaphoric な指示の場合は、すでに述べたことによって、はっきりと分かる場合である。たとえば、「昨日、貴船山にいったのですが、あの山の美しさといったら……」という文中の「あの山」は貴船山をさしていることは明らかである。それに対して、tacit という用法は、「かの君、どうしているでしょうね」という文中にみられる「かの」をいう。その会話の中ではそれ以前に話されたことはないが、互いに暗黙の内に了解しているものをさしている場合である。多くの言語では、この機能を明確には認めていないが、まれにこの機能を区別している言語がある。そして、本報告ではそれ

らの機能の内、空間的な指示のみをとりあげようとしている。

また、先にしめしたような心理的に拡大された用法は含まれていない。anaphoricな用法や、時間的用法も、実は心理的に拡大された用法であるとも考えられる。指示詞の意味のむずかしさは、この心理的に拡大された用法にある。しかしながら、本報告であつかうのは、基本的な（あるいは中心的な意味である）空間成分のみを対象としている。

さて、いわゆる品詞 (part of speech) についても少しふれておくことにする。本論であつかう指示詞は、普通は指示代名詞 (demonstrative pronoun)、と指示形容詞 (demonstrative adjective) であるが、これらが明確に分離しているものもあれば、分離していない場合もある。本報告では、指示代名詞と指示形容詞の区別をとりたててしていない。両者の上位概念としての指示詞 (demonstrative) を用いている。そして、この指示詞には、それらだけでなく、指示の機能をになっている接辞 (affix) や接語 (clitic)、分詞 (particle)、語根 (root) をも一括してふくめている。これらの品詞上の区別は、実はほとんど大切な問題としてあつかっていない。

本報告では、場所の副詞 (adverb of place) をも考察の中にふくめようとしている。これは、時により場所の指示詞 (locative demonstrative) とも表現されることがある。そして、言語によっては、場所の指示詞といわゆる指示詞との分離が行なわれず同形のものもある。実際、場所の副詞と指示詞は密接に関係している。たとえば、英語では、this book は “the book which is here” と、または “I am here” は “I am in this place” と容易に変換することができる。それ故これらの指示詞と関係する場所の副詞は、考察の範囲内にふくめてある。そして、興味深いことは、指示詞と場所の副詞は常に一致するわけではないことである。それには、さまざまな理由が存在するが、中には場所の副詞は指示詞の体系から独立し、動詞と一組の体系をなすこともある。それはともかく、場所の副詞をとりあげるにしても、決して総ての場所の副詞をとりあげるわけではない。それは本報告の範囲をこえるものである。

場所の副詞は、adverb of place とも locative adverb ともよばれ、また locative demonstrative ともよばれる。locative demonstrative の場合は、往々にして指示形容詞的な機能をもっている。また、格変化をもつ言語では、指示詞の所格 (locative) が往々にして場所の副詞に対応することがある。さらに、指示詞に接辞や、前置詞・後置詞がともなわれて、場所の副詞となることもある。このように、いろいろの場合があるが、場所の副詞的機能をもつ語を場所の副詞のカテゴリーにふくめてある。

1.5.3. 単位性について

各言語における指示詞の比較の単位は、原則として語彙素をとりあげる。例として提示する場合には、性や数といったものをふくめて記しているが、このような要素は比較の対象とはしていない。

ところで、時として、語彙素としてとり出すことがむずかしい場合がある。たとえば、アメリカでみられる polysynthetic (抱合的) な言語では、他の言語では一文として表現される内容が、しばしば一語で表現される。そのため、どこまでを語彙素としてとり出すかはきわめてむずかしい。これらの言語では形態素が、基本単位であり、原則として形態素の独立形を比較の単位としている。また、独立形が明確でないときは、その形態素と常に組み合わせられる形態素を加えたものをとりあげている (たとえば北米の Kwakiutl 語の場合)。しかし、それも明確でないものは、比較の対象からはずすことにした (たとえば南米の Itonama 語 [CAMP & LICCARDI 1967] の場合)。

ここで語彙素というとき、それは単一語彙素 (unitary lexeme) をいう。合成語彙素 (composite lexeme) はふくまれていない。合成語彙素をふくめることは、比較の domain を不明確にするという実的な問題が関係しているだけでなく、単一語彙素と合成語彙素との間に質的な差を認めるからである。

しかしながら、単一語彙素がないということが、ただちにその語彙素のもつ概念がないと考えることには賛成できない。R. Brown が Whorf の仮説に反論する中で述べるように、エスキモーが3つの単語で区別している雪の種類も、snow という単語1つしかないアメリカ人でも合成語を用いて表現できるし、認識もできるとしている [BROWN, R. 1958: 234-235]。さらに Berlin [1968] の潜在的概念 (covert category) をも考え合わせれば、標識化されていなくとも概念あるいは認識というものがすでにあることをしめしている。

単一語彙素と合成語彙素は、そうした認識の存在について直接的にかかわるものではなく、意味の単位性にかかわっているだけである。合成語彙素は、2つ以上の意味の意識的な結合であり、単一語彙素とはその点において区別されなければならない。そして、どのような意味が単位として用いられているかを知ることは、文化の点からみれば大切な問題であると考えている。

ところで、この原則は指示詞には適用されているが、場所の副詞では、それほど厳密には適用されていない。たとえば、Austronesian の Sangir 語の場所の副詞では、基本的には sini/sene の対立であるが、その短縮形である si, se が指示詞と組み合わせ

されてより多くの場所の副詞を形成している(表52参照)。先の原則を貫けば、この場合は2分型とみなすべきものであるがここでは9分型にふくめてある。それは、場所の副詞、指示詞との対応をみるための補助的なりとりあつかいをしているからである。

2. 結 果

2.1. 距離的空間分割の分節点

指示詞中の空間成分は決して単純なものではない。特に心理的に拡張された空間成分の存在は、指示詞中の空間成分の明確な区別点をあいまいなものにさせている。しかし、指示詞中の空間成分は、ある条件をあたえればかなり明確な区別点をもっている[吉田 n. d.]。この明確な区別点をもつ空間成分をもっとも基礎的なものと考えようとしている。そして、他の空間成分はその拡大されたものと考えている。勿論、この空間分割がもっとも基礎的なものであるという保証があるわけではないが、恐らくほとんどの場合、これらがもっとも基礎的なものであると思われる。そして、次にしめすような空間分割が *etic* なものとして用いることができると考えている。

さて、具体的な分節点の抽出は、*informant* を通して得た資料、本論でとりあつかった各言語の指示詞の類型化に際して得たさまざまな経験、Hall の *proxemics* の論考などをもととし、一方で理論的に考うる分節点を数えあげ、両者をあわせて整理したものである。この分節点は、本論のために仮定的にもうけられたものであるが、これらが確かに存在するという証明は個々の言語による詳しい調査、および、指示詞以外の他の研究との対照において行なわれなければならないであろう。

さて、話し手を中心とした空間は、3つの基本的な分節点をもっている。手のとどく点(K点: Kは *kinesthetic* の略号)、声のとどく点(A点: Aは *aural* の略号)、そして、視覚のとどく点(V点: Vは *visual* の略号)の3つである。すなわち、K点は身体的到達限界点、A点は音声的到達限界点、V点は視覚的到達限界点である。話し手を中心とする空間は、この3つの基本的な分節点によって4分される。すなわち、筋覚空間、聴覚空間、視覚空間、視覚外空間である。

この3点は、K, A, Vの順に距離の近い順序で並ぶものであるが、例外もある。たとえば、南米のアマゾンで話されているPiro語では、A点よりもV点の方が近い分節点としてとりあつかわれている[MATTESON 1965]。視界の限定された熱帯降雨林の中では、みえなくなる点よりは、きこえなくなる点の方が遠くになることにもとづいている。そして、Piro語の場合は、指示の範囲は、きこえる範囲内に限られている。このような例は、Piro語の1例しか知られていないが、熱帯降雨林中に住む

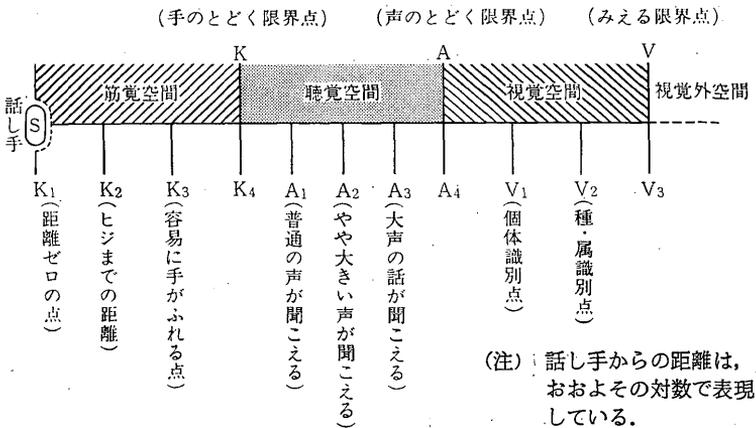


図1 距離的空間分割の分節点

人々の間でもちいられている他の言語にもみられる可能性があるであろう。

ところで、これらの点はさらに下位に分類されるいくつかの限界点をもっている。筋覚空間では4つの点、聴覚空間においても4つの点、そして視覚空間では3つの点を考えておく。K点に関しては、話し手自身の身についており、あるいは、話し手自身がしている場所——すなわち、距離ゼロの点 (K₁点)、ヒジを体側につけたままで手にとることができる点 (K₂点)、容易に手でふれることができる点 (K₃点)、そして手をのばしたり、一歩ふみ出すと手のとどく、手のとどく限界点 (K₄点) の4点である。A点に関しては、普通の調子で話されている声がきこえる点 (A₁点)、やや大きな声で話されている声がきこえる点 (A₂点)、集団に対して大声で話されている話がきこえる点 (A₃点)、最大の音量でのよびかけなどの声がきこえる点 (A₄点) の4点である。V点については、人間の個体識別ができる点 (V₁点)、大型動物 (人間を含める) の属または種レベルの認識ができる点 (V₂点)、何であるかは不明であるが、ともかくもなおみることができる点 (V₃点) の3点である。

以上の下位に分類された11点の分節点によって、以下に述べる指示詞中の距離的空間成分の分析は十分に可能であると考えられ、これ以上の点を必要としないと考えている。そして、これらの実際的な使い方は下記の類型化の中で具体的にのべるつもりである。

指示詞の空間成分は距離的な空間分割以外の要素をも含んでいる。それらについて、少しふれておこう。

まず、聞き手に属す空間が存在する。この空間は、話し手と聞き手の相対的な位置によって、さまざまに変化し、一義的に、距離的に分割することはむずかしい。これ

は距離とはことなったレベルで出現する空間である。しかし、この空間を定式化するためには、通常の会話が行なわれている場合を想定する。その場合、聞き手の空間は、 A_1 点（普通の会話聞きこえる点）と K_4 点（話し手の手のとどく点）との間としておく²⁾。

これとよく似た例として、話し手と聞き手の両方に属す空間が存在し、この場合は A_1 点までの範囲として示されている。

また、方位性をもつ例がある。これらは別にまとめて検討する。

2.2. 空間分割の分類

2.2.1. 1分型および2分型

(1) 1分型

指示詞の空間成分としては、距離的に分化していないものをいう。

Afro-Asiatic の Omotic 語群の Welamo (Walamo) 語、およびその方言である Gofa 語 [TUCKER & BRYAN 1966] では、それぞれ、hage, haysa という距離的には分化していない指示代名詞をもつ。Welamo 語では、性的に区別された (h)anna (男性)、(h)anno (女性) という指示代名詞を別にもつが、これも距離的には区別されていない。ただし、場所の副詞は不明である。

この Welamo 語が本当に1分型であるかどうか、疑問がないわけではない。Welamo 語の他の方言、たとえば Kullo 語 [ALLAN 1976] では、遠近で区別される hāga (近)、hini (遠) の2つの指示詞をもっている。そして、これらは場所の副詞ともなるという。Welamo 語が1分型であるかどうか、疑問の余地はあるが、ここでは Tucker & Bryan に従って1分型に含めておく。

北米インディアンの Hokan 系の Karok 語 [BRIGHT 1957] では、指示詞としては pay の一語しかない。これは実際にさしめしながら用いられるものである。これに対して、anaphoric な指示詞として vá·h があり、それに対応する場所の副詞として ka·n がある。一方、場所の副詞としては、ʔô·k (近い)、ku·k (遠い) の二種があり、さらに pay がこれらに組み合わされると、場所の副詞の強調形ができあがる。この強調形は距離的な区別がなされ、近い方はより近く、遠い方はより遠い場所をしめす。ただし、Kroeber [1911: 431] は pa-ipa (近い)、pa-ik·u (遠い) という2

2) 通常の会話が行なわれる話し手と聞き手の距離は文化によってことなる。また、そのときの声の大きさも、文化によってことなるため、実際の聞き手に属す範囲は微妙に文化によってことなる。また、「聞き手に属す」空間は多くの場合、 K_4 点の内側にまでおよぶものであるが、便宜的にここでは、 K_4 点としておく。

表4 Karok 語の指示詞と場所の副詞

区別点	場所の副詞	指示詞
話し手に近い	非常に近い	pay(?)ó·k
	近い	?ó·k
話し手から遠い	遠い	ku·k
	さらに遠い	páy ku·k

種の指示詞を認めているが、ここではより詳しく記述されている Bright の説をとっておく。

ニューギニア高地の Kapauku 語 [DOBLE 1960] では、指示詞には遠近の区別はなく、男性（または一般）、女性（大きいもの）の

区別しかない (kii, kii ko, kidi, kidaa [m]; kou, kou ko, kodo, kodaa [f])。一方、場所の副詞では kiija, jakai, kouja はいずれも「話し手に近い」場所をしめし、「話し手から遠い」場所は wo でしめされる。資料は充分ではないが、指示詞は1分型であると考えられる。

同じくニューギニアの Kamoro 語 [DRABBE 1953] では、指示詞は arò の1つしか知られていない。動詞にはさまざまな方位をもったものがみられるが、指示詞はこれらとは相関していない。恐らく、場所の副詞はこの動詞群と関係があると考えられるが、明らかではない。

Indo-European のスウェーデン語 [LINDGREN 1933; KÄRRE *et al.* 1965] は、「話し手に近い」と「話し手からさらに遠い」をしめす指示詞は、指示詞と場所の副詞の合成によってできている。そのため、単一語彙素のみをとれば1分型となる。これは後に述べる 3iF 型と構造的には同じであり、その違いはすでに1語として定着しているか、なお2語と認識されているかにかかっている。ここではスウェーデン語は1分型にふくめておく。場所の副詞においても、「話し手からさらに遠い」は2語からなっているが、3分されているとみて、1-3型（はじめの数字は指示詞の類型を、後者の数字は場所の副詞の類型をしめしている）としておく。

表5 スウェーデン語の指示詞と場所の副詞

	話し手に近い	話し手から遠い	話し手がさらに遠い
指示詞	den här	den	den där
場所の副詞	här	där	där dort

南米の Andean-Equatorial の Auca 語 [PEEKE 1973] は、特殊例である。指示詞と人称代名詞の体系は多かれ少なかれ相関しながら、別の体系をとるのが普通である。しかし、Auca 語の場合は、指示詞が人称代名詞の体系にとりこまれた形になっている。

Peeke が指示代名詞としてあげるものは、人称代名詞の強調形でしかない。特に 1 人称、2 人称はそうである。3 人称については、次のような区別がある。

- tōbē : 物 (単数)
- tōbēkā : 人間 (単数)
- tobēkā : 生きている動物
- tōbēda : 2 人の男性 (男性の親族)
- tōbēdādi : 2 人の女性 (女性の親族)
- tōbēdā : 尊称, 女性単数 (母親)

そして、これらはいずれも所有代名詞中の所有者のかわりにもちいられるものであり、他の言語の指示詞と非常にことなつたものである。

一方、場所の副詞は、指示詞と全く関係せず、運動の動詞と直接的にかかわっている。これらはひとつの別の体系をなし、6 つの方向の要素 (一般、上方、下方、下流、外側、内側) と、運動の動詞の語根 (表中には「もつて移動する」の例があげてある)、causal motion verb の語根 (-dō), 方向をしめす副詞をつくる接尾辞 (-bō), 場所をしめす副詞をつくる接尾辞 (-bōga) などと組み合わされる。前者の要素はさらに「話

表 6 Auca 語の運動にかかわる語 (Peeke [1973] より作製)

			運動の動詞の例 (もつてゆく/くる)	動作	方向	場所
			bā-	-dō	-bō	-bōga
一般	近づく	pō	bāpō	pōdō	pōbō	—
	はなれる	go	bāgo	godō	gobō	gobōga
上方	近づく	æ	baæ	ædō	æbō	æbōga
	はなれる	æi	baæi	(æidō)	(æibō)	(æibōga)
下方 (丘の下)	近づく	wæ	bawæ	wædō	wæbō	wæbōga
	はなれる	wææ	bawæi	(wæidō)	(wæibō)	(wæibōga)
下流	近づく	i	bāgi	idō	ibō	ibōga
	はなれる	igi		(igidō)	(igibō)	(igibōga)
外側	近づく	ta	bāta	tadō	tabō	tabōga
	はなれる	tago		(tagodō)	(tagobō)	(tagobōga)
内側	近づく	gi	bāgi	gidō	gibō	gibōga
	はなれる	gii		(giidō)	(giibō)	(giibōga)

注) () Peeke には記されておらず、著者の推定であることをしめす。

表7 1 分型の分布

言語グループ	1-2	1-3F	1-4NF	1-?	合計
1. Austronesian					
2. Austro-Asiatic					
3. Indo-Pacific	1			1	2
4. Australian					
5. Sino-Tibetan					
6. Ural-Altaiic					
7. Ibero-Caucasian					
8. Dravidian					
9. Indo-European		1			1
10. Afro-Asiatic				2	2
11. Nilo-Saharan					
12. Niger-Kordofanian					
13. Khoisan					
14. North & Middle American			1		1
15. South American					
合計	1	1	1	3	6

し手に近づく」と「はなれる」に細分される。

Peeke のしめす Auca 語の指示詞は、他の言語の指示詞と機能的にことになっており、他にも指示詞がある可能性があり、ここでは比較の対象からはずしておく。

(2) 2 分型

(a) 未分化2分型 (2i 型 : i は indiffereniated の略号)

距離にかかわらない指示詞と、「話し手に近い」あるいは「話し手から遠い」にあたる特定の場所をしめす指示詞とからなる。この類型は、1分型と遠近によって分化した2分型との中間的なものであると考えられる。この類型が、それらのどちらの方向から変化したものか、あるいは変化しつつあるのか、あるいは、この形で安定しているのかは興味深い問題である。

さて、「話し手に近い」指示詞が特定化されている例として、Austronesian の Lau 語 (Fiji 語の一方言) [CAPELL, C. 1957], Nengone 語 [TRYON 1967a; TRYON & DUBOIS 1969], Indo-European のポーランド語 [DE BRAY 1951], ロシア語 [STILMAN, STILMAN & HARKINS 1964], デンマーク語 [NIELSEN 1964; KOEFOED 1958], ノルウェー語 [RAKNES 1927] Khoisan の Naron 語 [BLEEK 1922] などがある。これらは 2iN 型 (N は near の略号) と呼ぶ。一方、「話し手から遠い」指示詞が特定されている例としては Afro-Asiatic の Tera 語 [NEWMAN, P. 1970] が

表8 2i 型の分布

言語グループ	2iN-1	2iN-2	2iN-29	2iF-2	合計
1. Aust.	1		1		2
2. Aust.-A					
3. Indo-P.					
4. Austr.					
5. Sino-T.					
6. Ural-Al.					
7. Ibero-C.					
8. Drav.					
9. Indo-E.		4			4
10. Afro-A.				1	1
11. Nilo-S.					
12. Nigir-k.					
13. Khois.		1			1
14. North A.					
15. South A.					
合計	1	5	1	1	8

知られるのみで、これら 2iF 型 (F は far の略号) と呼ぶ。

これらの指示詞に関係する場所の副詞をみると、Lau 語では一語しかないようであり、一方、デンマーク語やポーランド語、ノルウェー語、ロシア語、Tera 語、Naron 語では、分化した 2 分型をしめす。このように、場所の副詞には未分化 2 分型はみられず、指示詞と場所の副詞の類型は一致していない。

なお、Nengone 語の場所の副詞は、例外的に複雑な体系をもち、29種の場所の副詞が数えあげられる。これについては後に述べる。

(b) 2 分 型

この類型は、遠近によって区別される 2 つの指示詞からなるものである。遠近の区別点は、まず K₄ 点と考えてよいであろう (未分化 2 分型においても K₄ 点によって区別されていると考えられる)。そして、この類型は世界中にもっとも広くみとめられる類型であり、人間のつくり出した、もっとも基本的な類型のひとつと考えられる。

これらの 2 分型の言語では、指示詞に関係する場所の副詞においても 2 分型が圧倒的に多い (場所の副詞の明らかなもの内 77%)。しかし、指示詞と場所の副詞の空間の分割の仕方のことなるものもみられる。2i 型 (2 例)、3 分型 (20 例)、4 分型 (7 例)、5 分型 (2 例)、7 分型 (1 例)、8 分型 (1 例)、10 分型 (2 例) がみられる。これらの中で、もっとも多くしめる 3 分型は、後に述べる 3F 型がそのほとんど

表9 2分型にふくまれる言語

2-2i

Khois. /aumi, !o!kung [BLEEK 1922]

2-2

Aust. Arosi [CAPELL, A. 1971], Dehu [TRYON 1967b], Aulau, Bambatana, Roviana, Senesip, Tasiko, Uripiv, Utupau (Apako or Atago) [RAY 1926], Nias [SUNDERMANN 1913], Tonga [CHURCHWARD, C. 1953], Paulohi [STRESEMANN 1918]

Aust.-A. Cambodian [JACOB 1968; HUFFMAN 1970]

Indo-P. Andaman [RORTMAN 1887], Bongu [HANKE 1909], Asmat [DRABBE 1959a, 1959b]

Sino-T. Burmese [BRIDGES 1915; BEGBIE & JOSEPH 1877], Karen [JONES, R. 1961], Tāngkhul Nāga [PETTIGREW 1918], Mandarin [BALLER 1900; FENN & TEWKSBURY 1967] Dimasa, Garo, Ao Naga, Empes [WOLFENDEN 1929]

Ural-Al. Bashkir [POPPE 1964], Bruiat [POPPE 1960], Khalkha Mongorian [WHYMANT 1927], *Orkhon Turkic [TEKIN 1968], Tuvinian (Tuvan, Tuva) [KRUEGER 1977]

Drav. Gondi, Koḍagu, Kolani, Kota, Malto, Naiki, Ollari, Telugu, Toda, Tulu [EMENEAU 1955], Koya [EMENEAU 1955; TYLER 1969], Malayalan [EMENEAU 1955; SEKHAR 1953]

Indo-E. *Sanskrit [WILLIAMS, M. 1857; MÜLLER 1870], *Pali [DUROISELLE 1906], Assamese [KAKATI 1962; SHARMA 1963], Panjabi [CUMMINGS & BAILEY 1925], Gujarati [CARDONA 1965], Hindi [ETHERINGTON 1873], Lamani [TRAIL 1970], Hindustani [GREEN 1895], Urdu [DOWSON 1887], Persian [BOYLE 1966], Balochi [GIBLERTSON 1923], Southern Tati (Median) [YAR-SHAYER 1969], Irish [POKORNY 1914; LANE 1922; THURUEYSEN 1961], Icelandic [EINARSSON 1949], English [n.d.], Bulgarian [DE BRAY 1951], Ukrainian [STECHISHIN 1951; PODVESKO 1948; DE BRAY 1951]

Afro-A. Siwi [WALKER 1921], Anguss [FOULKES 1915], *Egyptian [GARGINER 1927], Kullo [ALLAN 1976], Mandaic [MACUCH 1965]

Nilo-S. Dongala [ARMBRUSTER 1960; TUCKER & BRYAN 1966], Logo [TUCKER 1940], Maasai [TUCKER & MPAAYEI 1955; TUCKER & BRYAN 1966; HOLLIS 1905], Nandi [HOLLIS 1969 (1906)], Nyimang [TUCKER & BRYAN 1966], Kanuri [KOELLE 1894; TUCKER & BRYAN 1966], Sara [n.d.]

Niger-K. Nilyamba, Pokomo, Giryama, Amba, Remi Bajumi [TUCKER & BRYAN 1957], Pulana, Kutsuwe [ZIERVOGEL 1954; DOKE 1967], Tiv [ABRAHAM 1940], Tikar, Vute [RICHARDSON 1957], Ganda [ASTON *et al.* 1954; TUCKER & BRYAN 1957], Kikuyu [MCGREGOR 1905], Gurmana, Korop, Efik, Uwet [JONHSTON 1919], Ibo [WARD 1936], Yoruba [DE GAYE & BEECROFT 1923], Santrokofi, Avatine [JOHNSTON 1919], Gerbo [INNES 1966], Vai [WELMERS 1976], Konyangi [JONHSTON 1919]

Khois. /kam-ka!ke, //ng!ke, Masarwa (Kakia), /nu//en, //k'au//en, !kung, Masarwa (Tati) [BLEEK 1922], Hottentot [TINDALL 1857]

North A. Ojiwa [BARAGA 1878, 1882], Yurok [ROBINS 1958], Wiyot [TEETER 1964; KROEBER 1911], Haida [SWANTON 1911b], Nez Perce [AOKI 1970], Tzotzil [COWAN, M. 1969], Yokuts [NEWMAN, S. 1946], Southern Sierra Miwok [FREELAND 1951; BROADBENT 1964; KROEBER 1911], Central Sierra Miwok [FREELAND 1951; KROEBER 1911], Plains Miwok, Coastal Miwok, Pomo [KROEBER 1911], Aztec [SCHOEMBAS 1949; ROBINSON 1966], Mazatec [BELMER 1892], Yuki [KROEBER 1911]

South A. Cayapa [ABRAHAMSON 1962], Quechua (San Martin) [COOMBS, COOMBS & WEBER 1976]

2-3

Aust. Ambrym [PATON 1971], Baki, Eromanga, Lifu [RAY 1926], Kaliai-Kore [COUNTS 1969], Bacan, East Makian [YOSHIDA 1977], Batak [TUUK 1971], Indonesian [n.d.]

Austr. Narrinyeri [THRELKELD 1892]

- Sino-T. Sikkimese [SANDBERG 1888]
 Ural-Al. Finnish [WHITNEY 1956; AALFIO 1966]
 Indo-E. French [GIRARD 1977], German [WILGHAGEN & HÉRAUCOURT 1972]
 Niger-K. Sukuma [TUCKER & BRYAN 1957], Nupe [MACINTYRE 1915]
 North A. Tonkawa [HOJER 1946], Diegueño [LANGDON 1970], Hopi [WHORF 1946;
 VOEGELIN & VOEGELIN 1957], Jacaltepec Mixtec [BRADLEY 1970]
- 2-4
 Sino-T. Balti [READ 1934]
 Afro-A. Hausa [KRAFT & KIRK-GREENE 1973; ABRAHAM 1959]
 North A. Wappo [SAWYER 1965], Tarascan [FOSTER 1969], Menomini [BLOOMFIELD
 1962], Coos [FRACHTENBERG 1922a], Lake Miwok [CALLAGAN 1965]
- 2-5
 Aust. Language spoken in St. Philip & St. James [RAY 1926]
 North A. Papago [MASON 1950]
- 2-7
 Indo-P. West Makian [YOSHIDA 1977]
- 2-8
 Sino-T. Róng (Lepcha) [MAINWARING 1876]
- 2-10
 Aust.-A. Nicobar [TEMPLE 1902]
 Indo-P. Tobelo [YOSHIDA 1977]
- 2-?
 Aust.-A. Kùrkù, Asufi [GRIERSON 1906]
 Sino-T. Lhota Naga, Mikir [WOLFENDEN 1929]
 Ural-Al. Manchu [MÖLLENDORFF 1892]
 Afro-A. Barasa, Burji, Hadiyyai, Kambata, Sidamo [HUDSON 1976], Werizoid [BLACK
 1976], Dasenech [SASSE 1976; TUCKER & BRYAN 1966], Oromo (Galla) [GRAGG
 1976; TUCKER & BRYAN 1966], Bedauye (Beja), Bilin, Soho, Iraqw, Alagwa (Alawa),
 Burunge (Burungi), Janijero [TUCKER & BRYAN 1966], Chaha, Tigirnya [LES LAU
 1966]
 Nilo-S. Mursi [TURTON & BENDER 1976], Keliko, Madi, Moru (Wa'di, Balimba, Kediru,
 Miza), Avukaya [TUCKER 1940], Bagimri, Berta, Binga, Bongo, Bulala, Debri,
 Didinga, Kara, Kresh, Lundu, Lugbara, Manvu, Mangabetu, Sungor, Fur, Maba,
 Masalit, Tubu (Tebu) [TUCKER & BRYAN 1966]
 Niger-K. Gbaya [RICHARDSON 1957], Nbugu [TUCKER & BRYAN 1957], Ndogo, Bai,
 Sere, Mba, Ma (Amadi) [TUCKER & BRYAN 1966], Lefena [JOHNSTON 1919], Masakin
 [TUCKER & BRYAN 1966], Mende [INNES 1967]
 North A. Cheyenne [PETTER 1950], Tsimshian, Nass [BOAS 1911a], Klamath [BARKER
 1964], Clallam [THOMPSON & THOMPSON 1971]
 South A. Siriono [PREIST & PREIST 1967], Tacana [OTTAVIANO & OTTAVIANO 1967]

注) *印は歴史上の言語をしめす

をしめる (例外はインドネシア語の 3H 型が1つある)。

(c) 2N 型および 2F 型

ところで、2分型 (および 2i 型) は K₄ 点を区別点とすると述べたが、他の分節点を区別点とする例外が 2例みられる。ひとつは Afro-Asiatic の Omitic 語群の Hamer 語 [LYDALL 1976] であり、今ひとつは、北アメリカの Macro-Algonquian の Tunica 語 [HAAS 1940] である。

表10 Hamer 語の指示詞の分類

区 別 点		話し手に 非常に近い	話し手から離れている	
動 物	非 動 物			
雄 (男性)	小さい	kaš	aga	ka
雌 (女性)	大きい 集合的複数	koš	ogoro	koro
特別の動物 の複数	特別なもの の複数	kiš	igiri	kira

Hamer 語においては、距離的には「話し手に非常に近い」と「話し手から遠い」の対立からなっている。表中の *aga* 系と *ka* 系の区別は明瞭ではないが、距離的に区別されるものではないらしい。Hamer 語の指示される物の分類の仕方も興味あるものであるが、距離的には、特に話し手に近いものだけを特定化している。この区別点は恐らく K_1 点 (距離ゼロの点) または K_2 点 (ヒジを体側につけたままで手がとどく点) が区別点であると想像される。これを 2N 型とよんでおく。

Tunica 語においては、遠近の対立による *hi-* (近) と *mi-* (遠) の指示詞の語根がみられる。ところが、*hi-* は K_4 点をこえた範囲にまで用いられる。この遠近の区別点を特定することはかなりむずかしいが、次のような場所の副詞の用例から A_4 また

表11 2 分型の種類と分布

言語グループ	2-2i	2-2	2-3	2-4	2-5	2-7	2-8	2-10	2-?	2N-?	2F-?	
1. Aust.		12	9		1							22
2. Aust. A.		1						1	2			4
3. Indo-P.		3				1		1				5
4. Austr.			1									1
5. Sino-T.		8	1	1			1		2			13
6. Ural-Al		5(1)	1						1			7(1)
7. Ibero-C.												0
8. Drav.		12										12
9. Indo-E.		17(2)	2									19(2)
10. Afro-A.		5(1)		1					17	1		24(1)
11. Nilo-S.		7							23			30
12. Niger-K.		24	2						11			37
13. Khois.	2	8										10
14. North A.		15	4	5	1				5		1	31
15. South A.		2							2			4
	2	119(4)	20	7	2	1	1	2	63	1	1	219(4)

(注) () 内の数字は、歴史上の言語の数字をしめしている。

は A_3 点ではないかと考えられる。

- hí·hēi : 話し手に近い場所
- híhuni : 遠い場所
- híhалуhta : 下方の遠い場所
- hítiriši : 正面の近い場所
- míhuni : 遠い場所
- místihto'hku : 少し遠い場所

この類型をここでは 2F 型としておく。この類型は 2i 型の遠方の方を特定化する Tera 語と構造的には同じようなものであり、特に遠いものを指示することに力点がおかれているように考えられる。

2.2.2. 話し手を中心とした類型 (S 型)

(1) 3S 型 (S は speaker の略号)

3S 型の場合、ひとつの分節点は典型的な 2 分型にみられた K_4 点であると考えてよい。3S 型はそれに、さらにひとつの分節点を加えたものである。そしてどの分節点が増えられるかによって、3S 型の類型はことなる。

実例に則してみると、 A_4 点と推定される類型がもっとも多い。ついで、同じく聴覚空間内の A_1 , A_2 , A_3 のいずれか、多分 A_2 点はその代表的なものと考えられる類型がみられる。前者を 3F 型、後者を 3M 型 (M は middle の略号) と呼ぶ。

ほとんどの 3S 型は、このどちらかにふくまれると考えられるが、わずかの例外がみられる。まず、分節点は A_4 点であるが、完全に 3 つの空間に分割されず、その内のひとつはどの空間に属すものをも指示できる指示詞をもっている未分化 2 分型に対する未分化 3 分型 (3iF 型) が存在する。つぎに、もうひとつの分節点が筋覚空間内の K_1 , K_2 , K_3 のいずれかである類型 (3N 型) がある。そして、今ひとつは、 V_3 点を分節点とする 3I 型 (I は invisible の略号) がある。多くの場合、視覚の外側のものの指示は、空間的成分として組みこまれず、むしろ、anaphoric な指示として出現する方が多い。しかし、まれに空間的に、すなわち、「みえないほど遠い」ものをさす指示詞をもつものがある。3I 型はそうしたものである。

(a) 3F 型

K_4 点、 A_4 点で区別される類型であり、3S 型中、もっとも多いものである。話し手中心の 3 分型 117 例中、83 例 (約 71%) が 3F 型である。

指示詞に関係する場所の副詞においても 3F 型がもっとも多いが、2 分型 5 例、5

分型 1 例 (Malakmalak 語), 6 分型 2 例 (Shambala 語, Zulu 語), 7 分型 1 例 (Hupa 語), 30 分型 1 例 (Mundari 語) などがある。これらの場所の副詞の種類については, 各類型の中でふれる。

以下に 3F 型の例として, Austronesian の Melanau 語 [CLAYRE 1973] の例をあげておく。

表12 3F 型にふくまれる言語

3F-2

- Aust. Fiu [RAY 1926]
- Aust.-A. Annamese [EMMENEAU 1951]
- Austr. Thargari [KLOKEID 1969]
- Indo-E. Slovenian [DE BRAY 1951; HELTBERG 1970]
- South A. Ipurimá [POLAK 1894]

3F-3F

- Aust. Chamorro [PREISSIG 1918], Iai [RAY 1926], Maguindanao [JUANMART 1906], Melanau [CLAYRE 1973]
- Indo-P. Marind [DRABBE 1955], Mejprat [ELMBERG 1968], Sentani [COWAN, H. 1965]
- Austr. Ninyung [THRELKELD 1892]
- Drav. Kui [EMENEAU 1955; FRIEND-PEREIRA 1906], Kuwi [EMENEAU 1955]
- Indo-E. Dutch [WELY 1971], Byelorussian [DE BRAY 1951], Serbo-Croatian [DE BRAY 1951; DRVODELÍÉ 1962; FILIPOVIĆ 1970; HELTBERG 1970]
- Afro-A. Arabic [GREEN 1893, 1915]
- Nilo-S. Temein [TUCKER & BRYAN 1966]
- Niger-K. Gusii, Taita, Caga, Langi, Gisu [TUCKER & BRYAN 1957], Tonga, Tswa, Ronga Phuthi, Pai, Swazi, South Sotho, Toro, Bwisi, Koría, Luhya, Nata, Sogo, Ngomi [DOKE 1967], Ila [SMITH 1907], Otoro [TUCKER & BRYAN 1966], Fulani [TAYLOR 1953]
- North A. Maidu [DIXON 1911; SHIPLEY 1964], Siuslawan [FRACHTENBERG 1922b], North Sierra Miwok [KROEBER 1911], Eastern Ojiva [BLOOMFIELD 1958], Maya [TOZZER 1921], Téton [BOAS & SWANTON 1911; BUECHEL 1939]
- South A. Piro [MATTESON 1965], Quechua (Cuzco-Collao) [CUSHUAMAN G. 1976; MIDDENDORF 1890]

3F-5

- Austr. Malakmalak (Malluk-malluk) [BIRK 1976]

3F-6

- Niger-K. Shambala [TUCKER & BRYAN 1957], Zulu [LEWIS 1893; DOKE 1967]

3F-7

- North A. Hupa [GODDARD 1911]

3F-30

- Aust.-A. Mundari [HOFFMAN 1903, n.d.; GRIERSON 1906]

3F-?

- Aust.-A. Kařiā [GRIERSON 1906]
- Nilo-S. Nera [THOMPSON 1976; TUCKER & BRYAN 1966], Tama, Shatt, Liguri, Dagu of Dar Fur, Dagu of Dar Sila, Murle, Nuer, Dinka, Lango, Luo, Kunama [TUCKER & BRYAN 1966]
- Niger-K. Kgalagadi [DOKE 1967], Vanuma [TUCKER & BRYAN 1957], Mundu, Ngbaka Ma'bo, Mayogo, Gbaya (Ngabaka Gbaya, Gbaya Kara), Togbo, Ngbanidi, Ndungo, Dongo, Barambu, Katla, Rashad, Tagoi [TUCKER & BRYAN 1966]
- North A. Fox [JONES, W. 1911]

表13 Melanau 語の指示詞と場所の副詞

	話し手に近い	話し手から遠い	話し手からさらに遠い
指示詞	'ih	in	inan
場所の副詞	gi'ih	giin	

(b) 3M 型

3M の分節点は 3F 型の分節点よりも明らかに話し手に近い。多くの場合、中位の距離と記されている。3M 型の分節点は、A₂ 点をもっとも適当な点と考えられるが、A₁ 点や A₃ 点の可能性がないわけではない。しかし、A₁ 点はあまりに近すぎるし、A₃ 点はあまりに遠すぎると思われる。ここでは、3M 型の分節点は A₂ 点としておく。

さて、3M 型に含まれるものは、28例みられるが、3F 型に比べると1/3程度の出現率にすぎない。

表14 3M 型にふくまれる言語

3M-2	Indo-E. Singhalese [WIEKREMASINGHE 1916; RANAWAKE 1968]
3M-3M	Aust. Java [HORNE 1963], Motu [LAWES 1896], Murut [PRENTICE 1971], Sakao [GUY 1974]
	Indo-P. Magī (Mailu) [THOMSON 1975]
	Drav. Tamil [EMENEAU 1955; CALDWELL 1875], Kannada [EMENEAU 1955; KITTEL 1903; SPENCER 1941], Kurukh, Brahui, Parji [EMENEAU 1955], Pengo [EMENEAU 1955; BURROW & BHATTACHARYA 1970]
	Indo-E. Bengali [RAY, HAI & RAY 1966], Rumanian [NANDRIS 1961]
	Nilo-S. Fadicca (Fiyadikka) [TUCKER & BRYAN 1966]
	Niger-K. Kongo [BENTLEY 1967 (1889)], Yao [SANDERSON 1922], Nyankole [MORRIS & KIRWAN 1957], Fulup [JOHNSTON 1919]
	North A. Takelma [SAPIR 1922]
	South A. Chimu (Yunca) [MIDDENDORF 1892], Bacairi [STEINEN 1892]
3M-4	North A. Acoma [MILIER 1965]
	South A. Baure [BAPTISTA & WALLIN 1967]
3M-?	Sino-T. Bārà [WOLFENDEN 1929]
	Nilo-S. Sara Mbai, Kadaru, Midob [TUCKER & BRYAN 1966]
	North A. Gurani [ROSBOTTOM 1967]

この 3M 型は、後に述べる「聞き手の空間」をもつ 3H 型と極めて近い関係にある。すなわち、3M 型と 3H 型には少なくとも 2 つの中間的な副類型が存在し、相互に入れ換る可能性をもっている [吉田 n. d.]。

3M型にふくまれるもののほとんどの場所の副詞も3M型であるが、場所の副詞が2分型のもの1例(Singhali語)、4分型2例(Acoma語、Baure語)がある。Singhali語 [WIEKREMASINGHE 1916; RANAWAKE 1968] では、「話し手から遠

い」に対応する場所の副詞を欠いている。4分型の2例については、次の4分型の項で述べる。

表15 Murut語(Timugon方言)の指示詞と場所の副詞

	話し手に近い	話し手からやや遠い	話し手から遠い
指示詞, 場所の副詞	gitio	ginio	gili

3M型の例としてMurut語(Timugon方言) [PRENTICE 1971] を左にしめしておく。

(c) 3 i F 型

この類型はやや問題のある類型であるが、ここでは独立した類型としてあつておく。

Czech語 [CHESHIER, KLOZNER & SRÁMEK 1935; DE BRAY 1951; HARKINS 1953; HELTBERG 1970] の場合を例にとると、指示詞tenは、遠近にかかわらず用いることができる。そして、-to, tam-を接辞することにより、「話し手に近い」と「話し手から遠い」をそれぞれ特定化していると考えられる。この場合、「話し手から遠い」が特定されているので、恐らくA₄点であると考えられる。一方、場所の副詞は、遠近によって区別されるtuとtamの2つしかない。これらは、もともとは、指示詞tenの場所の副詞と方向の副詞であったものが、現在の形になったと考えられる。そのため、形態的にはtuはtenに対応するものであるが、意味的にはすでに変化しており、tentoに対応するものとなっている。なお、古語としてonenという形があるが、これはtamtenにとってかわられたと思われる。

Slovak語 [HROBAK 1944; DE BRAY 1951] もCzech語とほぼ同様と考えてよい。1-3型にふくめたスウェーデン語では「話し手に近い」と「話し手から遠い」がともに場所の副詞と組み合わされて特定化している。この例がきわめて、Czech語に近いものであることは明らかである。

表16 Czech語の指示詞と場所の副詞

	話し手に近い	両者の間	話し手から遠い
指示詞	tento	ten	tamten
場所の副詞	tu	tam	

(d) 3 N 型

Chukchee-Kamchadal 語群の Kamchadal 語 [BOGORAS 1922] は, ti'n と nu' の区別点は明確ではないが, 恐らく 3N 型と考えられる。その分節点は K₂ 点または K₁ 点と考えられる。

表17 Kamchadal 語の指示代名詞と副詞

区 別 点		指示代名詞	場所の副詞
話し手に近い	非常に近い	ti'n	te'a
	近 い	nu'	nux
話し手に遠い		hē'nñm	ɛ'nki, xu

(e) 3 I 型

みえなくなる点 (V₃ 点) を区別点にもつものに, Bantu 系言語の Bobangi 語 [WHITEHEAD 1964 (1899)], と Andean-Equatorial の Ignaciano 語 [OTTO & OTTO 1967] がある。Ignaciano 語では場所の副詞は記されていないが, Bobangi 語では, 「みえないほど遠い」に対応する副詞を欠いている。

表18 3S 型の種類と分布

言語グループ	3F							小計	3iF 2	3M				小計	3N 3	3I		合計
	2	3	5	6	7	30	?			2	3	4	?			2	?	
1. Aust.	1	4						5			4			4				9
2. Aust.-A.	1						1	1										3
3. Indo-P.		3									1			1				4
4. Austr.	1	1	1					3										3
5. Sino-T.													1					1
6. Ural-Al.																		
7. Ibero-C.																		
8. Drav.		2						2			6			6				8
9. Indo-E.	1	3						4	2	1	2			3				9
10. Afro-A.		1						1										1
11. Nilo-S.		1						12	13		1		3	4		1		17
12. Niger-K.		22		2				14	38		4			4				43
13. Khois.																		
14. North A.		6				1		1	8		1	1		2	1			11
15. South A.	1	2							3		2	1	1	4			1	8
合 計	5	45	1	2	1	1	28			2	1	21	2	5		1	1	
	83									29				1	2		117	

(f) その他

Chukchee-Kamchadal 語群の Koryak 語 [BOGORAS 1922] の指示詞は 5 分型であるが、場所の副詞は 3 分型である。ただし、この 3 分型は、「話し手に近い」、「話し手から遠い」の 2 つに「話し手とあるものとの間にある」場所をしめす副詞がある。この副詞はこれまでどの類型にも属さないものである (表 59 参照)。

(2) 4 S 型

これまでに見た例から、4S 型として可能性のあるものを考えてみると図 2 のようになる。この場合、 K_4 点は総ての種類にあると考えている。そして、 K_2, A_2, A_4, V_3 の各点との組み合わせを考えたものである。これら以外に A_1 点、 V_1 (また V_2) 点を区別点とするやや特殊な類型がみられる。これらは 3M-4 型の場所の副詞にのみ、みられる類型である。

さて、この中で、指示詞および場所の副詞の両方にみとめられない類型は 4FI 型 (F: far, I: invisible を組合せたもの、以下同様) である。しかし、4FI 型が理論的に出現しないとはいえ、今後、みいだされる可能性がなくはない。また、この中で、4NM 型、4NI 型、4MI 型はそれぞれ 1 例しかみえず、それに対して 4NF 型 15 例、4MF 型が 7 例みられる。これらは、先の 3 分型から十分に予想される結果である。

(a) 4NF 型

4NF 型は、基本的には 2 分型であり、それぞれの指示詞の強調形によって、さらに 2 分されたものと考えてよい。2-4 型の副詞の 4 分型は総て 4NF 型であることもこれをうらづけている (Balti 語, Wapo 語, Tarascan 語, Menomini 語, Coos 語)。また、一方 4NF-2 型 2 例 (Uighur 語, Lusatian 語) が知られていることも

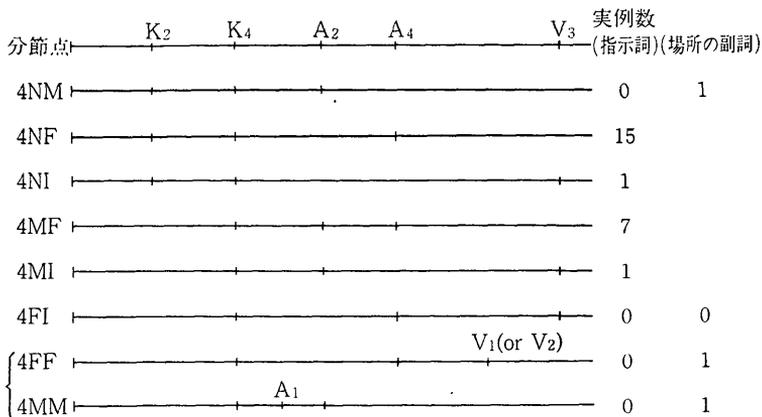


図 2 可能性のある 4S 型の類型

これを支持している。

また Bantu 系言語では、一般的な指示詞と実際にさしめず指示詞の2組がみられ、後者は一種の強調形のような意味をもち、距離に分離して4分型、すなわち4NF型となっている。

次にハンガリー語 [HALL, R. 1938; ORSZÁGH 1979] の例をしめしておく。なお、Chopi 語 [DOKE 1967] では場所に関するクラスにおいて第2のポジション（一般的な指示に対応する）の指示詞を欠いており3分型となる。原意のままであれば3N型であるが、意味的变化を恐らくはおこしており3F型であると思われる。

表19 ハンガリー語の指示詞と場所の副詞

区 別 点	指 示 詞	場 所 の 副 詞	
話し手に近い	非常に近い (強調形)	emcz	emitt
	近 い	ez	itt
話し手から遠い	遠 い	az	ott
	非常に遠い (強調形)	amaz	amott

表20 4NF型にふくまれる言語

-
- 4NF-2
 Ural-Al. Uighur [NADZHIP 1971]
 Indo-E. Lusatian (Wendish) [DE BRAY 1951]
- 4NF-3F
 Niger-K. Chopi [DOKE 1967]
- 4NF-4NF
 Ural-Al. Hungarian [HALL, R. 1938; ORSZÁGH 1974], Chagatay [ECKMANN 1966],
 Tatar [POPPE 1963]
 Niger-K. Konzo, Zigula, Gogo [TUCKER & BRYAN 1957], Central Karanga [MARCONNÉS
 1931], Venda [DOKE 1967]
- 4NF-8
 Niger-K. Shona [DOKE 1967; FORTUNE, G. 1967], Mwera [HARRIS 1950]
- 4NF-?
 Niger-K. Lozi, Kalanga [DOKE 1967]
-

(b) 4MF 型

強調形をのぞいた4S型の中では、この類型が典型的なものであろう。すなわち、3S型の3M型と3F型のあわさったものである。ニューギニアのMountain Koiala語 [GARLAND & GARLAND 1975] の例を次に示しておく。

この類型にふくまれるものには次のようなものがある。なお Somali 語の副詞は3F型である(表2参照)。

表21 Mountain Koliala 語の指示と場所の副詞

		話し手に 近い	話し手に遠い		
			近 い	やや遠い	遠 い
指示 代名詞	普通	ko	ke	uke	uoke
	強調	iko	ike		
場所の 副詞	普通	koe	kee	ukee	uokee
	強調	ikoe	ikee		

表22 4MF型にふくまれる言語

4MF-3F

Afro-A. Somali [DE LARAJASSE & SAMPONT 1897; KIRK 1905; TUCKER & BRYAN 1966; BELL, C. 1968]

4MF-4MF

Aust. Kambera (Sumbanese) [WIELENGA 1909]

Indo-P. Mountain Koliala [GARLAND & GARLAND 1975]

Niger-K. Ndebele [ELLIOTT 1921]

North A. Tao [TRAGER 1946]

South A. Aymara [MIDDENDORF 1891]

4MF-?

Aust.-A. Chrau [THOMAS 1971]

表23 Elbert と Dyen の Truk 語の指示詞と場所の副詞

Elbert [1947]			Dyen [1965]		
区 別 点	指示代名詞	場所の副詞	場所の副詞	指示代名詞	区 別 点
話 し 手 に 近 い	ei, eie	ikei	jikeej	eej	近 い
	en	ikan		en	未 来
話 し 手 か ら 遠 い	ena	ikena	jikena	ena	やや近い
	emun	ikemun			
	enan, nan	ikenan	jikenaan	enaan	遠 い
みえない	ewe, we	ikewe	jikewe	ewe	過 去
				eoob	みえない, しかし それがあることは 知られている
			jije		くりかえしに用い る

(c) 4MI 型

この類型に含まれるものは、Austronesian の Truk 語 [ELBERT 1947; DYEN 1965] のみである。ただし、Elbert と Dyen では前頁の表23のように少しことなっているが、ここではより詳しい記述をしている Dyen の方をとっている。なお、「みえない」に対応する場所の副詞を欠いているため場所の副詞は 3M 型となる。

(d) 4NI 型

北米の Na-Dene の Tlingit 語 [SWANTON 1911a] は 4NI 型と考えられる。ただし、「話し手から遠い」の指示詞 *yu* は英語の定冠詞的用法とよく似た用いられ方をしている。また「さらに遠くて、みえない」の指示詞 *we* に対応する場所の副詞を欠いているため、その類型は 3N 型となる。

表24 Tlingit 語の指示詞と場所の副詞

区 別 点		指示代名詞	場所の副詞
話し手に近い	非常に近い	he	he'do
	近 い	ya	yā't!a
話し手から遠い	遠 い	(yu)	yu'do
	さらに遠い (みえない)	we	—

(e) 4NM 型

この類型をもつ指示詞は知られていない。Aztec-Tanoan の Luisiño 語 [KROEBER & GRACE 1960] の場所の副詞にみられる類型である。Luisiño 語は後に述べるごとく 4HI 型であったものが、「みえないほど遠い」ものを指示する指示詞が anaphoric な用法にもちいられるようになり 3H 型に変わったものである。場所の副詞は、それらの指示詞と相関しながらも、必ずしも対応せず、「聞き手に近い」空間をもたず *i:p* (話し手に非常に近い), *iváʔ* (近い), *paʔ* (やや遠い), *wunáʔ* (遠い) の4つからなっている。

表25 Acoma 語の指示詞と場所の副詞

区 別 点	話し手に近い	話し手から やや遠い	話し手から遠い	
			遠 い	さらに遠い
指 示 詞	dúwa	héc	wéc	
場所の副詞	dóí	?ai	wáa	wái

(f) 4FF 型

この類型も指示詞にはみられないもので、3M 型の Acoma 語の場所の副詞にみられる。この場合、A₄ 点以遠の多分 V₁ 点でさらに分けられているものと思われる。Acoma 語の指示詞と場所の副詞を表25にしめしておく。

(g) 4MM 型

同じく指示詞にはみられない類型であり、Andean-Equatorial の Baure 語の場所の副詞にみられる類型である。この例では、「やや遠い」場所がさらに遠近で2分さ

表26 Baure 語の指示詞と場所の副詞

			話し手に近い	やや遠い		遠い
				近い	遠い	
指示詞	単数	男	te	ten		teč
		女	ti	tin		tič
	複数	—	nen		neč	
場所の副詞			ne	nan	nakašo	noy

表27 4S 型の種類と分布

言語グループ	4NF					小計	4MF			小計	4MI	4NI	合計
	2	3	4	8	?		3	4	?		3	3	
1. Aust.							1			1	1		2
2. Aust.-A.								1		1			1
3. Indo-P.							1			1			1
4. Austr.													
5. Sino-T.													
6. Ural-Al.	1		3			4							4
7. Ibero-C.													
8. Drav.													
9. Indo-E.	1					1							1
10. Afro-A.							1			1			1
11. Nilo-S.													
12. Niger-K.		1	5	2	2	10		1		1			11
13. Khois.								1					
14. North A.										1		1	2
15. South A.								1		1			1
合計	2	1	8	2	2	15	1	5	1	7	1	1	24
											2		

れ、その分節点は恐らく A₁ 点であると考えられる。Baure 語の指示詞と場所の副詞を前頁にしめしておく。

(3) 5 S 型

5S型にふくまれるものには指示詞に2例、場所の副詞に2例ある。まず, Austronesian のマダガスカル語 [RAJAONA 1972] は、非常に複雑な指示詞の体系をもっている。

指示詞は、代用的 (substitutive) と提示的 (presentative) に分けられ、前者は「みえる」「みえない」の対立をもっている。代用的な指示詞が他の言語の一般的な指示詞と同じとみてよい。提示的な指示詞は predicative (属辞) の機能のみをもつものである。さらに、これらは単複および「一般」の3つに分けられる。この場合の「一般」は「あるものの集したものを」をさす。一方、距離的には、「話し手のいる場所」と「話し手からはなれた場所」に分けられ、後者はさらに遠近によって4分される。また、話し手のいる場所をのぞいた場所において、距離にかかわらず用いられる指示詞がある。この場合には、「正確」にあるものをさす場合と、「広い範囲にわたるもの」、あるいは「ぼんやりとしたもの」をさす場合とがある。

さて、空間にかかわる成分のみを取り出すと、話し手中心の5分割となる。そして、

表28 マダガスカル語の指示詞と場所の副詞

区別点			話し手のいる場所		話し手から離れた場所				距離にかかわらない (話し手のいる場所をのぞく)		
			正確	広い	非常に近い	近い	遠い	非常に遠い	正確	広い	
指示詞	代用的	みえる 単	ity		itsy	itsý	iroa	irý	io	iny	
		みえる 複	ineto		iretsy	iretsý	ireroa	irerý	ireo	ireny	
		みえる 一般	itony		itsony		irony		—		
	提示的	みえない 単・複	izato	izaty	izatsy	izatsý	izaroa	izarý	izay, izoa	izany	
		みえない 一般	izatony		izatsony		izarony		—		
		みえない 単・複	—								injao, injay, inao, inay
場所の副詞	みえる 単	inty		intsy	intsý	indroa	indrý	indro	iny		
	みえる 複	indreto		indretsy	indretsý	indreroa	indrerý	indreo	indreny		
	みえる 一般	intony		intsony		indrony		—			
	みえない 単・複	—								injao, injay, inao, inay	injany
場所の副詞	みえる	eto	ety	etsy	etsý	eroa	ery	eo	eny		
	みえない	ato	aty	atsy	atsý	aroa	ary	ao	any		

それらの分節点は、 K_4, A_2, A_4, V_1 の各点と推定される。それ故 5MFF 型と類型化されるものであろう。

Niger-Kordofanian の Adamawa-Eastern 語群の Zande 語 [TUCKER & BRYAN 1966] は、基本的には 2 分型であるが、その遠い方の指示

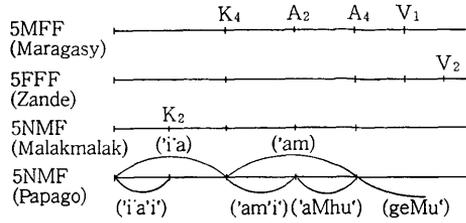


図3 5 S 型の 4 つの類型

詞に場所の後置詞 (locative postposition) をともなうこと、さらにその母音を長音化させることによって、遠さの程度が表現される。指示形容詞でしめすと、 $g_1-r_è/gu-r_è$ が基本形であり、後者が $gù-dú-r_è$ となることによってさらに遠いことをしめし、 $gù-dú-yò r_è, gù-dú-yòò r_è$ と $du-$ の長母音化によって遠さの程度が表現できる。こうした母音の長音化によって、遠さをしめすことは、Zande 語のみにかぎらないであろう。しかし、わざわざ記されている故に、ここでは 5 分型としておく。また、長音化による遠さの表現は、かなり心理的、文脈的なものであり、明確な区別はあるいは意味のないことであるかもしれないが、ここでは、次の分節点を推定しておく。すなわち、 K_4, A_4, V_1, V_2 の各点であり、類型化すると 5FFF 型となる。場所の副詞は記されておらず不明である。

Australian の Malakmalak 語の場所の副詞にみられる類型は上記のものとはことなつたものである。この言語の指示詞は 3F 型であるが、場所の副詞に強調形がみられ、 $kina$ は ki よりも近い場所を示し、 $gunna$ は gun よりも遠く、 $tatuk$ よりも近い場所をしめす。これらの分節点は、 K_2, K_4, A_2, A_4 と考えられ、5NMF 型と考えられる。

表29 Malakmalak 語の指示詞と場所の副詞

区別点	指示代名詞	場所の副詞	
		普通の形	強調形
話し手に 近い	ki	ki	kina
// に 遠い	gun	gun	gunna
// にさらに 遠い	tatuk	tatuk	—

Aztec-Tanoan の Papago 語 [MASON 1950] の指示詞は 2 分型であるが、場所の副詞は 5 分型と考えられる。 $'i'a, 'am, gem$ の 3 つが基本的な場所の副詞であり、3F 型と考えられる。ただし、 gem のみは単独では用いられない。この 3 つの副詞に

-i' (近い), -hu' (遠い) の接尾辞が付加される。この場合, 'am のみが両方の接辞をとることができ, 他の2つはそれぞれ1つの接辞しかとれない。その結果, 図3のように重複した形での5分型になる。そして, その類型は, Malakmalak 語と同じ5NMF型であると考えられる。

(4) 6S 型

指示詞には6S型は知られていない。Niger-Kordofanian のBantu系言語のShambala語, Zulu語の場所の副詞にみられる類型である。これらの指示詞の類型は3F型であり, これがさらに遠近で2分されて6分型になったものである。分節点でしめすと, K_2, K_4, A_2, A_4, V_1 の5点で分割されていると考えられる。

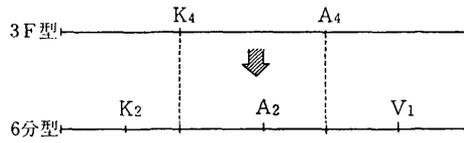


図4 3F型から6分型への変化

(5) 8S 型

話し手中心の類型としての7S型はみとめられなかった。8S型は, Bantu系言語のShona語, Mwera語の場所の副詞にみられる類型で, これらの指示詞の類型は4NF型であった。8分型は, この4NF型をさらに遠近で2分したものである。単純に2分すれば図5のようになるが, 実際の用い方は明確でなく, ここにみるような分割とはことなる可能性はかなり高い。特に話し手近くで4分されることは, かなり可能性の低いことと考えられる。

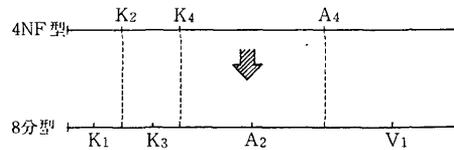


図5 4NF型から8分型への変化

2.2.3. 「聞き手に近い」空間をもつ類型 (H型)

「聞き手に近い」空間をもつ類型は, 話し手中心の類型とは, 基本的にことなった性格をもっている。この類型のもっとも基本的な要素は「話し手に近い」, 「聞き手に近い」, 「両者からはなれている」の3つであるが, これはまさに人称代名詞の体系と平行的なものである。そして, 人称代名詞の inclusive な私達に対応する「話し手と聞き手に近い」要素も十分にその存在が予想されるし, 実際にそうした要素も見出すことができる。また一方で, 話し手中心の類型では, 話し手を中心とした同心円状の空間分割が行なわれるのに対して, この類型では, 常に聞き手の位置が重要な要素

であり、聞き手の位置によって空間の分割の仕方にかかなりの変化がみられる。単純に距離の問題として処理することができない類型である。

このように、話し手中心の類型と「聞き手に近い」空間をもつ類型とは、非常にことなつた類型ではあるが、すでに述べたごとく、話し手中心の類型の 3M 型は「聞き手に近い」空間をもつ類型ときわめて近い関係にあり、相互に変化する可能性をはらんでいる。それ故、この 2 つの類型は全く関係のない独立した類型というわけではない。

「聞き手に近い」空間をもつ類型は、聞き手の位置によって変化するため、この類型を図化することは容易ではない。しかし、すでに述べたように、K₄ 点から A₁ 点までの距離を「聞き手に近い」空間としてここではとりあつておく。

(1) 3H 型 (H は hearer の略号)

3H 型は先に述べたごとく、「話し手に近い」、「聞き手に近い」、「両者からはなれている」の 3 つの空間からなるものがほとんどであるが、1 つだけ例外がある。それは 3HN 型とした Australian の Awabakal 語である。

(a) 3H 型

3H 型にふくまれるものは、48 例みられた。その内、場所の副詞が 2 分型のものが 5 例、4 分型が 3 例、5 分型が 1 例 (Wishram 語) ふくまれている。この内、場所の副詞が 4 分型の Luiseño 語はすでに述べたごとく 4NF 型であり、この言語では場所の副詞と指示詞の類型が例外的にことなつたものである。他の 4 分型と 5 分型は、それぞれの項でふれることにする。

(b) 3HN 型

Australian の Awabakal 語 [THRELKELD 1892] は 3 つの指示詞をもっているが、「両者から遠い」をさししめず指示詞を欠いている。このように指示する空間に空白のある例はこの言語が唯一の例である。

この例に関係のありそうな例をさがしてみると、Macro-Siouan の Ponca 語 [BOAS & SWANTON 1911] がある。この言語では、「話し手に近い」と「聞き手に近い」の

表30 Awabakal 語の指示詞と場所の副詞

	話し手に近い		聞き手に近い
	話し手のいるところ	話し手の手のとどくところ	
指示詞	gali	gala	galoa
場所の副詞	unti		unnug

一組の指示詞と、「話し手に近い」と「話し手から遠い」のもう一組の指示詞があり、これらが組み合わさって 3H 型を形成している。それ故に、「話し手から遠い」は「聞き手に近い」空間をも含んでおり、他の 3H 型とは少しことなった構成になっている。Awabakal 語はこの後者の組を欠いたものといえるかもしれない。さらに、Ponca 語では「話し手から遠い」の指示詞はあまり用いられないといわれ、いよいよ Awabakal 語と近い類型になる。

表31 3H 型にふくまれる言語

3H-2

- Aust. Nadrau [CAPELL, C. 1957]
- Austr. Maranungku (Maranunggu) [TRYON 1970]
- Indo-E. Portuguese [DIAS, LATHOP & ROSA 1977; D'ALBUQUERQUE n.d.], Macedonian [DE BRAY 1951]
- North A. Lower Chinook [BOAS 1911c]

3H-3H

- Aust. Fijian [CAPELL, A. 1957], Gilbertese [COWELL 1951], Hawaiian [PUKUI & ELBERT 1971; ALEXANDER 1891; ANDERWS 1854], Hiliaynon [MOTUS 1971], Ilokano [BERNABE LAPID & SIBAYAN 1971], Iraya (Maugyan) [TWEDELLE 1958], Kapingamarangi [LEIBER & DIKEPA 1974], Maori [MAUNSELL 1894; NGATA 1964; CHURCHWARD, S. 1951], Mongondow (Bolaang-Mongondow) [DUNNEBIER 1951], Pangasian [BENTON 1971], Rotuman [CHURCHWARD, C. 1940], Samoan [CHURCHWARD, S. 1951; MARSACK 1962; NEFFGEN 1918], Yapese [JENSEN 1977], Tiruray [SCHLEGEL 1971], Waropen [HELD 1942]
- Indo-P. Arapesh [FORTUNE, R. 1942], Jabim (Jabêm) [DEMPWOLFF 1939], Korafe [FARR & FARR 1975]
- Sino-T. Thai [LANYO-Origill 1955]
- Ural-Al. Korean [MARTIN & LEE 1969], Japanese [n.d.], Turkic [HONEY 1957 (1949); Iz & Hony 1968 (1954)]
- Ibero-C. Georgian [TSCHENKELI 1958], Basque [BERRONDO 1965; GUIASOLA 1944]
- Indo-E. Catalan [JOAN 1943], Italian [HAZON 1961], Spanish [n.d.], Greek [DAVIS 1955; KAEGI 1949; SMYTH 1956], *Latin [LEWIS & SHORT 1969]
- Nilo-S. Teso [HILIDERS & LAWRENCE 1957, 1958; TUCKER & BRYAN 1966], Bari [SPAGNOLO 1933; TUCKER & BRYAN 1966], Shilluk [KOHEN 1933; TUCKER & BRYAN 1966], Acoli [CRAZZOLARA 1938; MALANDA 1952]
- Niger-K. Swahili [MADAN 1905; ASTON 1961], Xhosa [DOKE 1967; JORDAN 1966]
- North A. Kathlamet [BOAS 1911c], Nahuatl [OLMOS 1875]
- South A. Mucushi [WILLIAMS, J. 1932]

3H-4

- Aust. Balawaia [KOLIA 1975]
- North A. Luiseño [KROEBER & GRACE 1960]
- South A. Panoan [D'ANS 1970]

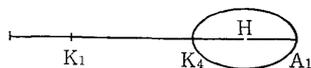
3H-5

- North A. Wishram [BOAS 1911c]

3H-?

- Nilo-S. Lotuho, Uduk [TUCKER & BRYAN 1966]
- North A. Ponca [BOAS & SWANTON 1911], Kwakiutl [BOAS 1911b]
- South A. Mocovi [QUEVEDO 1893]

今ひとつの例は Philippines の Tiruray 語 [SCHLEGEL 1971] である。この言語では、もともと「話し手に近い」、「聞き手に近い」、「両者からはなれている」の指示詞があったと推定されるが、後に「両者からはなれている」の指示詞が anaphoric な用法として頻用され、ついには、もとの意味を失ったらしい。一方、その穴をうめるため、三人称代名詞が代用され、それが定着したと考えられる。



H : 聞き手

図6 Awabakal 語の指示詞の空間分割 (3HN型)

この例から考えれば、Awabakal 語において三人称代名詞が「両者からはなれている」の指示詞として用いられていないかどうかの疑問がのこる。何故なら、指示される空間に空白ができるということは少々、考えにくいことだからである。しかし、Ponca 語のように、「話し手から遠い」の指示詞の頻度が低いということを考えれば、あるいは、このような形で安定するのもかもしれない。

なお、Awabakal 語では、「話し手のいるところ」と「話し手の手のとどくところ」の区別がなされており、図6のような 3HN 型になっていると考えられる。

表32 3H 型の分布

	3H					3HN	合計
	2	3	4	5	?	2	
1. Aust.	1	15	1				17
2. Aust.-A.							
3. Indo-P.		1					1
4. Austr.	1					1	2
5. Sino-T.		1					1
6. Ural-Al.		3					3
7. Ibero-C.		2					2
8. Drav.							
9. Indo-E.	2	5(1)					7(1)
10. Afro-A.							
11. Nilo-S.		4			2		6
12. Niger-K.		2					2
13. Khois.							
14. North A.	1	2	1	1	2		7
15. South A.		1	1		1		3
合計	5	36	3	1	5	1	51(1)
	50						

(2) 4H 型

「聞き手に近い」空間をもつ4分型は、さまざまな種類がみられる。特に Austronesian の言語に多くみられ、中でも Philippines がもっとも変化にとんでいる。この4H型は、先の3H型にもう1つの分節点または空間の要素をもつものである。

(a) 4HN 型

「話し手に近い」空間がさらに分割された類型であるが、微妙に少しずつことになっている。Austronesian の Tagalog 語 [ALEJANDRO 1954 (1947); SCHACHTER & OTANES 1972] では、「話し手の身についた」ものをさす、すなわち「話し手自身がしめる」空間をもつ。K₁点を分節点としていっていると考えるとよい。そこで、これを4HN₁型としておく。次に、Ngunu 語 [SCHÜTZ 1969] ではむしろ「話し手に近い」空間内の遠方で分割されていると考えられ、これを4HN₂型としておく。Bisaya 語 [ROMUALDEZ 1908] や Nilo-Saharan の Chari-Nile 語群の Porot 語 [TUCKER & BRYAN 1966] では区別点は明確でないが(恐らくK₂点と考えられる)、4HN型であることは間違いない。

(b) 4HF 型

3H型にA₄点を加えた類型であり、Austronesian の Western Bukidnon Manobo 語 [ELKINS 1970] は表33のようにこの類型に属す。ニューギニアの Kube 語, Uri 語, Kovai 語 [McELHANON 1972] も、この類型に属すと考えられる。また、Oto-Manguean の Isthmus Zapotec 語 [PICKETT 1959, 1960] もこの類型にふくまれるが、場所の副詞は5分型である。Bantu 系言語の Tawana 語 [COLE 1955; DOKE 1967] も4HF型であるが場所の副詞はさらに遠近によって2分され、4HF-8型となる。また、場所の副詞は不明であるが、Niger-Kordofanian の Kwa 語群の Katcha 語 [TUCKER & BRYAN 1966] もこの類型にふくまれる。

表33 Western Bukidnon Manobo 語の指示詞と場所の副詞

区別点	指示代名詞		場所の副詞
	topic	non-topic	
話し手に 近い	he'ini	kayi	dini
聞き手に 近い	he'eyan	keniyan	diyan
両者から 遠い	he'eya	du'en	dutun
両者から非常に 遠い	he'aza	keniya'	diya'

(c) 4HI 型

3H型にV₃点の加わったもので, Austronesian の Kusai 語 [LEE 1975], Ulithi 語 [SOHU & BENDER 1973] がこの類型にふくまれる。これらはともに「みえないほど遠い」に対応する場所の副詞を欠いており, 4HI-3H 型となる。

表34 Kusai 語と Ulithi 語の指示詞と場所の副詞

		話し手に近い	聞き手に近い	両者から近い	見えないほど遠い	
Kusaican	指示代名詞	nge	ngacn	ngoh	ngi	
	場所の副詞	innge	innacn	inngh	—	
Ulithian	指代名詞	単	yiiyee	yilaa	yilaay	yiwee
		複	yikaa	yikalaa	yikalaay	yikawee
	場所の副詞	単	yixaa	yixaalaa	yixaalaay	—
		複	yikaa	yikalaa	yikalaay	—

(d) 4HW 型 (W は we の略号)

この類型は、「話し手に近い」、「聞き手に近い」、「両者から近い」、「両者から遠い」の4つの空間分割を行なうもので、これを4HW型とよぶ。この場合、「話し手に近い」と「聞き手に近い」空間は、「両者から近い」空間と重複している可能性がかなり高い。この類型にふくまれるものは、Austronesian の Cebu 語 [BUNYE & YAP 1971], Kapampangan 語 [MIRIKITANI 1971; FORMAN 1971], Palau 語 [Mc MANUS 1977] の3例である。なお、Kapampangan 語については、Mirikitani と Forman とでは、区別点の定義、それに対応する指示詞の組み合わせにくいちがいをみせるが、他の例から推して、ここでは Forman の方をとっている。

表35 Cebu 語の指示詞と場所の副詞

区別点		話し手に近い	話し手と聞き手に近い	聞き手に近い	両者から遠い
指示代名詞	topic	kiri	kini	kana	kadto
	non-topic	niari	niini	niana	niadto
場所の副詞	未来 (次の class と組 合されて、強調 形)	ari	anhi	anha	adto
	過去	diri	dinhi	dinha	didto
	現在	dia	nia	naa	tua
	運動の進行中	ngari	nganki	nganha	ngadto

(e) 4HA 型 (Aは audience の略号)

「話し手に近い」、「聞き手に近い」、「その会話をきいている人に近い」、「それら三者から遠い」の4つの空間からなる類型で、4HA型となづける。この特殊な類型は、Austronesian の Samal 語のみにみられるものである。この例は、Bill Geoghan が Fillmore に語ったものであり [FILLMORE 1971: 43], その具体的な資料は公表されていない。

(f) 4SW 型

この類型は2組の指示詞が組み合わせられたものと考えられる。「話し手に近い」/「話し手から遠い」と「話し手と聞き手に近い」/「両者から遠い」の2組で、互いに重複する空間をもっている。また、「聞き手に近い」空間をふくんではいないが、先の4HW型と極めて近い関係にある類型であるため、この類型群の中にふくめてある。

表36 Carib 語の指示詞と場所の副詞

区別点	指 示 詞						場所の副詞	
	話し手について	話し手と聞き手について		すでにのべたこと		位 置	方 向	
		動物	非動物	動物	非動物			
近い	e-	e:ro	mo:se	e:ni	ino-no	i:ro	i:ye [e:ye]	ya:rowa
遠い	mo-	mo:ro	mo:ki	mo:ni			mo:e	i:ya [e:ya]
さらに遠い							miya:ro miye:ro	mo ^o ya
向う側							mi:ya [mi:ye]	[mi:ya]

この類型は Ge-Pano-Carib の Carib 語 [HOFF 1968] にのみ認められるものである。

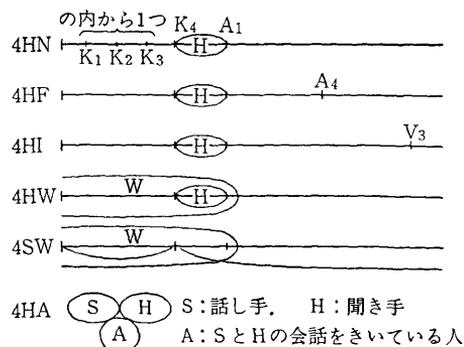


図7 4H型のことなる6つの類型

なお、場所の副詞は、「向う側」という副詞を除くと3F型であり、指示詞の類型は一致しない。

以上をまとめて図示すると図7のようになる。

(3) 5H 型

「聞き手に近い」空間を含む5分型の可能性はいろいろと考えられるが、次の5種が実際にみだされて

表37 4H型の種類と分布

言語グループ	4HF				4HN	4HW	4HI	4HA	4SW	合計
	4	5	8	?	4	4	3	?	3	
1. Aust.	1				3	3	2	1		10
2. Aust.-A.										
3. Indo-P.	3									3
4. Austr.										
5. Sino-T.										
6. Ural-Al.										
7. Ibero-C.										
8. Drav.										
9. Indo-E.										
10. Afro-A.										
11. Nilo-S.					1					1
12. Niger-K.			1	1						2
13. Khois.										
14. North A.		1								1
15. South A.									1	1
合計	4	1	1	1	4	3	2	1	1	18
	7				11					

いるにすぎない。

(a) 5HNF型

3H型の「話し手に近い」と「話し手と聞き手から遠い」空間がさらに遠近によって2分された空間であり、AustronesianのThahiti語 [ROSSITER 1919], Mon-Khmer語群のPaluang語 [MILNE 1921]が

この類型にふくまれる。Paluang語の例を表38にしめしておいた。ただし、Thahiti

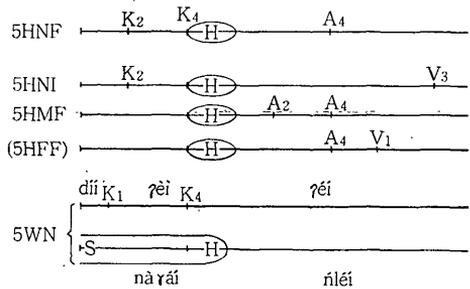


図8 5H型のことなる5つの類型

表38 Paluang語の指示詞と場所の副詞

区別点	指示代名詞	場所の副詞
話し手に近い	ō (i-ō)	hā ō
話し手から少し遠い	nān (i-nān)	hā nān
聞き手に近い	dīn (i-dīn)	(hā dīn)
両者から遠い	tāi (i-tāi)	ha tāi
両者からさらに遠い	twāe (i-twāe)	ha twāe

語の場所の副詞は 3H 型である。

(b) 5HNI 型

5HNF 型の A₄ 点を V₃ 点に変えた類型であり, Austronesian の Puluwat 語 [ELBERT 1974] がこの類型に含まれる。ただし, 「話し手に非常に近い」と「話し手に近い」との区別はあいまいになりつつある。

(c) 5HMF 型

Austronesian の Kadayan (Kadazan) 語 [ANTONISSEN 1959] の指示詞では, 「話し手に近い」, 「聞き手に近い」の他に「話し手から遠くない (話し手にやや近い)」, 「話し手からやや遠い」, 「話し手から遠い」の空間をもち, これらは A₂, A₄ 点で分割されるものと考えられる。それ故, 5HMF 型とされる。なお, 場所の副詞は 6H 型である。

表39 Kadayan 語の指示詞と場所の副詞

		指 示 詞	場所の副詞
話し手に近い (手がとどく)		iti	doiti
聞き手に近い		ino	doino
話し手から遠くない		itia	duutia
話し手からやや遠い		ihia	duuhia
遠 い	みえる	iho	doihuu
	みえない		doiho

(d) 5HFF 型

この類型は, 指示詞にはみられないもので, Isthmus Zapotec 語 [PICKETT 1956, 1960] の場所の副詞にみられるものである。この言語の指示詞の類型は 4HF 型であり, 場所の副詞ではこの内の「さらに遠い」空間が V₁ 点で分割されて型 5HFF となったものと考えられる。

(e) 5WN 型

この類型は, Na-Dene の Navajo 語 [HOIJER 1974] にのみみとめられるもので, 2組の指示詞からなっている。すなわち, 話し手を中心とした 3N 型 (分節点は K₁, K₄ 点) と, 「話し手と聞き手に近い」/「両者から遠い」の組との合成によるものである。これらの 2組は重複する空間をもつが, 5分型に含めておく。なお, この言語の場所の副詞は, 指示詞よりも複雑な体系をもっており, 7分型と考えられる。この類型については後にのべる。

表40 5H型の種類と分布

言語グループ	5HNF		5HNI	5HMF	5WN	合計
	3	5	5	6	2	
1. Aust.	1		1	1		3
2. Aust.-A.		1				1
3. Indo-P.						
4. Austr.						
5. Sino-T.						
6. Ural-Al.						
7. Ibero-C.						
8. Drav.						
9. Indo-E.						
10. Afro-A.						
11. Nilo-S.						
12. Niger-K.						
13. Khois.						
14. North A.					1	1
15. South A.						
合計	1	1	1	1	1	5
	2					

5H型は、Navajo語を除けば、4H型と同様に Austronesian に多くみられる類型である。

(4) 6H型

Kadayan語の場所の副詞は6H型である(表39参照)。指示詞の類型5HMF型にさらにV₃点加わったものであり、類型化するならば6HMF型とよばれるものである。

(5) 8H型

指示詞の類型としては、7H型はみられなかった。

Navajo語の場所の副詞は8H型である。Navajo語の場合、3組の副詞が考えられ、それぞれ3M型、3N型、3WN型(「話し手に近い」, 「話し手と聞き手に近い」, 「両者から遠い」)からなる。これらの内、kwè?é と kwii は同じ空間を示すと

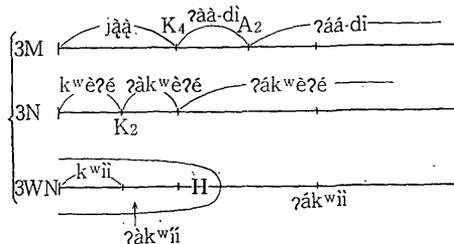


図9 Navajo語の3組の場所の副詞

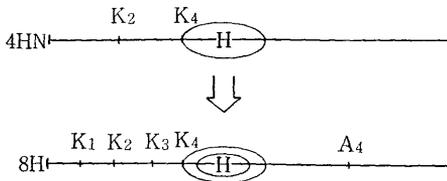


図10 Tswana 語の場所の副詞

生形があるが、前者は $k^w\acute{e}p\acute{e}$ と同じ空間を示し、後者は不限定の副詞とみなして除いてある。

また、Bantu 系言語の Tswana 語の場所の副詞もこの類型に含まれるかもしれない。Tswana 語は 4HN 型であったが、これがさらに遠近で 2 分されたものであり、図10のような空間分割がなされていると考えられるが、Shona 語や Mwena 語と同様に疑問の残る類型である。

2.2.4. 方向性をもつ類型

ここでいう方向性は、単に東西南北というような絶対方位のみをいうのではなく、相対方位も含まれている。そして、方位性をもつ類型は、特に上・下の方向性をもつもの (V 型)、四方位をもつもの (D 型)、その他の方向性をもつ類型とに大別される。

(1) 上・下の方向性をもつ類型 (V 型)

(a) 4V 型 (V は vertical up and down の略号)

Munda 語群の Juang 語 [MATSON 1964] は、基本的には 2 分型であるが、「話し手から遠い」空間において、上・下によってさらに分割される。この上・下は、純然たる垂直方向だけでなく、斜面における上・下をもさすものである。この類型では、「上・下」の空間と「話し手から遠い」空間とは重複するものと思われるが、4 分型とみてよいであろう。これを 4V 型となづける。なお、「話し手に近い」と「話し手から遠い」の副詞は不明である。

(b) 5V 型

5V 型には 2 つの類型が知られている。3F 型に上・下の方向が加わったもの (5VF 型) と 3H 型

考えられ、これらをのぞくと、部分的に重複する 8 分型 (8W 型) となる。

Navajo 語には、これらの他に「話し手に非常に近い」を示す $k\acute{o}di$ 、やや不限定な場所の副詞 $k\acute{o}q$ とその派

表41 Juang 語と指示詞と場所の副詞

分 別 点	指示代名詞		場所の副詞
	動 物	非動物	
話し手に近い	{ni {ini	{nan {enan	?
話し手から遠い	ere	era	
話し手から遠くて 下方にある	auri	aura	auri
話し手から遠くて 上方にある	airi	aira	airi

表42 Tibet 語の指示詞と場所の副詞

	話し手中心			方向性	
	近い	遠い	さらに遠い	上	下
指示詞	∕di	∕te	ˀpagi	∕yagi	∕magi
場所の副詞	∕dää	∕tää	ˀpagää	∕yagää	∕magää

(表記法は北村 [1974] に従う)

に上・下の方向が加わったもの (5VH 型) とがある。

(i) 5VF 型

Sino-Tibetan の Tibet 語 [CHANDRAS DAS 1915; ROERISH & PHUNTSHOLE 1957; 北村 1974], Lahu 語 [MATISEFF 1973] はこの類型に属す (ニューギニアの Wambon 語 {Awju 方言} [DRABBE 1959c] は「向う側」, 「内外」という空間ももっているが, この類型にふくめられるものと思われる)。また, 場所の副詞の類型ではあるが, Austronesian の St. Philip と St. James で話されている言語 [RAY 1926] もこの類型にふくまれる。

(ii) 5VH 型

Sino-Tibetan の Lusai 語 [LORRAIN & SAVIDGE 1898] は, 表43のような指示詞をもち, 5VH 型と考えられる。これは H 型と V 型の間間形であるが, V 型の方がより特殊であり, V 型の中にふくめてある。

表43 Lusai 語の指示詞と場所の副詞

区別点	指示詞	場所の副詞
話し手に近い	he, hei	heta
聞き手に近い	kha	khata
両者から遠い	saw	sawta
上方	khi	khita
下方	khu	khuta
anaphoric な指示代名詞 (?)	chu	chuta

(c) 6V 型
 ニューギニアの Tehit 語 [FLASSY & STOKHOF 1979] では, 「話し手に近い」, 「聞き手に近い」, 「かなり遠い(向う側)」, 「さらに遠い(道路や川の末端)」, 「両者に比し

て高い」, 「両者に比して低い」の6つの要素をもっている。この内, 「かなり遠い」は「向う側」という意味を, 「さらに遠い」は「道路や川の末端」の意味をもっている。しかし, それらは遠近の区別をもっているため, 考察の対象とした。その区別点は, V₁ 点と判定される。そして, これに上・下の分割が加わったもので, 「聞き手に近い」空間より遠方では重複すると考えられる。なお, 場所の副詞は明確ではない。

表44 Tehit 語の指示詞

		近 い		遠 い		上・下	
		話し手に近い	聞き手に近い	かなり遠い	さらに遠い	上方	下方
sg	m	qow	óqow	anáw	qóitw	raw	aléw
	f	qom	óqom	anáw	qóitm	ram	além
pl		qey	éqey	anáý	qóity	ray	aléý

(d) 7V 型

ニューギニアの Awju 方言の Kaeti 方言 [DRABBE 1959c] は、話し手中心には 3M 型であり、さらに「丘や川の上方、下方」という方向と、垂直方向の「上・下」とをもっている。そのため 7VM 型と考えられる。この方言はさらに「内外」に1つ、「向う側」に1つの指示詞をもつが、距離的に特定できない故にこれらは考察から除いてある。

表45 kaeti 語 (Awju 方言) の指示詞と場所の副詞

	方向なし			方向あり					
	近い	遠い		上・下		丘や川		内外	向う側
		すぐ近く	遠い	上	下	上方	下方		
指示詞及び場所の副詞	mene	mbere	mbogo	mbo-törö	mbo-gorü	mbo-torogo	mbo-rogo	mbo-togo	mbo-ndogo

指示詞の種類ではないが、ニューギニアの Narak 語 [Cook 1967] の場所の副詞も 7V 型である。Narak 語では、話し手中心の 3F 型に、遠近で2分された上・下の副詞がみられ、7V 型 (7VF 型) となる。また、Narak 語にも「向う側」という要素がみられる。

(e) 8V 型

8V 型では3つの類型が知られている。4NF 型に、上・下がさらに遠近によって4分された空間の加わったもの (8VNF 型)、4HF 型に上・下のさらに遠近によって4分された空間が加わったもの (8VHF 型)、さらに「側方」という方向性のある指示詞をもつもの (8VAs 型) の3つである。

(i) 8VNF 型

この類型に含まれるものに、ニューギニアの Ömie 語 [UPIA 1975] がある。表46にしめたごとく、4NF 型と上・下の遠近に2分された空間が加わったものである。また、この言語では、場所の副詞は 12V 型となる。

表46 Ömie 語の指示詞と場所の副詞

		水平方向		垂直方向 (斜面の方向)	
		近い	遠い	上方	下方
指示詞	極端	ave ¹	arue ⁴	anume ²	aruhe ²
	近い	aviëre ²	aruëre ³	anumëre ¹	aruhëre ¹
場所の副詞	極端	aviae ¹	aruae ⁶	anumiae ³	aruhiae ³
	やや近い	averiae ²	aôriae ⁴	anumôriae ¹	aruhôiae ¹
	やや遠い	veri ² ô ³	rôri ² ô ⁵	numôri ² ô ²	ruhôri ² ô ²

(注) 「極端」というのは近い方ではより近く、遠い方ではより遠い空間をさす。垂直方向では遠い空間をさす。
右肩の数字は、近い順を示している。

また Sino-Tibetan の Róng (Lepcha) 語 [MAINWARING 1876] の場所の副詞もこの類型にふくまれる。

(ii) 8VHF 型

ニューギニアの Finisterre-Huon 語族の Selepet 語 [McELHANON 1972] は、表47にしめすごとく、4HF 型に上・下の遠近で2分されたものが加わった類型である。そして、この類型は Selepet 語のみにとどまらず、同じ語族の Nabak 語、Ono 語、Kâte 語、Kewieng 語、Wantoat 語、Rawa 語 [McELHANON 1973] も同じ類型にふくまれると考えられる。

表47 Selepet 語の指示詞

指示の形態素		水平方向		垂直方向(斜面の方向)	
		近い	遠い	上方	下方
遠近の形態素		y-	ed-	ew-	eb-
近い	-u	yu (話し手に近い)	edu (聞き手に近い)	ewu	ebu
遠い	-a	ya (両者から遠い)	eda (両者からさらに遠い)	ewa	eba

場所の副詞にはこれらに -ân をつけることによって形成される。

(iii) 8VAs 型 (As は aside の略号)

ニューギニアの Barai 語 [OLSON 1975] では、3つの要素からなる指示詞がみられる。すなわち、「話し手」、「側方」、「上・下」の3つの要素である。そして、それぞれにつき、「限定的」と「一般的」の区別がなされるが、これらは同時に距離的にも区別される分け方である。話し手中心の指示詞に対しては前者は「近い」を、後者

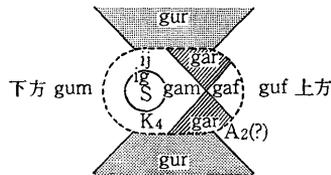
表48 Barai 語の指示詞

	話し手中心	側方	斜面の方向	
			上方	下方
限定的	ig (話し手の近く)	gar (聞き手の)	gaf (聞き手の)	gam (聞き手の)
一般的	ij (話し手から遠い)	qur	guf	gum

場所の副詞には、接尾語 -ia をつける。
強調形には -ifure (単数), -ibure (複数) を付加する。

は「遠い」をしめす。またそれ以外の指示詞では、「限定的」は「聞き手にとって」という意味をもつ。恐らく、これらにも遠近の意味が付加されており、「聞き手に近い」と「両者からはなれた」の意味をもっていると想像される。

また、この「側方」という意味は「上・下」に呼応した方向性と考えられ、図11にしめすような空間分割を行っていると思われる。



ijは ig以外の空間をしめし、他の空間と重複する。

図11 8VAs 型の空間分割

(f) 9 V 型

American Arctic Paleosiberian の Aleut 語 [GEOGHEGAN 1944; BERGLAND 1951, 1973] の指示詞の体系は非常に複雑なもので、もうひとつははっきりとは把握できていない。特に Geoghegan [1944] の論文をみると、全く混乱するほどである。

さて、Aleut 語では、「有限的」と「拡張的」の区別がある。これは、後に Eskimo 語においてのべる「限定的」と「非限定的」の区別とよく似たものと思われる。すなわち、指示物の点的なもの、ある広がりをもったものとの区別である。「有限的」はさらに、「直 (straight)」と「斜 (obliquely)」に分けられる。この区別を、Bergsland [1951, 1973] は明確に書いていないが、多分、話し手の真正面とそれよりははずれた斜めの方向との区別と思われる。空間成分としては、この要素も組み入れた方がよいと思われる。さらに、それらが「静的」な指示詞であるのに対して、指示物が「動的」である場合の指示詞がある。また、これまでの指示詞が「みえる」ものをさしているのに対して、「みえない」ものをさす指示詞がある。これは「みえないほど遠い」という要素とはことなつたものである。

これらの要素に対応して、「話し手に近い」指示詞があるが、これには「直」と「斜」の区別はない。水平方向では、「横」と「縦」に分けられるが、「縦」は「向う側」を、

表49 Aleut 語の指示詞

区 別 点	有 限 的		拡張的	動的	視覚外	
	直	斜				
話し手に近い	uka		uða	wa	uwa	
水 平	横	ika	iku			
	縦	aka	aku	aɣa	awa	ama
横方向の上・下	上	hika	hiku		hiɣa	
	下		ukna	una		
縦方向の上・下	上	haka	haku	haɣa	hawa	hama
	下	saka				
内 外	内	quika	qiku	qiɣa		
	外	qaka	qaku	qaɣa		

「横」は、「障害物のない場所」での指示詞と考えられ、同時に「話し手から遠い」ものをさすのであろう。「横方向の上・下」というのは、「上流」「下流」などをさすものと考えられる。「縦方向の上・下」は垂直方向の「上・下」をいう。また、「内・外」は、家の内、外という使い方が中心であると思われる。

これらの内、「向う側」と「内・外」は、比較の対象からはずすことにする。また、総ての要素に、「直」と「斜」の区別があるのではなく、そのため9分型となる。なお疑問の残る類型ではあるが、ここではこのようにしておく。

(g) 12 V 型

前出の Ömic 語の場所の副詞は 12V 型である。話し手中心に 6 分されるが (表46参照), 恐らく K_2, K_4, A_1, A_4, V_1 の各点で分割されていると想像される。そして、 A_1 点以遠において、さらに上・下に 2 分される。 A_1 点以遠では空間の重複がみられるが、合計12の空間が分割されていることになる。

以上に述べてきた V 型をまとめると表50のようになる。V型は Indo-

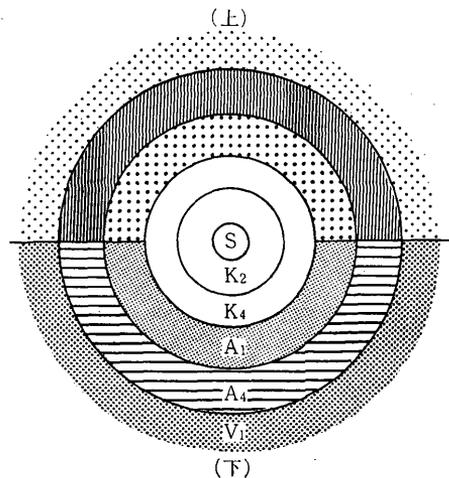


図12 12V型の空間分割

表50 V型の種類と分布

言語グループ	4V 4	5VF 5	5VH 5	6V ?	7V 7	8VHF 8	8VNF 12	8VAs 8	9V ?	合計
1. Aust.										
2. Aust.-A.	1									1
3. Indo-P.				1	1	7	1	1		11
4. Austr.										
5. Sino-T.		2	1							3
6. Ural-Al.										
7. Ibero-C.										
8. Drav.										
9. Indo-E.										
10. Afro-A.										
11. Nilo-S.										
12. Niger-K.										
13. Khois.										
14. North A.									1	1
15. South A.										
合計	1	2	1	1	1	7	1	1	1	16

Pacific の Papua 系の言語に圧倒的に多く、Sino-Tibetan にもわずかにみられる類型である。

(2) 4方位をもつ類型 (D型)

(a) 6D 型 (Dはdirectionalの略号)

6D型にふくまれる類型には3種類ある。まず、ひとつはインドネシアのHalmahera島にみられるもので、話し手中心の3F型の「さらに遠い」空間が4方位によって4分される6DF₁型がある。そして、Na-DeneのHupa語[GODDARD 1911]の場所の副詞にみられる類型で、3F型の間領域の「遠い」空間が4方位によって4分される6DF₂型がある。これらはともに重複する空間をもっていない。今ひとつは

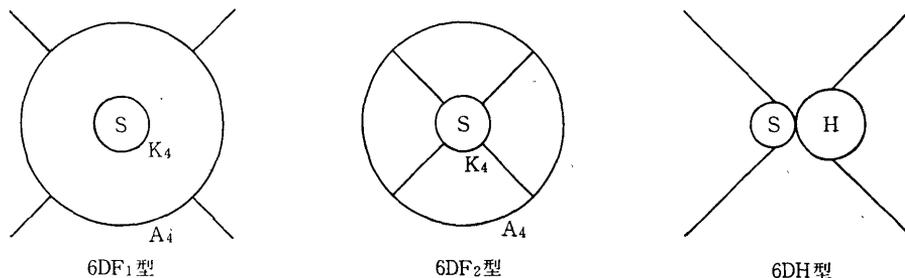


図13 60型の3つの類型

Eskimo 語にみられる, 3H 型と4方位の加わった 6DH 型である。

6DF₁ 型にふくまれる類型は Halmahera 島に集中的にみられる類型で, Austro-nesian の Weda 語, Maba 語, North Halmaheran の Galela 語, Loloda 語, Tabaru 語 [吉田 1977] がその例である。ただし, Galela 語, Loloda 語, Tabaru 語の場所の副詞は10分型である。また, Weda 語を除く 6DF₁ 型および, 6DF₂ 型 (Hupa 語) は「向う側」という要素をとにもっているが, ここでは除外して考察してある。

Eskimo (東部) 語 [THALBITZER 1911; FLINT 1954; SPALDING 1969; 宮岡 1978] では, 著者によって少しずつことになっている。方言差とも考えられるが, ここでは宮岡のあげている西グリーンランドの例をとりあげる。

この例では, 「制限された範囲」と「制限されない範囲」は, 指示されるものが点的なものか, あるいは広がりをもったものかによって区別されているものであり, 空間分割の要素としては, 「制限された範囲」の指示詞のみを考えればよい。

表51 西グリーンランドの Eskimo 語の指示詞 (語根)

		制限された(狭い)範囲	制限のない(広い)範囲
方位なし	話し手に近い	u-, uw-	mat-, ma(f)-
	聞き手に近い	im-	qam-
方位	北	ik-	aw-
	南	kiy-	qaw-
位	東 (上)	pik-	paw-
	西 (下)	kan-, kat-	sam-

(b) 7D 型

6DF₁ 型では, 「さらに遠い」空間での重複がみられない類型であるが, 7D 型では基本的な構成は 6DF₁ 型と同じであるが, その空間において, 重複がみられる。

North Halmaheran の Ternate 語 [吉田 1977] の指示詞, および同系の West Makian 語 [吉田 1977] の場所の副詞はこの類型にふくまれる。

(c) 9D 型

Austronesian の Sangir 語 [ADRIANI 1893] は基本的には 3H 型であるが, 「話し手に近い」と「聞き手に近い」空間がさらに2分され, 「両者から遠

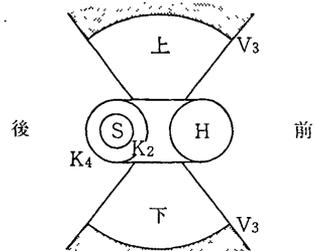


図14 9D型の空間分割

表52 Sangir 語の指示詞と場所の副詞

区別点	話し手に近い		聞き手に近い		両者から遠い				
	近い	やや近い	両者の間	聞き手に近い	前方	後方	上方 (水平方向)	下方 (水平方向)	みえない (上方、 下方に おいて)
指示代名詞	ini	ěndaung	ěndai	ene	dadā	dacla	daṣi	bawa	pai
場所の副詞	sini	ěndaung si	ědnai se	sene	dadā se	dada se	daṣi se	bawa se	pai se
	sini		sene						

い」空間は4方位によって分割され、さらに「みえないほど遠い」空間をもっている。そして、結果として9分型となっている。Sangir 語の指示詞と場所の副詞を表52に、その空間分割を図14にしめた。

(d) 10D 型

Austro-Asiatic の Nicobar 語 [TEMPLE 1902] の場所の副詞は 10D 型である。Nicobar 語の指示詞は2分型であるが、場所の副詞では、「話し手から遠い」空間では4方位で分割されるとともに、遠近によってさらに2分される。この遠近の区別点は恐らく A₄ 点であろう。この類型を 10DF 型としておく。なお、「話し手から遠い」空間は、4方位によって分割された空間と重複している。

North Halmaheran の Galela 語, Loloda 語, Tabaru 語, Tobelo 語の場所の副詞も 10D 型である。これらの言語では、「話し手からさらに遠い」空間が4方位で分割されるとともに、遠近によってさらに分割される。この遠近の区別点は V₁ 点であり、この類型を 10DF 型となづける。なお、この類型では重複した分割とはな

表53 Nicobar 語における指示詞と場所の副詞

区別点	話し手に近い		話し手から遠い	
指示代名詞	nina		ane	
場所の副詞	距離		ita	kakat
	上・下	上方	ngale (ngalde)	kolde
		下方	ngashe	(koishde)*
	内・外	内側	ngahe	(kohade)*
外側		ngañe	koinde	

* 原文がなく、著者が他の例から推定して挿入したもの

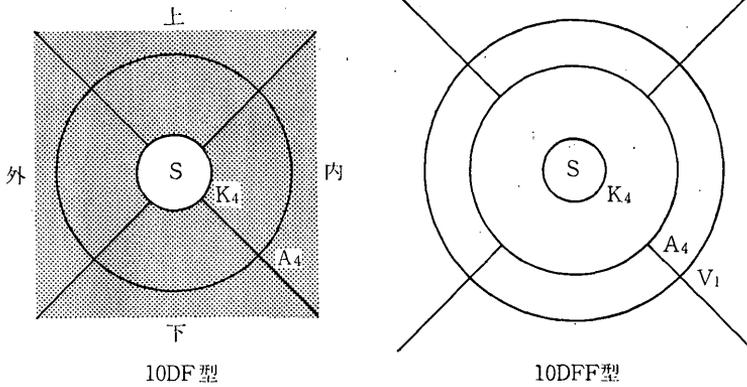


図15 10D 型の空間分割

っていない。

(e) 12D 型

ニューギニアのAghu語(Awju方言)[DRABBE 1957]では、話し手中心に4MF型に分割され、4方向(上流・下流, 丘の上方・下方), さらに垂直方向に遠近をもつ上・下の空間が加わって、12D型を形成する。この言語では、さらに、「内・外」、「向う側」という指示詞を1つずつもつが、これらは考察から除いてある。

表54 Aghu語(Awju方言)の指示詞と場所の副詞

区別点		指示詞及び場所の副詞	
話し手中心	近い	nego	
	遠い	すぐ近く	wo (wüo)
		近い	ghogo
	遠い	gho	
4方向	丘	上方	ghoto
		下方	ghüko
	流れ	上流	ghosogho
		下流	ghüogho
上・下	上	すこし上	ghogosu
		上	ghosu
	下	すこし下	ghogosü
		下	ghosü
内	外	(ghosu)	
向う	側	ghonu	

(f) 14D 型

Eskimo(西部)語[BARNUM 1901; HINZ 1944; 宮岡 1978]は、非常に複雑な指示詞の体系をもっている。宮岡のものがもっとも詳しい故に、ここでは宮岡の記述に従っておく。

「限定的」と「非限定的」の区別は、指示されるものが、動いているかどうか、ある広がりをもっている(横たわった長いものも含む)かどうかにかかっている。空

表55 西部エスキモー語の指示詞（語根）

区 別 点		限定的(点的, 静的)		非 限 定 的 (ある広がりをもつ. 水平に動 いている, 横たわっている)
		近 い	遠 い	
話 し 手 近 い		u-		ma(t)-
聞 き 手 に 近 い		tau		tama(t)-
川 に 平 行		ig-	am-	aw-
向 う 側		ik-	akm-	aγ-
川につ いての 方位	上 流	kiw-	qam-	qaw-
	下 流	uγ-	cakm-	unγ-
	川からはなれる	pig-	pam-	paw-
	川に近づく	kan-	cam-	un-
上・下	上	pik-	pakm-	paγ-
	下	(川に近づく) と同じ		
内・外	内	(上流) に同じ		
	外	kax-	qakm-	qaγ-
話し手 に対し て	近づいてくる	wk-		
	はなれてゆく	aw- (川に平行で非限定的な指示詞に同じ)		
anaphoric		im-		

間の分割を考える上では、「非限定的」な指示詞は考えなくてよいであろう。

ところで、「川に平行」という要素は、「川の向う側」でないということであり、Barnum や Hinz のあげる例を考え合わせると、話し手にとっての遠近によって区別

される指示詞と考えられる。ただし、Hinz では igina の方が amina よりも遠くをさしている。「向う側」はずでに述べたごとく、特定化できないため除外している。「話し手に近づく」「話し手から遠ざかる」ものの指示詞も考察からはずしてよいであろう。「内・外」という要素も、家の内・外というののもっとも典型的なものであり、一般的空間分割の考察からは除いておく

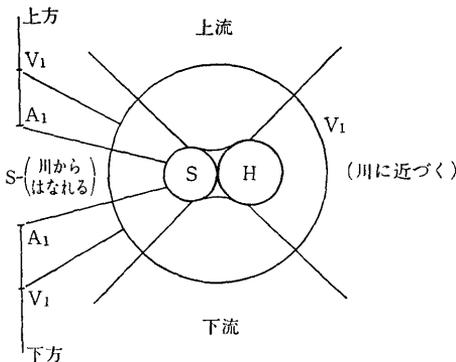


図16 Eskimo 語(西部)の空間分割

表56 Nengone 語における場所の副詞と接尾語

① om: here (独立形)		horizontal			vertical					
		east	west	north or south	up	down				
②	ome-	(here/there)	-zoi	-lui	-yoi	-loi	-lei			
			-la	-li	-ni	near		hu-	③	
			-zo	-luo	-yo					(-lo inside)
⑤	me-	very distant	-zoi	-lui	-yoi	-loi	-lei	far away	he-	⑥
⑥	ma-	still visible	-da	-di	-di	-do	-du	still visible	ha-	⑦
⑦		far away	-zo	-duo	-dio	invisible		invisible		⑧
verbal suffix	toward ego	-lo	-lu	-but	(-lo upward)				(-lu downward)	
	away from ego	-zo	-luo	-yo						

(注) 数字は話し手から近いと思われる順位をしめしている。
[TRYON 1967] [TRYON and DUBOIS 1969] から作成したもの。

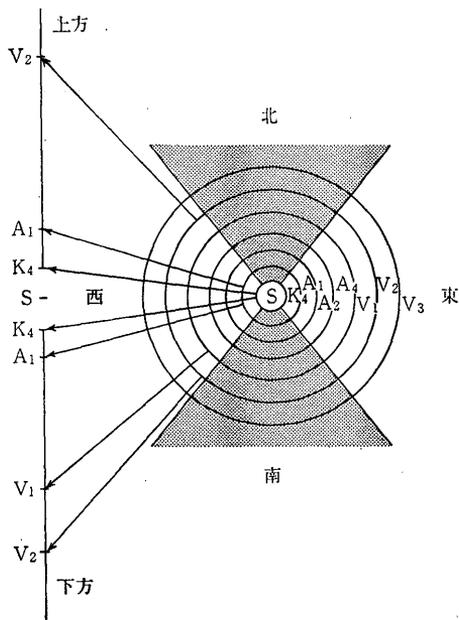


図17 29D 型の空間分割

ことにする。

以上から、「聞き手に近い」空間を含む4分型（恐らく4HF型であろう）に、遠近で区別される4方向の空間と、上・下の空間がEskimo（西部）語の基本的な空間分割と考えられる。それ故、14D型となる。

(g) 29D型

これは2N型のNengone語(Austronesian)の場所の副詞にみられる類型である。この言語では、方位としては3方位(東, 西, 東西と直交する方向)しかないが、さらに垂直方向の上・下を区別している。これらの方位は「話し手に近い」空間を除いて適応される。距離的には、 $K_4, A_1, A_2, A_3, V_1, V_2, V_3$ の7点が用いられていると考えられる。そして水平方向では「話し手に近い」空間を除いて7分割されている。これを東の方向でしめすと, omezoi, hula, huzo, mezo, mazo, mada (hada), hazoの順に近くから遠くに向かってならぶと考えられる。これによって3方向に7分であるため21分割, さらに「話し手に近い」を加えて22分割となる。一方, 垂直方向には, 上方に3分割, 下方に4分割で, 合計7分割。これらを合計すると29分割となる。

表57 D型の種類と分布

言語グループ	6D			$\frac{7D}{7}$	$\frac{9D}{9}$	$\frac{12D}{12}$	$\frac{14D}{?}$	合計
	6DF ₁		6DH ?					
	6	10						
1. Aust.	2				1			3
2. Aust.-A.								
3. Indo-P.		3		1		1		5
4. Austr.								
5. Sino-T.								
6. Ural-Al.								
7. Ibero-C.								
8. Drav.								
9. Indo-F.								
10. Afro-A.								
11. Nilo-S.								
12. Niger-K.								
13. Khois.								
14. North A.			1				1	2
15. South A.								
合計	2	3	1	1	1	1	1	10
	6							

しかしながら、Nengone 語で実際にこのような分割が行なわれているかどうか、かなりの疑問がのこる類型である。

(h) 30 D 型

Munda 語群の Mundari 語の場所の副詞の類型は 30D 型である。Mundari 語の指示詞の類型は 3F 型であった。場所の副詞では、それらに対応する副詞以外に、3F 型のそれぞれを近・中・遠に 3 分する副詞がある。「話し手に近い」空間では、恐らく K_1, K_2 点で、「話し手から遠い」空間では A_1, A_2 点で、「話し手からさらに遠い」空間では V_1, V_2 点で分割されていると考えられる。さらに 4 方位(内・外, 前・後)と上・下の 6 方位が、同様に近・中・遠によって 3 分割される。この際、 A_1, A_4 点がそれらの分節点であると考えられる。これらを合計すると、 $3 + 9 + 3 \times 6 = 30$

表58 Mundari 語の指示詞と場所の副詞

区 別 点		形 容 詞	話し手に近い		話し手から遠い		話し手から非常に遠い	
			動 物	非動物	動 物	非動物	動 物	非動物
指 示 詞		形 容 詞	ne		en		han	
		代 名 詞	ní	néa	iní	ena	haní	hana
場 所 の 副 詞	距 離	場 所 (一般的)	-re	nere	enre	hanre		
		近 い	-japare (-naṅre)	nejapare	enjapare	hanjapare		
		ま ん な か	-talare	netalare	entalare	hantalare		
		遠 い	-sangingre	nesangingre	ensangingre	hansangingre		
	上	上 方	-chefanre	nechefanre	enchefanre	hanchefanre		
			-sirmare	nesirmare	ensirmare	hansirmare		
	下	下 方	-subare	nesubare	ensubare	hansubare		
			-latarre	nelatarre	enlatarre	hanlatarre		
	内 外	内	-bitarre	nebitarre	enbitarre	hanbitarre		
		外	-rachare	nerachare	enrachare	hanrachare		
	前 後	前	-aiarre	neaiarre	enaiarre	hanaiarre		
		う し ろ (かくれている)	-danangre	nedanangre	endanangre	handanangre		
うしろ (家の)		-kundamre	nekundamre	enkundamre	hankundamre			
う し ろ		-taiomre	netaiomre	entaiomre	hantaiomre			

注) 非限定の接尾辞

-kore, -tare (-sare): ~のあたり (-re のかわりにもちいる)

方向の接尾辞

-te: ~へ -ate: ~から -taete: ~の側から -tâte: ~の方向

分割となる。ただし、話し手中心の3分と9分は重複している。Mundari語ではさらに「何かのうしろにかくれてみえないもの」と「家のうしろ」の2つの要素がある。これらをもし加えれば36分型となるが、空間分割にかかわっているものの、「向う側」と同様に特定化できないため、除いておくことにする。

以上のD型をまとめると表57のようになる。D型は Austronesian, Indo-Pacific の North-Halmaheran, そして American Arctic Paleosiberian の3つにかぎられている、かなり特殊な類型であることがわかる。

(3) その他の方向性をもつ類型 (B型, As型)

この類型にふくまれるものは、話し手または聞き手の「うしろ」という空間を特定している類型 (B型) と、「側方」という方向性をもつ類型 (As型) の2種からなる。D型の中には「うしろ」という空間をもつものもあるが、他の方位と組み合わせられて4方位を形成しているためD型にふくめられている。また8VAs型のように、As型とV型の間型も存在するが、「上・下」という要素の方がより特徴的なものと考え、V型にふくめてある。ここにふくめられた類型は、それらから除外されたのこりの類型である。

表59 Koryak 語の指示詞と場所の副詞

区別点	指示代名詞	場所の副詞
話し手に近い	wu'ssm, wu'tcin	wu'tčuk, a'nki
話し手から遠い	ña'nyen	ña'nko, ña'nako, ñe'nko
話し手から非常に遠い	enka'kin	—
話し手とあるものとの間	va'yenqen	vai'eñ
話し手のうしろ	ñounqala'ken	—

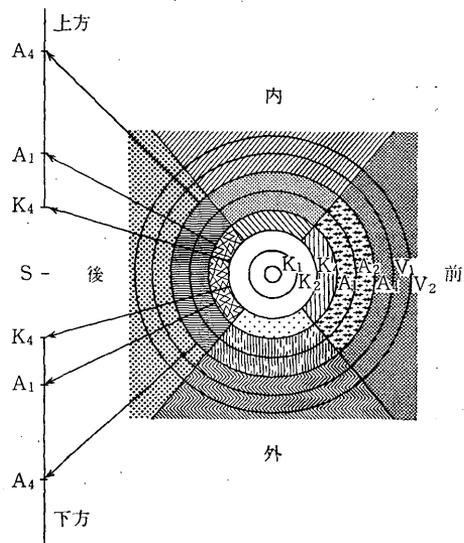


図18 30D型の空間分割

(a) 5B型 (Bはbackの略号)

Chukchee-Kamchadal 語群の Koryak 語 [BOGORAS 1922] は基本的には3F型であるが、その他に、「話し手のうしろ」と「話し手とあるものとの間にある」空間を別にもっている。後者は状況に応じて変化するものであるが、考察の対象にふくめておく。なお、

場所の副詞は変形の3分型となる。

(b) 9B 型

Chukchee 語 [BOGORAS 1922] は、「話し手のうしろ」と「聞き手のうしろ」の空間をもっている。また、Koryak 語と同様に「話し手とあるものとの間にある」空間ももっている。一方、話し手中心に6分され、恐らく K_4, A_1, A_2, A_4, V_1 の各点で分割されたものであろう。場所の副詞では、「やや遠い」に対応する副詞はみられず、8B型となる。

表60 Chukchee 語の指示詞と場所の副詞

区 別 点	指示代名詞	場所の副詞	
距 離	近 い	wə'tqan	wu'tku
	やや近い	enqə'n	e'nki
	やや遠い	ña'nqan	—
	遠 い	ñu'nqin	ñu'nki
	さらに遠い	{ñq'onqan ña'anqan	{ño'onqan (ña'anwqan)
非常に遠い	ga'nqan	ga'nqan	
うしろ	話 し 手	ño'tinqan	ño'tiñki
	聞 き 手	ra'enqan	ra'änki
話し手とあるもの間	va'enqan	va'änki	

(c) 11As 型

Munda 語群の Santali 語 [GRIERSON 1906; BODDING 1929] は非常に複雑な指示詞の体系をもっている。Santali 語の指示詞は、話し手中心としては 3M 型が基本であり、それに「側方」という要素が加わったものである。さらに各空間成分は、「一般的指示」、「実際にさししめず」、「より遠い」、「強調形」の区別があるが、「強調形」は指示の強調であって、距離にはかかわらないものであるらしい。しかし、他の3つは距離に関係しており、「実際にさししめず」は「近い」に、「一般的な指示」は「遠い」に、「より遠い」は文字通り「より遠い」の意味をもつと思われる。そのため、それぞれの空間成分は、さらに3分割されることになる。ただし、「話し手に近い」空間だけは、「より遠い」という成分を欠いており、その結果、11分割されることになる。ただし、話し手中心の分割は「前方」であることを前提としており、「後方」については、「うしろ」という語と組み合わせることによって示されるという。この要素を加えると19分型となるが、「うしろ」については合成語となること、また総ての組み合わせが可能なか明確でなく、ここでは除いておくことにする。

さて、話し手中心の8分（重複して11分となる）は、恐らく $K_2, K_4, A_1, A_2, A_3, A_4, V_1$ の7点によって分割されていると思われる。また、「側方」については、「話し手に近い」(K_4 点以内) 空間を除いた空間で、 A_2, A_4 点で3分されていると考えられる。

なお、Santali 語では物の指示として「動物」と「非動物」の区別をするだけでなく、「みえるもの」と「音やにおい」の指示も存在している。

表61 Santali語の指示詞と場所の副詞

区 別 点		指 示 代 名 詞				場所の副詞	
		物を指示する*		五感による区別		場 所	方 向
		動 物	非 動 物	みえるもの	きこえるもの(におうもの)		
話し手に近い	一般的指示	nui	noa (ny, na)			nɔŋɔ	note
	実際にさしめす	ni	niɔ (ne)	—	—	nɛŋɔ	nete
	強調	nik'it	nɛk'ɛ				
話し手からやや遠い	一般的指示	uni†	ona	one	ote	ɔŋɔ	ɔnte
	実際にさしめす	ini	ina	ene	ete	ɛŋɔ	ente
	より遠い	ani	—	ane	ate	—	—
	強調	nũk'ũi	nõk'õe	—	—	—	—
話し手遠い	一般的指示	huni	hona	hone	hote	hɔŋɔ	honte
	実際にさしめす	hini	hina	hene	hete	hɛŋɔ	hente
	より遠い	hɔni(hai)	hana	hane(hæ)	hate	hɔŋɔ	hante
	強調	nɔk'ait	—	—	—	—	—
側	普通	nhui	nhaa	—	—	nɔŋɔ	nhote
	強調	nhɔi	nhia	—	—	nɛŋɔ	nhete
方	強	nhai	nha			nɔŋɔ	nhate
	近い	nhik'it	nhɛk'ɛ				
	やや遠い	nhũk'ũit	nhõk'õe	—	—	—	—
遠い	nhɔk'ait	nhɔk'æ					

注) * 単数のみをしめす。双数は -kin, 複数は -ko を接尾する。(五感による区別の項では、数による区別はない)

† 単数のみしかない。

- 1) 強調形としては、表にあげた以外に、指示要素をさらに加える形がある (Ex. un oni, on ona etc.).
- 2) 五感による指示代名詞は物を指示する代名詞と組合せられることがある (Ex. one ini, one ona etc.).

場所の副詞は、「話し手からやや遠い」空間において「より遠い」に対応する副詞を欠いており、10As型となる。

2.2.5. 分類のシステムについて

以上述べてきた類型をまとめ上げたものが図19である。しかし、この分類のシステムについて、少し説明が必要であろう。

まず、この分類のシステムは、歴史的な系統関係を表現したものではなく、共時的な分類である。それは、現在という時点で、人間がどれほどの空間分割の類型を指示詞中にもっているかを明らかにするために、いくつかの指標のもとに整理・分類した

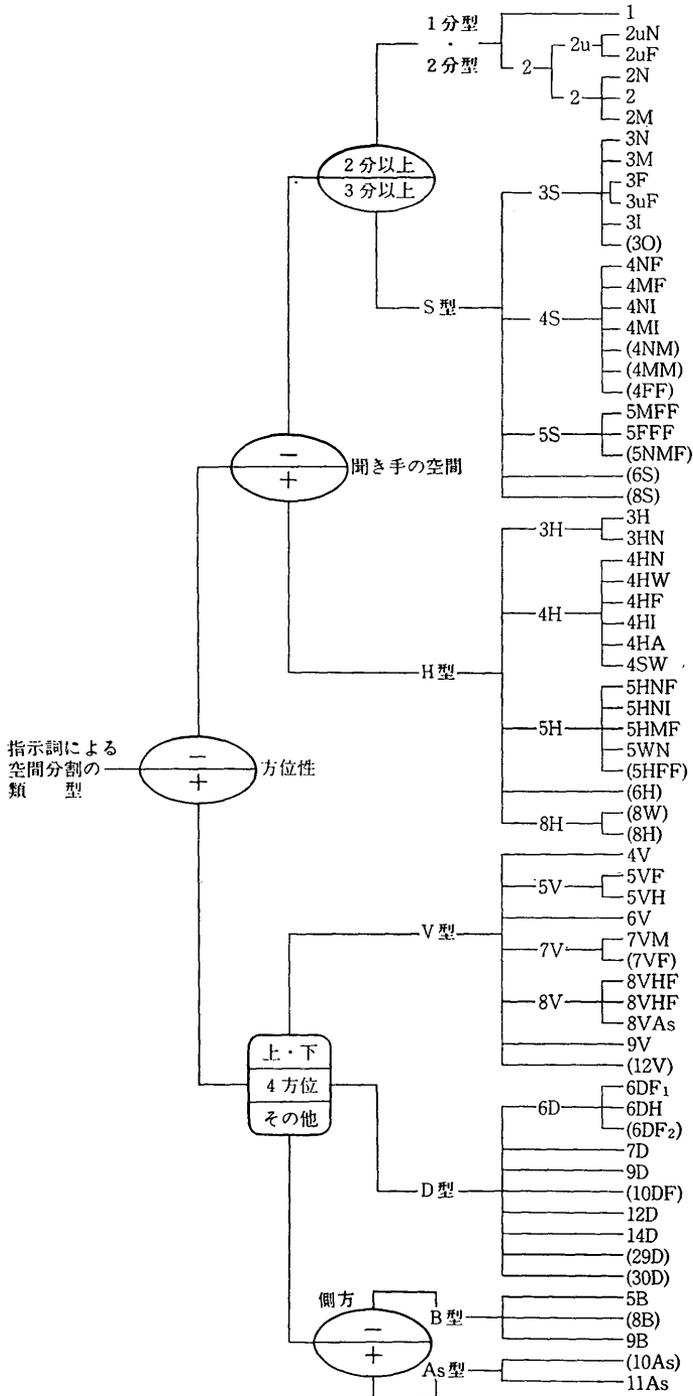


図19 指示詞による空間分割の種類の分類

() 内は場所の副詞しかみられない類型をしめす

ものである。ただし、系統関係をも多少、考慮してある。

勿論、ここで用いたような指標でなく、他の指標での分類も可能である。たとえば、いくつの空間に分けるかを重要な指標としてとれば、かなりことなつた分類像となることであろう。ここでは、「方位性」をもつかどうかを重要な指標としてとりあげている。それは空間の数をも考慮に入れている。すなわち、「方位性」をもつ類型は、相対的に大きな数に空間を分割するからである。あるいは、「方位性」を指示詞の中にとりこむことによって、空間をより細かく分割することができることをしめしている。また一方で、「方位性」をもつような類型は少数派であり、大多数はS型またはH型にふくまれることをも意識している。

「方位性」をもたない類型をS型とH型に分けた。しかし、1分型、2分型は、このいずれにも属さないと考えた方がよいであろう。何故ならば、H型には2H型というものがまず出現しないと考えられるからである。そして、H型とS型との対比は3分型以上の類型で意味をもってくるからである。しかしながら、2分型と3S型は容易に相互に変化する可能性をもつが、2分型と3H型との変換はかなりむずかしい。ただし、3H型が3M型的要素を強く加えるか、3M型になり、さらに2分型に変わることはありえる。しかし系統的に考えれば、2分型は3S型と強い相関性をもっていると考えられる。これらを考慮して、S型と1分型・2分型との区別を、「聞き手の空間」をもつかどうかの区別点の下位において分類してある。

系統関係でいえば、3M型と3H型、4M型と4H型はきわめて近い関係にあり、その中間形もみられる。しかし、H型はS型とはことなり、空間の分割の仕方では極めて特異的なものであり、別のもので分類されなければならないであろう。

「方位性」をもつ類型は、「上・下」の方位性をもつものと、「4方位」をもつもの、そして「その他」に分けられる。V型とD型のちがいは、それほど大きいものではない。D型のものも「上・下」の方位をもつものが多く、ただもう一組の方位が加わっているだけである。しかし、もう一組の方位が加わることによって、空間の分割される数は必然的に多くなるし、空間分割の様相は非常にことなってくる。

「うしろ」の空間をもつ類型(B型)や「側方」の空間をもつ類型(As型)は積極的に設定した類型でなく、すでに述べてきた類型にふくまれないものとしてとり出されたものであるにすぎない。

以上の結果から、大きく分けると1分・2分型、S型、H型、V型、D型、B型、As型の7類型があることになる。これらは、分割された空間の数によって分類され、さらにその分割のされ方によって下位分類されている。末端の分類のレベルでは、1

吉田 指示詞にみられる空間分割の類型とその普遍性

分・2分型において6類型、S型では11類型（場所の副詞の類型を加えると18類型）、H型では12類型（16類型）、V型では9類型（11類型）、D型では6類型（10類型）、B型では2類型（3類型）、As型では1類型（2類型）があげられ、合計47類型（66類型）が479語からえられた類型である。

3. 考 察

3.1. 言語群における特徴

3.1.1. Austronesian

この語族における類型を頻度順にならべると、2分型(24例)、3H型(17例)、4H型(10例)、3S型(9例)、5H型(3例)などとなる。このようにH型の頻度が極めて高く、全体の42%をしめる。これは、他の言語に比して、非常に高い値であり、Austronesianを特徴づけるひとつの要素である。また、H型の中でも4H型に5つの類型をもち、その変異の幅がもっとも大きい。この変異は特にPhilippinesに集中しており、この地域は他のいろいろの類型もみられ、指示詞に関しては興味深い地域である。

なお、4方位をもつ言語が少しみられる。6DF₁型のWeda語、Maba語、9D型のSangir語であるが、これらは恐らくNorth Halmaheran系の言語と強い相関性をもつものと考えられる。

表62 Austronesianの諸類型

類 型		Indonesian	Melanesian	Polynesian	合 計	
2i	1		Lau		1	2
	29			Nengone	1	
2	2	Nias, Paulohi	Arosi, Dehu, Aulau, Bambatana, Roviana, Senesip, Tasiko, Uripiv, Utupau		12	24
	3	Bacan, East Makian, Batak, Indonesian	Ambrym, Baki, Eromanga, Lifu, Kaliai-Kore		9	
	5		Sts. Philip & Tomasの言語		1	

3S	3F	2		Fiu		1	5	9
		3	Chamorro, Maguindando, Melanau	Iai		4		
	3M-3	Jawa, Murut	Motu, Sakao			4		
4S	4MF-4	Kambera				1	2	
	4MI-3		Trukese			1		
5S	5MFF-5	Maragasy					1	
3H	2			Nadrau		1	17	
		3	Hiliaynon, Ilokano, Iraya, Mongondow, Pangasian, Yapese, Tiruray	Fijian, Gilbertese, Kapingamarangi, Maori, Waropen	Hawaiian, Rotuman, Samoaan	15		
	4		Balawaia			1		
4H	4HF-4	Manobo				1	10	
	4HN-4	Tagalog, Bisayan	Nguna			3		
	4HW-4	Cebu, Kapampangan, Palauan				3		
	4HI-3		Kusaiean, Ulithian			2		
	4HA-?	Samal				1		
5H	5HF-3			Thahitian		1	3	
	5HNI-5		Puluwat			1		
	5HMF-5	Kadayan				1		
6D-6	Weda, Maba						2	
9D-9	Sangirese						1	
合 計		31		32		6	69	

3.1.2. Austro-Asiatic

Mon-Khmer 語族や Munda 語族では、類型に集中するものがほとんどなく、分散している。中でも Munda 語族では、さまざまな類型がみられるだけでなく、場所の副詞の類型をも考慮の内に入れると、11As 型や 30D 型のような複雑な空間分割の類型がみられる。そして、前者は話し手を中心として距離的に8分され、後者は9分されるという、細やかな距離的分割を行なっている極めて興味ある類型がみられる。これらの言語についてはより詳細な資料が是非ともほしいところである。また、Nicobar 語の場所の副詞もやや複雑な類型 (10DF 型) をもっている。

表63 Austro-Asiatic の 諸 類 型

類 型	Mon-Khmer	Munda	Nicobar	合 計
2	2 Cambodian			1
	10		Nicobar	1
	?	Kürkü, Asurī		2
3F	2 Annamese			1
	30	Mundari		1
	?	Khaṛiā		1
4MF-?	Chrau			1
5HNF-5	Paluang			1
4V-4		Juang		1
11SAs-10		Santali		1
合 計	4	6	1	11

3.1.3. Indo-Pacific

Papua 系の言語では、V型が11例もみられ、Papua 系の言語の中では44%をしめ、もっとも代表的な類型となっている。ただし、Finisterre-Huon 語群の言語を数多く加えているため、その数字はやや多すぎる。しかし、12D型のAghu語も「上・下」をもつ類型であるし、Narak語の指示詞は不明であるが、場所の副詞も7V型であるなど、Papua 系の言語がV型を特徴としていることは間違いないであろう。

North Halmaheran では、D型が特徴的である。2分型のTobelo語やWest Makian語も場所の副詞は10D型、7D型であり、この言語グループでは、4方位が重要な要素となっている。

表64 Indo-Pacific の 諸 類 型

類 型	Papuan	North-Halmaheran	Andaman	合 計
1	2 Kapauku			2
	?	Kamoro		
2	2 Bongu, Asmat		Andaman	3
	7		West Makian	1
	10		Tobelo	1

3S	3F-3	Marind, Mejprat, Sentani			3	4
	3M-3	Magi			1	
	4MF-4	Mountain Koiala			1	
	3H-3	Korafe			1	
	4HF-4	Kube, Uri, Kovai			3	
V	6V-?	Tehit			1	11
	7V-7	Kaeti			1	
	8VHF-8	Selepet, Nabak, Ono, Kâte, Rawa, Kewieng, Wantoat			7	
	8VNF-12	Ömie			1	
	8VAs-8	Barai			1	
D	6DF-10		Galela, Loloda, Tabaru		3	5
	7D-7		Ternate		1	
	12D-12	Aghu			1	
合 計		25	6	1	32	

3.1.4. Australian

とりあつかった言語数は少ないが、その中では 3F 型が多い。しかし 3HN 型のよ
うに、「話し手と聞き手から遠い」
という空間を欠き、指示の空間
に空白ができるような例が 1 例
(Awabakal 語) ふくまれている。

3.1.5. Sino-Tibetan

2 分型がもっとも多くみられる
が、一方で V 型の出現頻度もや
や高い。Róng 語の場所の副詞の
類型をも考えに入れると 4 例が V

型にふくまれる。この V 型は Papua 系言語の特徴であったが、Tibeto-Burma 語族
の言語においても特徴的な類型である。他の言語グループでは、わずかに Munda 語
族にその例がみられるだけである。

表65 Australian の 諸 類 型

	2-3	Narrinyeri	1	
3F	2	Thargari	1	3
	3	Ninyung	1	
	5	Malakmalak	1	
3H	3H-2	Maranungku	1	2
	3HN-2	Awabakal	1	
		6	6	

表66 Sino-Tibetan の 諸 類 型

類 型	Tibeto-Burman	Kam-Tai	Chinese	合 計
2	2	Burmese, Karen, Ao Naga, Tāngkhul Nāga, Dimasa, Garo, Empes	Mandairin	8
	3	Sikkimese		1
	4	Balti		1
	8	Róng		1
	?	Lhota Naga, Mikir		2
3M-?	Bárá			1
3H-3		Thai		1
5V	5VF-5	Tibetan, Lahu		2
	5VH-5	Lusai		1
合 計	16	1	1	18

3.1.6. Ural-Altaiic

2分型が基本的な類型であるが, Altai 語族では 3H 型も重要である。4NF 型も多くみられるが, この類型は 2分型を基本とした, 強調形による類型である。

3.1.7 Ibero-Caucasian

Basque 語と Georgian 語の 2 語しかあつかつていないが, ともに 3H 型であった。

3.1.8. Dravidian

表67 Ural-Altaiic の 諸 類 型

類 型	Uralic	Altaic	合 計
この語族では, 2分型と 3S 型のいずれかである。 3S 型の内でも 3M 型が中心で, 3F 型は例外的な類型である (次頁は表68参照)。	2	Bashkir, Buriat, Mongorian, Tuvinian, *Orkhon Turkic	5(1)
	3	Finnish	1
	?	Manchu	1
3.1.9. Indo-European	4NF	Uighur	1
	4	Hungarian	Chagatay, Tatar
3H-3		Koren, Japanese, Turkic	3
合 計	2	12(1)	14(1)

高い頻度順にあげると, 2分型, S3 型, 3H 型であり, これ以外にわずかに Lusatian 語の 4NF-2 型があるにすぎない。そして, これも 2分型を基本としたものであり, Indo-European は,

表68 Dravidian の諸類型

類 型	言 語	合 計
2-2	Gondi, Koḍagu, Kolani, Kota, Malto, Naiki, Ollari, Telugu, Toda, Tulu, Koya, Malayalan	12
3S	3F-3 kui, Kuwi	2
	3M-3 Tamil, Kannada, Pengo, Kurukh, Brahui, Parji	6
合 計	20	20

かなり単純な類型からなりたっている。さらに、3H型はほとんどItalicに集中している。ただしギリシア語も3H型であり、SlavicのMacedonia語はギリシア語の影響で3H型になったと考えられる。

Indo-Europeanでは3S型あるいは3H型が2分型に変化しつつある。特にGermanicではその傾向は顕著である。

Swadeshは、Indo-Europeanの指示詞について、興味深い説を述べている。すなわち、Indo-Europeanにおいては、比較言語学的にさかのぼれるよりずっと以前に、さまざまな特別な機能をもったいろいろの指示詞がもちいられてきた。その後、特別な機能が失われ、いろいろの指示詞が同じような機能をもつものに変化したと彼は考えている [SWADESH 1971: 196]。彼は明確にはのべていないが、Aleut語のような著しく分化した言語を一方で考えていたように思われる。しかし、形がいろいろあることは、ただちにいろいろの機能の指示詞があったことと結びつくとは考えられない。現在みられるIndo-European内のこの単純な類型は、Sanskrit語までにもおよび、この語族の基本的な類型であり、後にみるAmerican Arctic-Paleosiberianのような特異な指示詞の体系と決して比べられるものではない。

3.1.10. Afro-Asiatic

この言語グループでは2分型が86% (29例中25例)をしめ、典型的な類型であることをしめしている。4MF型のCushiticのSomali語も2分型に変化しつつある。ただし、このグループには1分型と考えられる言語があるとともに、2iF型という、かなり変った類型をもつTera語もふくまれている。

3.1.11. Nilo-Saharan

場所の副詞に不明なものが多いが、2分型、3S型 (特に3F型) および3H型に分散している。ただし、Nandi語やMaasai語にみられるように、4分型から2分型に変化したものがあり、もともとはもっと4分型が多かった可能性を示唆している。また、Sara Mbai語 (3M型) では指示物が「立っている」、「すわっている」「横になっている」といった状態によって変化する指示詞をもつような言語もふくまれている。

表69 Indo-European の 諸 類 型

類 型		Indo-Iranian	Celtic	Germanic	Italic	Greek	Slavic	合 計		
1-3				Swedish				1		
2i	2			Danish, Norwegian			Polish, Russian	4		
2	2	*Sanskrit, *Pali, Assamese, Panjabi, Gujarati, Hindi, Lamani, Hindustani, Urdu, Persian, Balochi, Southern Tati	Irish	English, Icelandic			Bulgarian, Ukrainian	17 (2)	19 (2)	23 (2)
	3			German	French			2		
3S	3F	2					Slovenian	1	4	9
		3			Dutch			Byelorussian, Serbo-Croatian		
	3iF-2							Czech, Slovak	2	
	3M	2	Singhalese						1	
3		Bengali			Rumanian			2		
4NF-2							Lusatian	1		
3H	2				Portuguese		Macedonian	2	7(1)	
	3				Catalan, Italian, Spanish, *Latin	Greek		5 (1)		
合 計		14(2)	1	7	7(1)	1	11	43(3)		

表70 Afro-Asiatic の 諸 類 型

類 型	Egyptian-Coptic	Semitic	Chadic	Berber	Cushitic	Omotic	合 計	
1-?						Welamo, Gofa	2	
2	2iF-2		Tera				1	
	2	2 *Egyptian	Mandaic	Anguss	Siwi		Kullo	5(1)
		4		Hausa				1
	?		Chaha, Tigrinya			Barasa, Burji, Hadiyyai, Kambata, Sidamo, Werizoid, Dasenech, Oromo, Bedauye, Bilin, Soho, Iraqw, Alagwa, Burunge	Janjero	17
	2N-?					Hamer	1	
3F-3		Arabic					1	
4MF-3					Somali		1	
合 計	(1)	4	3	1	15	5	29(1)	

表71 Nilo-Saharan の 諸 類 型

類 型	Chari-Nilo		Saharan	Maba	Fur	Koman	合 計
2	2	Dongala, Logo, Maasai, Nandi, Nyimang, Sara	Kanuri				7
	?	Mursi, Keliko, Madi, Moru, Avukaya, Bagimri, Berta, Binga, Borgo, Bulala, Debri, Didinga, Kara, Kresh, Lundu, Lugbara, Manvu, Mangabetu, Sungor	Tubu	Maba, Masalit	Fur		23
3S	3F	3 Hemein					1
		?	Nera, Tama, Shatt, Liguri, Dagu of Dar Fur, Dagu of Dar Sila, Murle, Nuer, Dinka, Lango, Luo, Kunama				12
	3M	3 Fadicca					1
		?	Sara Mbai, Kadaru, Midob				3
3H	3	Teso, Bari, Shilluk, Acoli					4
	?	Lotuho				Uduk	2
4HN-4	Porot						1
合 計	48		2	2	1	1	54

3.1.12. Niger-Kordofanian

Bantu 系言語の例が他に比して多いが、全体としてみると、2分型、3S型（特に3F型）が圧倒的に多い。Bantu 系言語ではむしろ3S型の方が多い。4NF型は、2分型を基本にしたものである。H型も頻度は少ないが、この言語グループにもみられる（次頁以下の表72参照）。

3.1.13. Khoisan

基本的には2分型であるが、各言語には異形が2～4個みられる。恐らく、これらは同意語であり、他の言語からの借用語が併用されていることによるものと考えられる。しかしながら、より詳細な資料が必要な言語グループである。

表73 Khoisan の 諸 類 型

類 型	Bushman	Hottentot	合 計
2i-2	Naron		1
2	2i /aumi, !o!kung		2
	2 /kam-ka!ke, //ng!ke, Masarwa (Kakia), /nu//en, //k'an//en, !kung, Masarwa (Tati)	Hottentot	8
合 計	10	1	11

3.1.14. 北・中米の言語

北・中米の言語を一括してとりあつかっているが、これらは多くの言語グループからなりたっている。ここでは、American Arctic Paleosiberian, Macro-Algonquian, Macro-Siouan, Na-Dene, Penutian, Hokan, Aztec-Tanoan, Oto-Manguean, その他 (Salish, Yuki, Keres, Wakashan, Tarascan など) に分けて、表中にその類型の出現頻度をまとめた。

American Arctic Paleosiberian ではいずれの言語も変った類型に属しており、もっとも複雑な空間分割を行なっている。Eskimo語は4方位をもつD型に、Aleut語は上・下の方向をもつV型にふくめられる。しかも、D型とV型のちがいは、それほど大きなものではない。また、Chukchee-Kamchadal語群は「うしろ」の空間をもつB型をその基本型としている。

Macro-Algonquianの言語では、2分型あるいは3F型からなっている。ただし、2M型をとるTunica語のような例外的なものもふくまれている。

表72 Niger-Kordofanian の 諸 類 型

類 型	Adamawa-Eastern	West Atlantic	Kwa	Mande	Benue-Congo		合 計			
					Bantu & Bantoid	Others				
2	2		Konyagi	Ibo, Yoruba, Santrokofi, Avatime, Grebo	Vai	Nilyamba, Pokomo, Giryama, Amba, Remi, Bajumi, Pulana, Kutswe, Tiv, Tikar, Vute, Gand, Kikuyu	Gurmana, Korop, Efik, Uwet	24	37	
	3			Nupe		Sukuma		2		
	?	Mbaugu, Gbaya, Ndogo, Bai, Bviri, Sere, Mba, Ma		Lefena, Masakin	Mende					11
3S	3F	3	Fulani	Otoro		Gusii, Taita, Caga, Tonga, Tswa, Ronga, Pai, Phuthi, Toro, Bwisi, Koria, Luhya, Nata, Soga, Ngoni, Ila, Gisu, Swazi, South Sotho, Langi		22	38	
		6					Shambala, Zulu			2
		?	Mundu, Ngbaka, Ma'bo, Mayogo, Gbaya, Togubo, Ngbandi, Ndungo, Dongo, Barambu		Katla, Rashad Tagoi		Kgaladi, Vanuma			14
	3M-3			Fulup		Kongo, Yao, Nyankole		4	43	
	3I-2					Bobangi		1		

4S	4NF	3				Chopi		1	10	11
		4				Konzo, Zigula, Gogo, Central Karanga, Venda		5		
		8				Shona, Mwera		2		
		?				Lozi, Kalanga		2		
	4MF-4				Ndebele		1			
5FFF-?	Zande							1		
3H-3					Swahili, Xhosa			2		
4HF	8				Tswana			1	2	
	?			Katcha				1		
合 計		18	3	13	2	56	4	96		

吉田 指示詞にみられる空間分割の類型とその普遍性

表74 北・中米の言語の諸類型

類型	American Arctic Paleosiberian	Macro-Algonquian	Macro-Siouan	Na-Dene	Penutian	Hokan	Aztec-Tanoan	Oto-Manguean	Others	合計		
1-4						Karok				1		
2	2	2	Ojiwa, Yurok, Wiyot,		Haida	Nez Perce, Tzotzil, Yokuts, S.S. Miwok, C.S. Miwok, P. Miwok, C. Miwok	Pomo	Aztec	Mazatec	Yuki	15	30
		3	Tonkawa				Diegueño	Hopi	Jicaltepec Mextec		4	
		4	Menomini			Coos, Lake Miwok				Wappo, Tarascan	5	
		5						Papago			1	
		?	Cheyenne			Tsimshian, Nass, Klamath				Clallam	5	
	2F-?		Tunica								1	
3S	3F	3	Eastern Ojiwa	Teton		Maidu, Siuslawan, N.S. Miwok, Maya					6	8
		7			Hupa						1	
		?	Fox								1	
	3M	3				Takelma					1	2
		4								Acoma	1	
	3N-3	Kamchadal									1	
											11	

4S	4MF-4							Tao			1	2
	4NI-3				Tlingit						1	
3H	2					Lower Chinook					1	7
	3					Kathlamat		Nahuatl			2	
	4							Luisiño			1	
	5					Wishram					1	
	?			Ponca						Kwakiutl	2	
4HF-5									Isthmus Zapotec		1	
5WN-8					Navajo						1	
9V-?	Aleut										1	
D	6D-?	Eskimo (E)									1	2
	14D-?	Eskimo (W)									1	
B	5B-3	Koryak									1	2
	9B-8	Chukchee									1	
合計	6	9	2	4	20	3	6	3	6	59		

Macro-Siouan および Na-Dene では例が少なすぎて、その像をつかまえることはむずかしいが、Na-Dene では、4NI 型や 5WN 型のような変った類型のものをふくんでいる。

Penutian では、2分型、3F 型、3H 型に分散しており、そのパタンはやや Bantu 系言語に似ている。

Hokan では 3 例しかとりあつかっていないが、1 例は 1-4 型、他の 2 例は 2 分型で、指示詞の空間分割としては単純なものである。

Aztec-Tanoan の言語では、例は少ないが 2 分型と 3H 型が他に比して高い頻度で出現している。

全体としてみると、American Arctic Paleosiberian を除いて、2 分型、3F 型、3H 型が優勢な類型であると思われる。

3.1.15. 南米の言語

ここでは、Macro-Chibchan, Ge-Pano-Carib, Andean-Equatorial の 3 つのグループに分けておいた。全体に例が少ないが、Ge-Pano-Carib では 3H 型に、Andean-Equatorial では 3S 型 (3F または 3M 型) への傾斜がみられる。

このグループには、Piro 語のように聴覚空間の方が視覚空間より遠いと考えている例や、Mocovi 語のように「横になっている」「すわっている」「止っている」「動いている」といった要素と遠近の区別がむずびついて指示詞を形成しているような例もふくまれている。

3.2. 類型の出現頻度

類型ごとにその頻度をまとめたものが表76である。まず、2分型が全体の約45%をしめ、第2位の3F型の2.5倍以上の例数がみられる。指示詞の空間分割のもっとも基本的な類型とみてよいであろう。また、2分型に3F型、3H型、3M型の上位4位までの類型を加えると、79.1%をしめる。のこりの20.9%を他の43類型がしめることになり、これら4つの類型がより一般的な類型とみてよいであろう。5位の4NF型や6位の2i型は、基本的には2分型の変形したものであり、7位の4MF型、4HF型は、4分型の典型的なものである。同じく7位の8VHF型、11位の6DF₁型がかなり高い位置をしめている。前者はニューギニアの Finisterre-Huon 語群の言語を、後者は North Halmaheran の言語を多くとりあげたためであり、これらの言語はともに同質性の高いものである故に、割り引いて考えなければならないであろう。

表75 南米の言語の類型

類 型	Macro-Chibchan	Ge-Pano-Carib	Andean-Equatorial	合 計		
2	2 Cayapa		Quechua (S.M.)	2	4	
	?	Tacana	Siriono	2		
3S	3F		Ipurina	1	3	
		3		Piro, Quechua (C.C.)		2
	3M	2 Chimu	Bacairi		2	8
		4		Baure	1	
		?		Gurani	1	
	3I-?			Ignaciano	1	
4MF-4			Aymara	1		
3H	3	Macushi		1	3	
	4	Panoan		1		
	?	Mocovi		1		
4SW-3		Carib		1		
合 計	2	6	9	17		

表76 下位のレベルでの類型の頻度 (479例中)

順位	類 型	例数	%	累積%
1.	2 分型	217(4)	45.3	
2.	3F 型	83	17.3	62.6
3.	3H 型	50(1)	10.4	73.0
4.	3M 型	29	6.1	79.1
5.	4NF 型	15	3.1	82.2
6.	2i 型	8	1.7	83.9
7.	4MF 型	7	1.5	85.4
7.	4HF 型	7	1.5	86.9
7.	8VHF 型	7	1.5	88.4
10.	1 分型	6	1.3	89.7
11.	6DF ₁ 型	5	1.0	90.7
12.	4HN 型	4	0.8	91.5
13.	4HW 型	3	0.6	92.1
14.	3iF 型	2	0.4	92.5
14.	3I 型	2	0.4	92.9
14.	4HI 型	2	0.4	93.3
14.	5HNF 型	2	0.4	93.7
14.	5VF 型	2	0.4	94.1

表77 上位のレベルでの類型の頻度

順位	類型	実例数	%
1.	2分型	227(4)	47.4
2.	S型	143	29.9
3.	H型	74(1)	15.4
4.	V型	16	3.3
5.	D型	10	2.1
6.	I型	6	1.3
7.	B型	2	0.4
8.	As型	1	0.2
合計		479	100.0

また、1分型が6例みられ、やや高位をしめているが、1分型の項でのべたごとく、それぞれの例が確かに1分型であるかどうかはやや疑わしいと考えられる。しかし、この類型が存在することは十分に考えられることである。

18の類型までが2例以上みられ、このりの29類型は、1例しか知られていない。指示詞の空間分割に

は、例数は少ないが変ったものがいろいろあることをしめている。

先の表を上位のレベルでの類型で整理したのが表77である。2分型、S型、H型が基本的な類型であり、これら三者で全体の92.7%をしめている。V型やD型という類型は明らかに少数派である。また、B型やAs型は例外的なものである。

表78は、空間の分割数で整理してみたものである。2分型、3分型、4分型の3類型で91.5%をしめる。そして、5分型とさらにつづくが、次に8分型があらわれる。これは先にのべた同質性の高いニューギニアの言語を多く加えたためである。この8分型と1分型を除くと、順位と空間の分割数とは平行していることが読みとれる。1分型を除いて、空間の分割数が少ないほど、より一般的な類型となることをしめている。

一方、分割数の多い類型に焦点をあててみると、V型やD型、B型、As型がその中心をしめる。すなわち、これらの類型の言語では、指示の形態素が上・下や4方位などの形態素と組み合わせられていることにはかならない。これらの言語は、Swadesh [1971] のいう local language に含まれるものであろう。しかし、この逆は正しくない。local language は常に複雑な指示詞の体系をもつもので

表78 空間の分割数での頻度

順位	類型	実例数	%	累積%
1.	2分型	227	47.4	
2.	3分型	168	35.1	82.5
3.	4分型	43	9.0	91.5
4.	5分型	11	2.3	93.8
5.	8分型	9	1.9	95.7
6.	6分型	7	1.5	97.2
7.	1分型	6	1.3	98.5
8.	9分型	3	0.6	99.1
9.	7分型	2	0.4	99.5
10.	11分型	1	0.2	99.7
10.	12分型	1	0.2	99.9
10.	14分型	1	0.2	100.1
合計		479	100.1	

はない。分割数の多い類型をもつ言語は、指示詞について特異的に発達したものと考えられる。

ところで、A. Bell [1978] は、言語の普遍性の研究に際して、言語のサンプリングにもっと眼を向けるべきであると述べている。現在までに公表されているこの種の研究の統計的な結果は、全体的な像をゆがめているという。Bell の主張はもっともであるが、ランダム・サンプリングするほどには言語資料は充分にととのっていない。そのため、研究者は、その制約の中でサンプリングを行ってきた。そして、Bell が示すようにならかなりのかたよりの結果を導き出している。そして、本報告でも Bell の指摘はそのままあてはまる。

Bell は言語の母集団を現在ある言語をとらず、そのもととなる言語集団をとる方が適当であると考えている。それは、たとえば、Bantu 系言語では、非常な分化を起し、

表79 Bell の算定数とそれをもとにした修正

言語グループ	Bell の算定数		修正前の実数	修正後	
	現存する言語数	3500年前の言語数		修正値	238に対するBellの数
1. Austric	800	ca. 55	80	47†	27
2. Indo-Pacific	700	est. 100	32*	20*	50
3. Australian	200	ca. 27	6*	6*	13
4. Sino-Tibetan	250	ca. 20	18	11	10
5. Eurasiatic	70	13	14(1)	10†	6
6. Ibero-Caucasian	35	4	2*	2	2
7. Dravidian	20	1	20†	0	0
8. Indo-European	90	12	41(3)†	8	6
9. Afro-Asiatic	200	23	29(1)	10	11
10. Nilo-Saharan	100	18	54†	14	9
11. Niger-Kordofanian	900	44	96†	33†	22
12. Khoisan	20	5	11	3	2
13. Amerid	900	est. 150	72*	72	75
14. Na-Dene	30	4	4	2	2
15. Ket	1	1	0†	0	0
16. Burushaski	1	1	0†	0	0
	ca. 9300	478	479(5)	238	235

*: 少なすぎる †: 多すぎる

現在では多くの言語に分けられている。しかし、それらは互いに非常によく似た言語であり、現在の言語数に比例してサンプリングすると、過剰なサンプリングになると考えている。現在の言語のひとつひとつのもつ重みがことなると考えているのである。そこで彼は3500年前という時期をとり、各言語グループごとにその言語数を算定し、母集団とした。言語の分類の仕方、3500年前という時期、実際の算定数に疑問はなくはないが、一度、Bellの算定数と比較してみたい。

本報告で用いた言語のサンプリングでは、Indo-Pacific, Australian, Ibero-Caucasian, Amerid では少なすぎ、Dravidian や Indo-European, Nilo-Saharan, Niger-Kordofanian, Khoisan では多すぎる。

もとより、ランダム・サンプリングによるような理想的な方法はとりようもない故に、元の資料を幾分修正することによって、Bellの算定数に近い形にしてみた。修正にあたっては、あまりに集中しすぎている言語 (Finisterre-Huon 語族や North-Halmaheran など) は減じ、また Tucker & Bryan [1960] などの文献にもとづく、場所の副詞の不明な、情報が不足していると考えられる言語も減じた。他は、だいた

いにおいて比例配分によって減じ、修正値と Bell の算定からえられた数値とが比較的
近い値になるように修正した。その結果が表79の右側の欄である。

表80 修正後の類型の頻度の変化

順位(修正前の順位)	類型	例数	百分率
1(1)	2分型	107	45.0(-0.3)
2(2)	3F型	39	16.4(-0.9)
3(3)	3H型	32	13.4(+3.0)
4(4)	3M型	12	5.0(-1.1)
5(5)	4NF型	7	2.9(-0.2)
5(7)	4MF型	7	2.9(+1.4)
7(10)	1分型	4	1.7(+0.4)
7(6)	2i型	4	1.7(0)
7(7)	4HF型	4	1.7(+0.2)
10(11)	6DF型	2	0.8(-0.3)
10(12)	4HN型	2	0.8(-0.1)
10(14)	3I型	2	0.8(+0.4)
10(14)	5VF型	2	0.8(+0.4)
14(14)	4HI型	1	0.4(0)
14(13)	4HW型	1	0.4(-0.2)
16(14)	5HWF	1	0.4(0)
16(7)	8VHF	1	0.4(-1.1)
18(14)	3iF型	0	0 (-0.6)

注) 表76に掲げた類型についての頻度の変化のみをしめしている。

Indo-Pacific, Australian では、もともとの言語資料が不足しているため、適正值にすることが難かしく、それらが少ないために Austric や Eurasiatic, Niger-Kordofanian が少し多くなっている。

さて、このようにして修正した言語サンプルでの類型の頻度を先の頻度と比較してみると、いくつかのちがいがみいだされる。まず順位としては、4MF型、5VF型、3I型が上昇し、8VHF型、3iF型がかなり下降している。また、2分型、3F型、3H型、3M型

の上位4位のタイプの順位は変化しないが、3F型や3M型の比率は下降し、3H型が上昇している。確かに、両者の間にはちがいが認められるが、8VHF型や3iF型を除けば、大きなちがいはない。Bellの主張は、サンプリングされた言語の数が少ないとき、また極端にかたよったサンプリングを行なったときには重要であるが、かなり多くの言語数を、あまりかたよらずにサンプリングすれば、それほど大きな影響はみられないように思われる。

3.3. 分節点の出現頻度

仮定的な分節点を提示し、その分節点を用いて、類型化を試みた。ここで、それらの分節点の出現頻度を考察してみよう。

もっとも高い出現率をもつ点は、K₄点であった。98.1%とはば総ての言語において、この点が用いられている。1分型や2iF型、2N型、2M型に属す言語のみにK₄点をかいているだけである。しかし、1分型にふくめたものにはなお疑問がのこるし、一方で場所の副詞を考慮に入れば、1分型でも、少なくとも2例はK₄点を用いている。K₄点の存在は、ほとんど普遍性をもつとよいであろう。

次に出現率の高い分節点はA₄点(141例)である。約30%の言語がこの点をもっている。この点も非常に重要な点であることはまちがいない。分節点ではないが「聞き手に属す」空間(H)の出現率がこれについて多い(82例)。ついで、A₂点(42例)が多い。「聞き手に属す」空間は、その2次的な意味として、A₂点を分節点とする距離的空間分割要素をもっているものがあり、A₂点はこの数字以上に多用されている可能性がある。

K₂点(27例)が次にあげられるが、これはK₁点かK₃点かの区別はそれほど明確でない。しかしK₄点以内にもうひとつ分節点をもつことは確かである。V₃点(7例)が次に多いが、この点は指示詞が用いられる潜在的な範囲をしめす場合が多く、実際上の頻度はずっと高いと想像される。

「話し手と聞き手に属す」空間(W)は7例みられるが、これは先の「聞き手に属す」空間とともに、人称代名詞の体系と密接な関係をもつ指示詞群の存在を示唆しているのであろう。

V₁点は6例みられ、この点のみすごすことのできない分節点である。他のA₁、A₃、V₂点は、頻度とし

表81 分節点の出現頻度

K ₁	2	0.4%
K ₂	27	5.6
K ₃	1	0.2
K ₄	470	98.1
A ₁	2	0.2
A ₂	42	8.8
A ₃	1	0.2
A ₄	141	29.4
V ₁	6	1.3
V ₂	1	0.2
V ₃	7	1.5
H	82	17.1
W	7	1.5
A	1	0.2

(サンプル数 479)

ては低く、それほど重要な分節点とは考えられない。

3.4. 距離による空間分割の一般像

前節の議論をふまえて、仮定的な空間分割の一般像を検討してみよう。人間の距離による空間分割の仕方には、3つのレベルがあると考えられる。第1のレベルは「生物学レベル」と称されるもので、単に人間だけにとどまらず、動物界全体にみとめられるレベルである。このレベルでは3つの空間が認められる。それらは「個体空間 (individual space)」, 「社会空間 (social space)」, 「社会外空間 (outer social space)」からなる。すなわち、個々の動物は、その個体に属す空間をもっている。それが「個体空間」であるが、この空間を実際に観察することはむずかしい。個体と個体とが近づいたときにたもつ距離を「個体距離 (personal distance)」というが、これは、それぞれのもつ「個体空間」のかかわりあいによって出現したものであり、その「個体距離」は状況によってさまざまに変化するものである。この「個体距離」は状況によって変化したとしても、なお観察可能である。しかし、「個体空間」を直接に観察することはむずかしく、そのため、これまで十分に把握されていなかったものである。

「社会空間」は Hediger や E. Hall が「社会距離 (social distance)」とよぶものとはほぼ同じものと考えてよい。それは、個体がその仲間とのつながりを保ち得る範囲内の空間である [HALL, E. 1966: 14-15]。「社会外空間」は「社会空間」の外側をいう。

第2番のレベルは、「生理学レベル」である。このレベルは、人間の生理学的機能

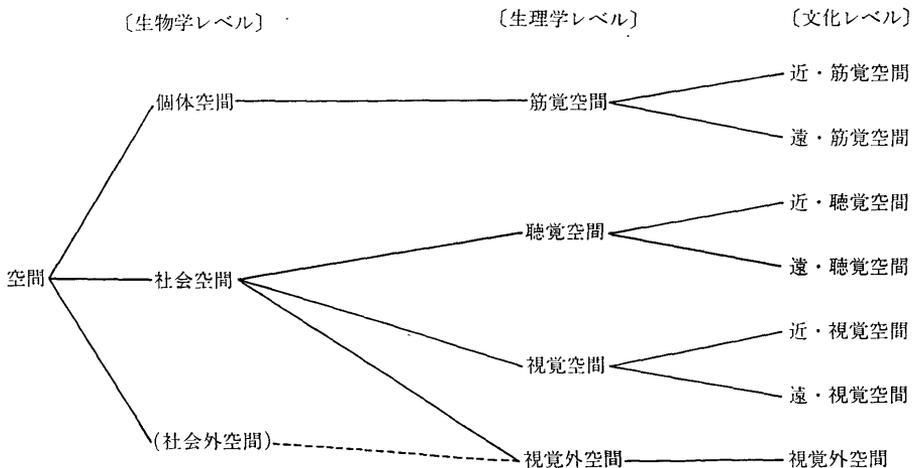


図20 空間分割のレベル

に制約されたレベルで、人間にとってほぼ共通したレベルである。このレベルでは、空間は3つに分割される。すなわち、「筋覚空間」、「聴覚空間」、「視覚空間」の3つである。「筋覚空間」は、恐らく嗅覚とも深いかわりあいをもっていると考えられる。これらは、それぞれ、次のように区別される。「筋覚空間」は、「手のとどく範囲の空間」をいう。ただし、手がとどくという状況は文化によって多少の変異がみられる。たとえばおもいきり手をのばせばとどく範囲や、一歩ふみ出せば手のとどく範囲というように変異する。しかし、「手のとどく範囲」という点では一致すると考えられる。「聴覚空間」は、「音（多くの場合、人や動物の声）の聞こえる範囲」をいう。この範囲も文化によって多少の変異がみられると考えられる。そして、「視覚空間」は「物のみえる範囲」をいう。この3つの空間は、先に提示した分節点、 K_4 、 A_4 、 V_3 の各点と一致するものである。そして、人間の場合、「筋覚空間」がすなわち「個体空間」なのである。

前章でみたように、 K_4 点はほぼ人間に普遍的な点であった。これは、「生理学レベル」と相関しながら「生物学レベル」に基礎をおいたものであり、そのため、高い普遍性がみられるのである。そして、大切なことは、この「個体空間」を人間は標識化していることである。

A_4 点の出現頻度の高さは、「生理学レベル」に基礎をおいていることによる。そして、この区別は、人間にとっては誰にでも容易に了解できる区別であるはずである。また、30%にすぎないが、この点も標識化されていることは注目すべきであろう。 V_3 点は、指示詞の空間分割として顕在化していないが、 A_4 点と同様に重要な点と考えられ、これも「生理学レベル」を基礎としている。

第3のレベルは「文化レベル」である。これは、文化によってことなる可能性のあるレベルである。このレベルでは、先のレベルでの空間分割をさらに遠・近に2分したものが重要であろう。すなわち「近・筋覚空間」、「遠・筋覚空間」、「近・聴覚空間」、「遠・聴覚空間」、「近・視覚空間」、「遠・視覚空間」である。それぞれの分割点は K_2 （または K_1 、 K_3 ）点、 A_2 （または A_1 、 A_3 ）点、 V_1 （または V_2 ）点である。これらは、前章でみたごとく、少数の言語では区別されている点であった。これらの空間がそれぞれの文化でどのように機能しているかは、別の興味ある問題である。

3.5. Proxemics との相関性

E. Hall の proxemics の研究は emic なものであると述べた。そして実際に彼の研究のほとんどは emic な研究への方向づけをもつものであるが、彼は proxetic とい

う語を用いて、人間の普遍的な空間の利用の仕方にも関心をしめしている [HALL, E. 1974]。しかし、彼が具体的に etic なものとして提示しているのは、(1)人間はさまざまな形で無意識的に空間を利用している、という proxemics の基本的な考え方と、(2)人間は4つの普遍的な距離感をもっているということの2つであろう [HALL, E. 1966: 113-129]。前者は、proxemics の前提であり、E. Hall の重要な発見である。後者は、E. Hall によれば、人間にとどまらず、動物にも適応できる仮説として提出している [HALL, E. 1966: 128]。彼はその4つの距離に、親密距離 (intimate distance)、個体距離 (personal distance)、社会距離 (social distance)、公衆距離 (public distance) という名称をつけた。

彼は proxemics を微小文化 (microculture) の現象として、強く印象づけられているようである。そのため個人差や下位文化 (subculture) に非常な注意を向けている。E. Hall のこの繊細さは、後にコンピューター化のための方法論 [HALL, E. 1974] の中にさらに明瞭な形でみることができる。彼のこの詳細な調査項目の個々については、それなりの理由をはっきりと認めることができるのであるが、これほどまでに細かい要素に分解し記述することを要求するとき、その資料の収集の困難さははかり知れないものである。よほどの時間と金を投入しないかぎり、無理なように思える調査項目である。そして、この方法論は、微小文化に対する方法論でしかないと私には思える。

E. Hall 自身は、レベルの問題を熟知した研究者である。彼は、proxemics の文化外的文化 (infrastructure, 生物学的なものに基づくもの)、前文化 (preculture, 生理学的なものに基づくもの)、そして微小文化の3つのレベルがあることを認めている [HALL, E. 1966: 101]。しかし、前文化と微小文化の間には、文化のレベル、下位文化のレベルなどが当然ながら存在すると考えられる。そして、通文化的な proxemics の研究 [HALL, E. 1966: 131-164] にみせた、彼の興味深くかつ、説得力のある研究は文化のレベルであって、下位文化や微小文化のレベルの問題ではなかったはずである。彼自身が説くようにレベル間の相関関係はかなり複雑なものであり [HALL, E. 1966: 101]、恐らく方法論も論理も少しことなったものを用意しなければならないであろう。私達にとって興味深いのは微小文化のレベルではなく、彼のいう文化外的文化や前文化のレベルといわれる文化のレベルである。そして、文化のレベルの研究法としては、彼が描いてみせた方法論では不適當ではないかと私は疑っている。彼はあまりに proxemics が微小文化のレベルの現象であるという印象にとらわれすぎている。

さて、もとにもどって、彼の提示した4つの距離は、具体的な形としては、アメリカの Northeastern Seaboard の、多くは知識人と分類される人々の proxemics とし

て表現されている。そして、それは筋覚、温覚、嗅覚、聴覚、視覚の5つの総合的な感覚をもとにして、それぞれの距離がしめされている。

Proxemics は、人間と人間との距離感に焦点をあてたものである。指示詞の空間分割の分析は人間と物との距離感である。そのため、proxemics では、一人の人間を中心としてみると、近距離においては細分化されているが（彼のあげる例ではほとんどの距離は10フィート [約 3m] 以内で細分化されている）、遠距離的にはほとんど注意が向けられていない。指示詞の空間成分の分析から、遠距離でも人間は空間を明らかに分割して認識していることをここで提示した。

今ひとつの重要な違いは、指示詞の空間分割は基本的に話し手中心の距離的な空間分割であるのに対して、proxemics の距離的分割は、2人の人間の間にある距離である。この違いがもっとも明確にみとめられるのは、「個体空間 (individual space)」と「個体距離 (personal distance)」のちがいである。「個体空間」は個々の人間がもつものであり、「個体距離」は2つの「個体空間」が関係しあって生じる安定的な距離をいう。E. Hall があげるアメリカ人の例でみると、「個体空間」の限界点は、「個体距離」の近相と遠相とを分ける点とほぼ一致している。このように概念化の仕方がこととなっているため、空間分割の仕方もこととなっている。

K_1 点は、話し手自身がしめている空間であり、E. Hall の距離には出てこないものである。 K_2 点は、同じくアメリカ人の例では親密距離の近相と遠相の区別点とだいたい一致する。そして K_3 点は、親密距離と個体距離の分割点あたりになる。

「聴覚空間」の分節点の基礎は人間の声の種類にかかわっている。そのため、E. Hall の距離の分割の仕方と似ている点がある。 A_1 点は「個体距離」と「社会距離」の区別点にだいたい相当するであろう。 A_2 点は「社会距離」の近相と遠相との区別点に相当すると思われる。そして、 A_3 点は「公衆距離」の近相と遠相との区別点に対応している。しかし、 A_4 点は、E. Hall の距離の分割にはもはやみられない分節点である。そして、 V_1 , V_2 , V_3 点という分節点は指示詞にはみとめられるが E. Hall の場合にはみとめられない分節点である。

このように、E. Hall の距離的分割と指示詞による分割は、強い相関性をもっているにもかかわらず、それぞれの重要な分割点は一致せず、少しずつずれている。それは、先にのべたように概念化のプロセスの違いによるものである。

指示詞の空間分割は、実は proxemics の空間分割の下部に横たわる、より基本的な空間分割と考えられる。そして、E. Hall の proxemics は、それを基礎とした2人の人間の間にもみられる距離を概念化したものなのである。

3.6. 類型の変化

本報告では、同時代における指示詞の空間成分の分析を目的としたものであるが、いくらかは、歴史的変化についても述べておきたい。しかし、それは現在という時点からみた、ごく最近におこったものを中心である。そして、目的とするところは、主としてどのようなパタンの類型の変化があるかをみいだすことである。

3.6.1. 減少する場合

(1) K_2 または K_1 点の脱落

Tagalog 語 (Austronesian) は 4HN 型から 3H 型に変化しつつある。また Palau 語 (Austronesian) においては、場所の副詞において 4HN 型から 3H 型への変化がみられる。Puluwat 語 (Austronesian) においては、同じく K_2 点が脱落し、5HNI 型が 4HI 型になりつつある。

K_1 または K_2 点による空間分割は、往々にしてあいまいになり、同意語化する。そして、どちらか一方が脱落するという現象がおこったであろうと推定される。この変化は多分、外来語との接触によって進行したと思われる。他の K_1 または K_2 点を区別点とする類型が今後、その脱落した類型になることが予想される。

(2) V_3 点の脱落

Luiseno 語 (Aztec-Tanoan) では、「みえないほど遠い」が「すでにのべたこと」に変換している。また、4HI-3 型の Kusai 語や Ulithi 語 (Austronesian)、4MI-3 型の Truk 語 (Austronesian) では「みえないほどに遠い」場所の副詞を欠いている。Tlingit 語 (Na-Dene) では 4NI 型が 3NI 型に変化しつつある類型で、「話し手から遠い」の指示詞が「すでにのべたこと」をさすようになり、その空白を「みえないほど遠い」の指示詞がうめている。また、Czech 語やポーランド語にみられる *onen*, *ów* といった死語化した指示詞もこの中にふくまれるかもしれない。

多くの指示詞の中で「みえない」ものをさす指示詞がみられるが、それらの何割かは「みえないほど遠い」指示詞であった可能性がある。そして、それらは、往々にして「過去のこと」や、「すでにのべたこと」をさす指示詞に変わったと考えられる。

(3) A_4 点の脱落

Toba-Batak 語 (Austronesian) は 3F 型であったものが 2-3 型に変化したものである。Germanic での「さらに遠い」の指示詞・場所の副詞は脱落する傾向にある。たとえば、オランダ語の *gene*, *ginds* は、口語ではほとんど用いられず、文章中にみ

られるだけになっている。

Tonkawa 語 (Macro-Algonquian) でも A₄ 点が脱落しつつあり, Miwok 語 (Penutian) では A₄ 点のおちた方言がみられる。そして, Miwok 語では「さらに遠い」をしめす指示詞は, 「すでにのべたこと」をさししめすようになっている。Kikuyu 語 (Niger-Kordofanian) でも Miwok 語と同様の現象がみられる。さらに, Nyankole 語 (Niger-Kordofanian) は 4MF 型であったが, 「さらに遠い」をしめす指示詞が「すでにのべたこと」をさすようになり 3M 型にかわっている。

Somali 語 (Afro-Asiatic) の場合は, A₄ 点だけでなく A₂ 点も落ちる傾向がみられ, 4MF 型が 2 分型に変化しつつある。また, Nandi 語や Maasai 語 (Nilo-Saharan) では, 4HF 型が 2 分型に変化している。この場合は, 「聞き手に近い」の指示詞は「すでにのべたこと (近い)」に, 「さらに遠い」の指示詞は「すでにのべたこと (遠い)」をさすようになっている。

以上のように, A₄ 点の脱落は V₃ 点の脱落と同様に, 意味的あるいは機能的変化がおこり, その結果, 空間成分として脱落した場合である。

(4) A₂ 点の脱落

Ganda 語 (Niger-Kordofanian) は「やや遠い」にあたる指示詞が「すでにのべたこと」をさししめすようになり, 脱落したものである。

ただし, このような例はまれである。「すでにのべたこと」をさししめす機能は, 「さらに遠い」や「やや遠い」の指示詞が往々にしてになうことになるが, 前者は anaphoric な機能の方に重点がかかり, 空間分割の指示詞として脱落してゆくことが多いが, 後者は両方の機能をかねそなえたまま安定することが多い。

(5) 「聞き手に近い」空間の脱落

イタリア語では, 「聞き手に近い」の指示詞 *quello* は口語では脱落しつつある。また, ポルトガル語では, 場所の副詞に「聞き手に近い」に対応する語がみられない。まれに, このような変化もおこると考えられる。

脱落する場合には, 2 つのタイプがあるようである。K₁ または K₂ 点の脱落のように, 恐らくは外来語の影響によって単に脱落するタイプと, A₄ や V₃ 点のように, 機能的分化によって, 空間分割としての指示詞から脱落する場合である。

3.6.2. 増加する場合

(1) 強調による増加

Diegueño 語 (Hokan) は 2-3 型であるが, この場所の副詞の「さらに遠い」は強

調によるものと思われる。また、Quechua 語 (Andean-Equatorial) の「さらに遠い」をしめす指示詞 (chachapi) は、「遠い」(chapi) の強調形と考えてよいであろう。また、Balawaia 語 (Austronesian) では、「話し手に近い」の強調形が加わり、場所の副詞が1つ増加している。

さらに典型的な例は、Thahiti 語 (Austonesian)、やハンガリー語、Chagatay 語 (Ural-Altai) の場合であろう。ハンガリー語や Chagatay 語は2分型であったものが、強調形により4NF型になったものである。Thahiti 語は3H型が同じく強調形により5HNF型に変わったものである。

Zande 語 (Niger-Kordofanian) では、主として母音の長音化によって、2分型が5FF型となっている。この母音の長音化というのも強調と考えてよいであろう。

(2) 「向う側」の意味的転換

Ternate 語 (Indo-Pacific) や East Makian 語 (Austronesian) では、「向う側」が「さらに遠い」の意味に転換したと考えられる。Carib 語 (Ge-Pano-Carib) の場合は少しちがったケースであるが、メカニズムは同じである。また、Motu 語 (Austronesian) では「向う側」と「さらに遠い」がひとつの語の意味要素として併存している。

「向う側」という要素は、「さらに遠い」とかなり容易に転換できるものであるらしい。2-3分型にふくまれるものには、このような例がさらにあるものと思われる。

(3) その他の意味的变化

Bantu 系言語にみられる場所の副詞的機能をもつ語における、pa- と ku- の意味的变化の場合である。pa- は「限定的」、ku- は「非限定的」と考えられるが、pa- は「近い」を、ku- は「遠い」を意味するようになり、さらに細かく空間を分割することになる。

(4) ことなったシステムの結合

Ponca 語 (Macro-Siouan) や Carib 語は2つのことなった指示詞の系をもち、それらが組み合わされた指示詞の体系をもっている。Navajo 語 (Na-Dene) の場合は、指示詞については2つの体系、場所の副詞については3つの体系が組み合わされたようにみえる。これらの例では、借用であるのか、内発的にできあがったものであるかは不明であるが、増加のひとつのメカニズムであると考えてよいであろう。

3.6.3. その他の変化

(1) 3M型と3H型

3M型と3H型は、非常に近い類型であり、相互に変化しうる類型である。しか

し、どちらから、どちらに変化したかを読みとることはかなりむずかしい。Bantu系の Swahili 語や Xhosa 語は 3M 型から 3H 型に転換した可能性が高い。また、Slavic の Macedonia 語はギリシャ語の影響で 3F 型または 3M 型から 3H 型にかわったものであろう。逆の例は、Italic の Rumania 語であらう。Italic ではフランス語を除いて総て 3H 型であり、Rumania 語ももともとは 3H 型であったと想像され、3H 型から 3M 型にかわったと考えられる。

(2) Dravidian の場合

Dravidian では、3種の指示の形態素が知られている。「話し手に近い」の i-、「話し手から遠い」の a-、そして一般に「話し手からやや遠い」をしめす u- の3つである。Dravidian では2分型、3M 型、3F 型の3つの類型があり、2分型は i- と a- からなり、3M 型は i-, u-, a- の3つの形態素をもつ。しかし、3F 型では u- は「さらに遠い」をさしめしている。ただし、この例は Kui 語と Kuwi 語のみである。

Tulu 語や Kota 語は2分型であるが、u- 系の指示詞が死語化している。この例から、もともとは 3M 型であったものが2分型に変化したと推定することを可能にする。しかし、この仮定だけでは、同じ u- 系の語が、ある言語では「さらに遠い」をしめすことの説明はできない。

そこで、i-, a- しかなかったところに u- 系の語が加わったと仮定してみよう。ある言語では加わり、ある言語では加わらなかったのかもしれない。そして、加わったものでは、「やや遠い」指示詞として加わったものと、「さらに遠い」指示詞として加わったものの2つの場合がある。その後、「やや遠い」指示詞をもつものから、その指示詞が脱落したものが Tulu 語や Kota 語であると考えられるわけである。

なるほど、この説明は一見、よくできているように見えるが、難点が1つだけある。「やや遠い」という指示詞が脱落することはありえても、加わることは非常に考えにくい。加わるならば、「さらに遠い」という指示詞の方がはるかに可能性が高い。それ故、先の説明では少々不自然である。

Dravidian の場合、おそらく、3M 型が原型であったであらうと考えられる。そして、3M 型からあるものは2分型へ変化した。そして、2分型に変化したものの内、Kui 語と Kuwi 語は、「さらに遠い」という指示詞を加えなおした。そのとき、u- 系の語がそれにあてられたと考える方が自然であると私には思える。

実際にこのような変化がおこったかどうかは、もとより明らかでない。しかし、ある言語では脱落がおこり、ある言語では脱落がおこっていないということは確かであらう。この差はいったい何によっておこったのかは、かなり興味深い点である。

(3) Halmahera の言語の場合

Galela 語や Loloda 語, Tabaru 語は 6DF₁-10 型であるが, これらは, ニューギニアの言語と Austronesian との接触によっておこったものであると推測した [YOSHIDA 1980a]。そして, Austronesian の Maba 語 や Weda 語は, それらの言語の影響をうけて 6DF₁ 型になったと考えた。

Ternate 語は 7D-7 型であるが, 場所の副詞では 4 方位において遠近の区別がない。この場合は, 増加や減少というよりは, はじめから, そのような形で形成されたものであると考えている。

また, Tobelo 語や West Makian 語では, 指示詞の体系に 4 方位はとりこまれず, 2-10型, 2-7 型となっている。これらでは, 指示詞の体系と場所の副詞の体系は別々のものと認識されていたと考えられる。

Austronesian の East Makian 語は 2-3 型であるが, この言語は North Halmaheran の影響が少なく, Maba 語や Weda 語のようにはならなかった例であろう。

このように, 他の言語グループと接触しても, 同じ変化がおこるわけではなく, さまざまの変異がみられるものである。

指示詞の歴史的変遷をあとづけることは, 非常にむずかしい問題である。しかし, 全体としてみると, はじめから単純な類型をもつものと, 特殊化の方向に進みつづけたもの, そして, 一度は特殊化の方向に進んだが後に単純化の方向に進んだものの 3 つの系列があると考えられる。そして, 人類全体としてみると, はじめから単純な類型をもつものがほとんどであったと考えられる。Halmahera やニューギニアの場合は, 特殊化したものであり, American Arctic Paleosiberian の言語は 3 番目のものと考えられる。Swadesh が Indo-European で考えた説明は, American Arctic Paleosiberian では適当なものであっても, Indo-European には適切なものではないと考えられる。

3.7. 指示詞の構成要素

本論では, 指示詞中の空間成分について, 検討してきたが, 指示詞を構成する要素は勿論これにとどまるものでない。本章では, 空間成分以外の要素について, 若干の考察をしておきたい。これは, 指示詞の意味における全体的検討のメモ書きのようなものである。

3.7.1. 性, クラス, 複数

性やクラスが、指示詞をもちいる際にかかわらず関与する言語は多くみとめられる。Indo-European や Afro-Asiatic では、かなりの頻度で、これらが用いられている。また、Bantu 系言語ではクラスが重要である。しかし、これらは、本来名詞の属性であり、指示詞、特に指示代名詞は、この名詞の属性がそのままもちこまれたものであろう。このような属性はむしろ名詞の属性として研究されるものである。

このような中で、指示詞の属性とみられるものに、動物と非動物の区別がある。Munda 語族や、北アメリカの Macro-Algonquian, Aztec-Tanoan の Luiseño 語、南アメリカの Carib 語、Niger-Kordofanian の Ma 語などはこの区別をもっている。Carib 語群の Macushi 語ではむしろ人と人以外のものに分けている。Austronesian の Puluwat 語は、人、動物、非動物の区別をもっている。このような例の最も複雑なものは、Oto-Manguean の Jicaltepec-Mixtec 語にみられる。この言語では、動物と非動物、動物はさらに人間、超自然物、動物に分けられ、人間はさらに男、女、集合的の3つに分けられる。

Afro-Asiatic の Hamer 語はこの系列にふくまれるが、少々ことなっている(表10参照)。すなわち、男性(雄)と女性(雌)との対立は動物においてみとめられ、同じ語は非動物では、男性にあたるものは「小さい」ものに対応し、女性に対応するものは「大きい」ものを意味している。このように、ひとつの語が、指示するもの(動物または非動物)がことなるとき、その意味もことなるといふ例も存在する。

数に関しては、基本的には、これも名詞の属性と考えられ、単、複、双数、または集合的なものをさすなどの区別がある。指示詞に関しては、それほど重要なものとは思われない。

格変化をもつ言語もかなりみられるが、これらは指示詞の特徴というよりは、名詞の特徴、あるいは文法的性質の直接の反映であり、重要視する必要はないと考えられる。

3.7.2. 時間的要素

指示詞中の空間成分は容易に時間的な遠近に転換される。すなわち、「話し手に近い」は現在に、「話し手から遠い」は過去または未来に対応する。Austronesian の Gilbert 語では、「聞き手に近い」は未来に、「両者から遠い」は過去に対応し、現在、未来、過去を区別している。同じく、Austronesian の Puluwat 語では「話し手に非常に近い」と「話し手に近い」はともに現在を、「聞き手に近い」は時間的には用

いられず、「両者から遠い」は未来に、「みえない」は過去に対応している。また、Austronesian の Thahiti 語では、実際の指示に用いられる指示詞は現在において用いられ、過去と未来は anaphoric の指示詞（普通の指示詞とことなった形をもつ）が用いられ、過去に向けて4つの遠さが区別されている。そして、その内の1つは、未来にも用いられる。

これらの内、Gilbert 語や Puluwat 語は指示詞が同時に空間的意味と時間的意味をふくんでいる例であり、一般にはこのような形がほとんどである。Thahiti 語の場合は、anaphoric な指示詞が時間的要素をになっており、普通の指示詞は、むしろ現在のなものとして分化している。

Austronesian の Sakao 語では指示詞そのものが時間的変異に対応する形をもっている。Sakao 語は 3M 型であるが、距離的にことなる3つの指示詞に、それぞれ現在形と非現在形（過去および未来）が存在する。それ故、「過去にここにあったもの」は、「現在ここにあるもの」をさす場合とはことなった形が用いられる。Cebu 語の場合（表35参照）は場所の副詞に現在、過去、未来の3つの区別があり、それぞれに4つの指示詞（4HS 型）に対応する副詞がある。たとえば、「現在のここ」、「未来のここ」、「過去のここ」という3種の「ここ」が存在する。

普通の指示詞あるいは anaphoric な指示詞とは別に、普通の指示詞と形態的には相関関係がみとめられる時間の指示詞が独立しているものがある。Nilo-Saharan の Porot 語はそのひとつの例である。この言語では指示詞は空間的に4分（4HN）されるが、時間の指示詞は「近い過去」と「遠い過去」の2つの語をもつにすぎない。Austro-Asiatic の Annam 語の場合は、指示詞は 3F 型と考えられるが、時間の指示詞は4種あり、現在から過去に向かって4つの遠さの等級がみられる。

このように、時間的要素については、(1)指示詞が空間的・時間的要素をあわせもつ場合（この例がもっとも多いが、空間的要素と時間的要素の対応関係には多少の変異がある）、(2) anaphoric は指示詞が時間的要素を主としてになう場合、(3)指示詞が時間的要素と空間的要素によって分離される場合、(4)比較的独立した時間の指示詞をもつ場合の4つに分かれそうである。

指示詞における時間の認識というテーマは、これ自体で別に検討するに価するテーマであると思われる。

3.7.3. 「みえる」と「みえない」

「みえないもの」という指示詞は、指示詞の要素の中でかなりむずかしい要素であ

る。それは、「みえないほど遠い」という空間的要素にかかわる場合と、「過去のことでみえない」という時間的要素（機能としては *anaphoric* な用法として用いられる）、そして「視覚的に現在みえない」という3種に分けられる。実際の例では、これらの3種の要素が併存するため、その区別がかなりむずかしい。「みえないほど遠い」という要素をふくんでいるものについては、すでに本文中にふれた。のこる2つの要素について、少しふれておきたい。

北アメリカの *Lower Chinook* 語は *3H* 型であるが、それぞれの空間的要素に対応して、「みえる」/「みえない」の区別が存在する。恐らくは、「視覚的にみえない」という要素が先行し、その後、「みえる」は現在、「みえない」は過去に対応する時間的要素へと発展したものと思われる。このような例は、同じく北アメリカの *Kwakiutl* 語、*Austronesian* のマダガスカル語にもみられる。先にのべた、*Sakao* 語も、この例に加えてよいと思われる。また *Eskimo* 語でも、指示詞に「みえる」/「みえない」の区別がみられる。

また、*anaphoric* な指示詞を別にもつものもかなりみられ、これらも「みえる」/「みえない」の対立に関係すると思われる。

3.7.4. 動作による分類

指示物の動作に関係する指示詞がある。この典型的なものは、北アメリカの *Aleut* 語、*Eskimo* 語、南アメリカの *Siriono* 語、*Mocovi* 語、*Nilo-Saharan* の *Sara Mbai* 語である。その他には「近づきつつある」という要素をもつ *Halmahera* 島の *Galela* 語、*Loloda* 語、*Tabaru* 語、*Tobelo* 語、*Niger-Kordofanian* の *Katcha* 語がある。

さて、これらの内、「近づきつつある」という要素をふくんでいるものは、総て、「話し手から遠い」空間においてのみあらわれるものであり、他の動作を要素としている場合とは区別されるものであろう。そして、これらは、付加的に加わったものではないかと考えられる。ただし、*Katcha* 語のみは、「近づきつつある」という要素が独立するのではなくて、「止っている」という要素と対立するものであり、*Galela* 語などとはことなっている。

Katcha 語では「近づきつつある」と「止っている」の対立であり、遠方のみでこの区別がみられる（*Katcha* 語は *4HF* 型であり、その「さらに遠い」空間において、この区別がなされている）。*Siriono* 語では指示物が動いているかどうかの問題であり、遠・近ともに（*Siriono* 語は2分型）「動いている」と「静止している」によって区別されている。

Eskimo 語では、距離にかかわらず、指示物が話し手に「近づいている」のか、「はなれつつあるのか」によって区別されている。ただし、Eskimo 語では、話し手にとって左右に動いているものをさすときは、「非限定的」な指示詞が用いられる [宮岡 1980: 41]。

この「非限定的」な指示詞は、「限定的」な指示詞と対立するものであり、基本的には「広がりをもつもの」と「点的なもの」を区別するものである。村のようにある広がりをもったものは前者に含められる。また、立っている木ならば、「限定的」であるが、横たわっている木ならば「非限定的」となるような区別にも用いられる [宮岡 1978: 16]。先の、話し手にとって左右に動くものは「ある広がり」をもったものと認識されているのである。

Aleut 語の「有限的」と「拡張的」という対立も、Eskimo 語の「限定的」/「非限定的」の対立とほぼ同様のものと思われる。

Aleut 語では、Eskimo 語にみられたような、「近づきつつある」/「はなれつつある」という対立はもたず、ともかくも「動いている」かどうかで区別される指示詞群がある。ただし、総ての分割された空間にみられるものではなく、「話し手の近く」、「話し手にとっての縦方向（近づきつつある／はなれつつある）」、「上方（恐らく上流など）」、「下方（下流）」の4つにみられるだけである。

Mocovi 語は、3H 型であるが、「動いている」/「静止している」だけの区別ではなく、「静止している」の要素にはさらに「横になっている」、「座っている」、「立っている」の区別がみられる。しかも、これらの要素は距離と密接に相関している。すな

表82 Mocovi 語の指示詞

区別点	話し手に近い			聞き手に近い(やや遠い)			遠い		
	単数		複数	単数		複数	単数		複数
	男性	女性		男性	女性		男性	女性	
横になっている	iddissó	addissó	yyyoassó	iddi	addí	yyyoá	—		
すわっている	ennasó	annasó	ennoassó (m) annoassó (f)	inni	anni	yyyoa	innissó	annissó	yyyoassó
止っている	—			ennà	annà	ennoà (m) eddoà (f)	edasó	adassó	eddoassó
動いている	—			—			esó	assó	essoá

わち、「横になっている」は、近・中に、「座っている」は、近・中・遠に、「立っている」は中・遠に、「動いている」は遠のみにみられるという規則性をもっている。

このような指示物の状態による区別は、Eskimo 語や Aleut 語でも可能である。「横たわっている」と「立っている（座っている）」との対立は「限定的」と「非限定的」の対立の中にふくまれ、Mocovi 語の例にかなり近いものになる。

ところが、「立っている」、「座っている」、「横になっている」の区別はアメリカからはるかにはなれたアフリカの Sara Mbai 語にもみられる。Sara Mbai 語は 3M 型であるが、その近・中・遠の総てに、この3つの区別がみられる。人間の概念化の平行性を意外なところでみるものである。

3.7.5. その他の要素

指示詞の要素として非常に特殊なものが Munda 語群の Santali 語にみられる。指示詞は普通、物を指示するものであるが、Santali 語では、この他に五感による区別がある。「みえるもの」と「きこえるもの」の対立があり、それぞれことなった語をもつ。この場合には、「話し手に近い」空間ではもちいられない。「きこえるもの」は同時に「におい」に対しても用いられる場合がある。

また、珍しい例であるが、Bengal 語では、上品な指示詞と下品（普通）な指示詞との区別がある。これも、指示詞の要素のひとつではあろうが、一般的なものとは考えられない。

4. 結 論

4.1. ま と め

本報告は前報告 [YOSHIDA 1980a] と強い相関性をもっている。前報告は民俗方位を、本報告では主として距離の認識をテーマとした一対の研究である。また一方で、本報告は前報告の一部をさらに拡大し、発展させたものでもある。そして、これらの研究には共通して通文化的な視点がすえられている。

本報告では、まず人間がどれほどの種類の空間分割の認識を無意識の内に行なっているかを明らかにした。479の言語から47の指示詞の種類をえた。場所の副詞の種類を加えれば66の種類がみられる。そして、そうした空間分割の認識の種類だけでなく、それらの種類の頻度をも明らかにした。すなわち、2分型がもっとも普通の種類であり、3F型、3H型がそれにつぐ。これら3種類の種類で、全体のおおよそ3/4

をしめる。また、より上位の類型でみると、2分型、話し手中心の類型(S型)、聞き手に属す空間をもつ類型(H型)の3種で全体の90%ほどをしめ、他の上・下の方向性をもつ空間(V型)や4方位をもつ空間(D型)などは、極めてわずかであった。さらに、分けられる空間数でみると、2分型、3分型の2種類が圧倒的に多く、一般に分割される数が多いほど、その出現頻度は減少する傾向にある。

また、本報告では、距離的空間認識としての etic な単位の仮説を提示した。そして、その仮定のもとに、人間にほぼ普遍的な空間の距離的分節点として「手のとどく限界点」があることをしめた。そして、かなり広くみとめられる分節点として「声のとどく限界点」があることを明らかにした。

これらの仮定的分節点の検討をふまえ、さらに一步すすめて、人間の距離的空間認識の一般像を提示した。それは、人間の距離的空間認識には、3つのこととなったレベルの認識があり、それぞれの分割された空間はこととなったレベルの反映であるという説である。すなわち、生物に基礎をおく「生物学レベル」がもっとも基層にあり、その上に、人間に共通した生理学に基礎をおく「生理学レベル」があり、その上に、文化によってことなる可能性をもつ「文化レベル」の層がある。そして、「手のとどく限界点」という分節点は、「生理学レベル」の分節点であるとともに、人間にとっての「生物学レベル」の分節点でもある。そのため、この分節点は、ほぼ普遍的といえるまでに、指示詞の空間成分の区別点として出現した。また、「声のとどく限界点」は「生理学レベル」の分節点であり、潜在的に普遍性のある分節点である。そして、指示詞の空間成分としての出現頻度は低い「視覚のとどく限界点」も「生理学レベル」の分節点と考えられる。さらに、「文化レベル」の分節点としては、「生理学レベル」の分節点で分けられた筋覚空間、聴覚空間、視覚空間を遠・近で分割する点をとれば、まず充分であると考えられる。

人間にとってほぼ普遍的と考えられる「手のとどく限界点」は、「生物学レベル」の「*individual space*」の分節点であるとした。この「*individual space*」は E. Hall のいう「*personal distance*）」とはこととなった概念である。すなわち、「*individual space*」は、個々の生物が本来的にもつ、その個体に属す空間である。一方、「*personal distance*」は2つ以上の「*individual space*」が組み合わせられてできあがった安定的な個人間距離をいう。

実際、E. Hall が提出した距離的空間分割は、人間の個人間距離を基礎としている。そして、それは、ここで提示した個人中心の距離的空間分割を背景にしている。すなわち、ここでのべた空間分割がより基礎的なものなのである。

4.2. 今後の問題

文化というものは、物事の認識の諸体系の集合である。しかし、私は総ての認識の体系が有機的に結びつけられ、ひとつの統一体をなすものが文化であるとは考えていない。認識の諸体系が互いに密接に関係しているものもあれば、かなり独立性の高いものもある。また、その諸体系が通時的に不変であるとも考えていない。一方で、それらはきわめて文化特異性の高いものから、人類普遍性の高いものまで、さまざまな変異があると考えている。

私にとっては、文化に特異的な認識体系の研究と、人間に普遍的な認識体系の研究は2本の柱である。本報告では、明確に後者の立場をとっている。

また、私にとって、空間の認識だけが問題ではない。認識の諸体系というとき、それは当然ながら、さまざまなものをふくむ。人間の分類の一特殊例 [吉田 1976] や、病気の民俗分類 [吉田 1978]、サゴヤシの民俗分類 [YOSHIDA 1980c]、時間認識の類型論 [YOSHIDA 1980b] などこのような研究の一環としてとりあげてきたつもりである。もとより、総ての認識の問題を具体的に行なえるものではない。より根源的な、それぞれの認識の現象をこえた人間にとっての認識の一般像を描きだすことはひとつの興味ある問題と考えている。一方、一文化のもっとも特異的な認識体系を明らかにし、その文化を理解するための原理・原則をみいだすことも私にとっては大切な問題である。

空間論に限っていえば、主要問題は「個体空間」に関係している。「個体空間」の人間にとっての基本的な像は「手のとどく限界点」であった。それは種特異的なものではないかと考えている。サルやその他の動物でも「個体空間」をもっていると考えられる。しかし、「個体空間」が指示詞の分析からえられたようには、他の動物では、それをとりだすことは非常にむずかしい。観察可能なのは「個体距離」でしかない。しかし、「個体距離」から「個体空間」をとりだす手法はあるのではないかと考えている。そして、それがとりだせたとき、「個体空間」が生物学的基礎をもつものであることをより強く主張できるであろう。

また、「個体空間」を「手のとどく限界点」としたが、その実際的な空間は微妙にことなる可能性がある。さらに、この空間は、いろいろの状況でさまざまに変化する。特に心理学的にこの空間はのびちみする。また、文化によって「個体空間」の用い方はさまざまであろう。このような emic な研究は必ず興味深い結論を導くものと思われる。

「個体空間」は指示詞の分析から導き出した。このことは、逆に「個体空間」は標識されているともいいかえることができる。そして、そのことは、emic な研究に対して方法論的に有利な状況をつくりだしている。E. Hall は非言語的な観察からさまざまな興味ある事実をひきだしたが、その調査法はかなりやっかいなものであった。しかし、言葉を通して、それらの現象を研究することは、それよりはやや容易になると考えられる。

また、かなり普遍性の高い「聞き手に属す空間」も emic な研究に用いることができるかもしれない。それは「話し手に属す空間」との組み合わせによって、より解釈が容易となる現象もあるであろう。たとえば、E. Hall のあげるケネディのまわりにできた30フィートの空間の説明も容易であろう [HALL, E. 1966: 124-125]。

最後に、ここにあげた言語の例は、かならずしも適切であるかどうか、問題がないわけではない。あやまり、あるいはより適当である例があるかもしれない。その時は、すみやかに訂正したいと考えている。

文 献

- AALFIO, Maija-Hellikki
 1966 *Finnish for Foreigners*. Kustannusosakeyhtiö. Otava.
- ABRAHAM, R. C.
 1940 *The Principles of Tiv*. Government of Nigeria. London.
 1959 *The Language of the Hausa People*. University of London Press.
- ABRAHAMSON, Arne
 1962 Cayapa. In Benjamin Elsen (ed.), *Studies in Ecuadorian Indian Languages: I*, Summer Institute of Linguistics No. 7, pp. 217-247.
- ADRIANI, N.
 1893 *Sangireesche Spraakkunst*. A. H. Ardiani. Leiden.
- ALEJANDRO, Rufino
 1954(1947) *A Handbook of Tagalog Grammar*. University Publishing Co.
- ALEXANDER, W. D.
 1891 *A Short Synopsis of the Most Essential Points in Hawaiian Grammar*. Press Publishing Co.
- ALLAN, Edward J.
 1976 Kullo. In M. Lionel Bender (ed.), *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*, Monograph No. 5, Occasional Papers Series, Committee on Ethiopian Studies, African Studies Center, Michigan State University, pp. 324-350.
- ANDERSON, J. D.
 1920 *A Manual of the Bengali Language*. Cambridge at the University Press.
- ANDREWS, L.
 1854 *Grammar of the Hawaiian Language*. Mission Press.
- ANTONISSEN, A.
 1958 *Kadazan-English and English-Kadazan Dictionary*. Government Printing Office. Canberra.

- AOKI, Haruo
1970 *Nez Perce Grammar*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 62.
- ARMBRUSTER, Charles Hunbert
1960 *Dongolese Nubian, a Grammar*. Cambridge at the University Press.
- ASHTON, E. O.
1961 *Swahili Grammar*. Longmans.
- ASHTON, E. O., E. M. K. MULIRA, E. G. M. NDAWULA & A. N. TUCKER
1954 *A Luganda Grammar*. Longmans, Green & Co.
- BALLER, F. W.
1900 *Mandarin Primer*. China Inland Mission and American Presbyterian Mission Press.
- BAPTISTA, Praiscilla & Ruth WALLIN
1967 Baure. In *Bolivian Indian Language: I*, Summer Institute of Linguistics No. 16, pp. 27-84.
- BARAGA, R. R. B.
1878 *A Theoretical and Practical Grammar of the Otchipwe Language*. Beauchemin & Valois Pub.
1882 *A Grammar and Dictionary of the Otchipwe Language*. Beauchemin & Valois Pub.
- BARKER, M. A. R.
1964 *Klamath Grammar*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 32.
- BARNUM, Francis
1901 *Grammatical Fundamentals of the Innut Language* (as Spoken by the Eskimo of the West Coast of Alaska). Ginn & Co.
- BEECH, Mervyn W. H.
1911 *The Suk, Their Language and Folklore*. Oxford at the Clarendon Press.
- BEGBIE, William Henry & Abraham JOSEPH
1877 *English, Burmese, Hindustani and Tamil Vocabulary in English Characters*. The Albion Press.
- BELL, Alan
1978 Language Samples. In Joseph H. Greenberg (ed.), *Universals of Human Language Vol. 1, Method & Theory*, Stanford Univ. Press, pp. 123-156.
- BELL, C. R. V.
1968 *The Somali Language*. Longmans, Green & Co.
- BELMER, Francisco
1892 *La Lengua Mazateca*. Wenceslao Güendulain y Comp. Oaxaca.
- BENTLEY, W. Holman
1967(1887) *Dictionary and Grammar of the Kongo Language*. The Baptist Missionary Society.
- BENTON, Richard A.
1971 *Pangasinan Reference Grammar*. Univ. of Hawaii Press.
- BERGLAND, Knut
1951 Aleut Demonstratives and Aleut-Eskimo Relationship. *Inter. Jour. of Amer. Ling.*, 17, pp. 167-179.
1973 Aleut Deixis. *Norwegian Journal of Linguistics* 27: 7-14.
- BERLIN, Brent
1972 Speculations on the Growth of the Ethnobotanical Nomenclature. *Lang. Soc.* 1: 51-86.
1973 Folk Systematics in Relation to Biological Classification and Nomenclature. *Ann. Rev. of Ecology and Systematics* 4: 259-271.
1976 The Concept of Rank in Ethnobiological Classification: Some Evidence from Aguaruna Folk Botany. *Amer. Ethno.* 3(3): 381-399.
- BERLIN, Brent, Dennis E. BREEDLOVE & Peter H. RAVEN
1968 Covert Categories and Folk Taxonomies. *Amer. Anthro.* 70(2): 290-299.
1973 General Principles of Classification and Nomenclature in Folk Biology. *Amer. Anthro.* 75(1): 214-243.

- 1974 *Principles of Tzeltal Plant Classification, An Introduction to the Botanical Ethnography of a Mayan-Speaking People of Highland Chiapas*. Academic Press.
- BERLIN, Brent & Paul KAY
 1969 *Basic Color Terms: Their University and Evolution*. Univ. of Calif. Press. Berkeley.
- BERLING, Robbins
 1970 *Man's Many Voices*. Hold, Rinehart and Winston Inc.
- BERNABE, Emna, Virginia LAPID & Bonifacio SIBAYAN
 1971 *Ilokano Lessons*. Univ. of Hawaii Press.
- BERRONDO, Placido Mugica
 1965 *Diccionario Castellano-Vasco*. El Mensajero del Corazon de Jesus.
- BIRK, D. B. W.
 1976 *The Malakmalak Language, Daly River (Western Arnhem Land)*. Pac. Ling. Series B, No. 45.
- BLACK, Paul
 1976 Werizoid. In M. Lionel Bender (ed.) *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*, Monograph No. 5, Occasional Papers Series, Committee on Ethiopian Studies, African Studies Center, Michigan Univ. pp. 222-231.
- BLEEK, D. F.
 1922 *Comparative Vocabularies of Bushman Languages*. Cambridge at the University Press.
- BLOOMFIELD, Leonard
 1968 *Eastern Ojibwa*. The Univ. of Michigan Press.
 1962 *The Menomini Language*. Yale Univ. Press.
- BOAS, Franz
 1911a Tsimshian. In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages, Part I*, Government Printing Office, pp. 283-422.
 1911b Kwakiutl. *ibid.*, pp. 423-557.
 1911c Chinook. *ibid.*, pp. 559-766.
- BOAS, Franz & John R. SWANTON
 1911 Siouan (Dakota). In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages, Part I*, Government Printing Office, pp. 875-965.
- BODDING, P. O.
 1929 *Materials for a Santali Grammar (II, Mostly Morphological)*. The Santali Mission Press.
- BOGORAS, Waldemar
 1922 Chukchee. In Franz Boas (ed.), *Handbook in American Indian Languages, Part II*, Government Printing Office, pp. 631-903.
- BOYLE, John Andrew
 1966 *Grammar of Modern Persian*. Otto Harrassowitz.
- BRADLEY, Henry
 1970 *A Linguistic Sketch of Jicaltepec Mixtec*. Summer Institute of Linguistics No. 25.
- BRIDGES, James E.
 1915 *Burmese Grammar*. British Burma Press.
- BRIGHT, William
 1957 *The Karok Language*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 13.
- BROADBENT, Sylvia M.
 1964 *The Southern Sierra Miwok Language*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 38.
- BROWN, Cecil H.
 1977 Folk Botanical Life-Forms: Their Universality and Growth. *Amer. Anthro.* 79(2): 317-342.
 1979 Folk Zoological Life-Forms: Their Universality and Growth. *ibid.* 81(4): 791-817.
- BROWN, Roger
 1958 *Words and Things*. The Free Press. New York.

- BUECHEL, Bugene
1939 *A Grammar of Lakota*. John S. Swift Co. St. Louis.
- BULMER, R.
1974 Folk Biology in the New Guinea Highlands. *Social Science Information* 13: 9-28.
- BUNYE, Maria Victoria R. & Elsa Paula YAP
1971 *Cebuano Grammar Notes*. Univ. of Hawaii Press.
- BURROW, T. & S. BHATTACHARYA
1970 *The Pengo Language*. Oxford at the Clarendon Press.
- CALDWELL, Robert
1875 *A Comparative Grammar of the Dravidian*. Trübner and Co.
- CALLAGAN, Catherina A.
1965 *Lake Miwok Dictionary*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 39.
- CAMP, Elizabeth & Millicent LICCARDI
1967 Itonama. In *Bolivian Indian Grammar: II*. Summer Institute of Linguistics No. 16, pp. 257-352.
- CAPELL, Arthur
1971 *Arosi Grammar*. Pac. Ling. Series B, No. 20.
- CAPELL, C.
1957 *A New Fijian Dictionary*. Wilson Guthrie & Co.
- CARDONA, George
1965 *A Gujarati Reference Grammar*. The Univ. of Pennsylvania Press.
- CHANDRA DAS, Sarat
1915 *An Introduction to the Grammar of the Tibetan Language*. Motilal Banarsidass.
- CHESHIER, H. T., L. KLOZNER & A. ŠRÁMEK
1935 *Czech-English Dictionary*. J. Otto. Prague.
- CHOMSKY, Noam
1957 *Syntactic Structures*. Mouton.
- CHURCHWARD, C. Maxwell
1940 *Rotuman Grammar and Dictionary*. Australian Medical Publishing Co.
1953 *Tongan Grammar*. Oxford University Press.
- CHURCHWARD, Spencer
1951 *A Samoan Grammar*. The Methodist Church of Australasia.
- CLAYRE, Iain
1973 Notes on Spatial Deixis in Melanau. *Anthro. Ling.* 15(2): 71-86.
- COLE, Desmond T.
1955 *An Introduction to Tswana Grammar*. Longmans, Green & Co.
- COLLINSON, William Edward
1961 *Indication: A Study of Demonstratives, Articles and Other 'Indicators'*. Waverley Press. Baltimore.
- CONKLIN, H. C.
1955 Hanunóo Color Categories. *Southern Jour. of Anthro.* 11(4): 339-344.
- COOK, Edwin A.
1967 A Preliminary Statement of Narak Spatial Deixis [Sic]. *Anthro. Ling.* 9(6): 1-29.
- COOMBS, Davis, Heide COOMBS & Robert WEBER
1976 *Grammatica Quechua: San Martin*. Ministerio de Educación, Instituto de Estudios Peruanos.
- COUNTS, David R.
1969 *A Grammar of Kaliai-Kore*. Oceanic Linguistic Special Pub. No. 6, University of Hawaii Press.
- COWAN, H. K. J.
1965 *Grammar of the Sentani Language with Specimen Texts and Vocabulary*. Verhandelingen van K.I.T.L.V. 47, Martinus Nijhoff.

- COWAN, Marion M.
 1969 *Tzotzil Grammar*. Summer Institute of Linguistics No. 18.
- COWELL, Reid
 1951 *The Structure of Gilbertese*. Rongorongo Press.
- CRAZZOLARA, J. P.
 1938 *A Study of the Acooli Language, Grammar and Vocabulary*. Oxford Univ. Press.
- CUMMINGS, Thomas F. & T. Grahame BAILEY
 1925 *Panjabi Manual and Grammar*. The Baptist Mission Press.
- CUSIHUAMAN G., Antonio
 1976 *Grammatica Quechua: Cuzco-Collao*. Ministerio de Educación, Instituto de Estudios Peruanos.
- D'ALBUGURGUE, A. Tenório
 n.d. *Dicionário Spanhul-Portugues*. Livraria Itatiaia Editôra.
- D'ANS, Andre-Marcel
 1970 *Materiales para el Estudio del Grupo Lingüístico Pano*. Universidad National Mayor de San Marcos. Lima.
- DAVIS, S.
 1955 *Greek Grammar and Exercises*. Univ. of Natal Press. London.
- DE BRAY, R. G. A.
 1951 *Guide to the Slavonic Languages*. J. M. Dent & Sons.
- DE GAYE, J. A. & W. S. BEECROFT
 1923 *Yoruba Grammar*. Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.
- DE LARAJASSE, Evangeliste & Cyprien de SAMPONT
 1897 *Practical Grammar of the Somali Language*. Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.
- DEMPWOLFF, Otto
 1939 *Grammatik der Jabêm-Sprache auf Neu Guinea*. Friederichsen, De Gruyter & Co.
- DIAS, Eduardo Mayaone, Thomas A. LATHOP & Joseph G. ROSA
 1977 *Portugal Língua e Cultura*. The Cabrilho Press.
- DIXON, Roland B.
 1911 Maidu. In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages, Part I*, Government Printing Office, pp. 679-734.
- DOBLE, Marion
 1960 *Kapauku-Malayan-Dutch-English Dictionary*. Martinus Nijhoff.
- DOKE, Clement Martyn
 1967 *The Southern Bantu Languages*. International African Institute.
- DOWSON, John
 1887 *A Grammar of the Urdü or Hindüstānī*. Trübner & Co.
- DRABBE, Peter
 1953 *Spraakkunst van de Kamoro-taal*. Martinus Nijhoff.
 1955 *Spraakkunst van het Marind*. Mödling. Wenen.
 1957 *Spraakkunst van het Aghu-dialect van de Awju-taal*. Martinus Nijhoff.
 1959a *Grammar of the Asmat Language*. Joseph Fichtuer, trans., Our Lady of the Lake Press. Syracuse.
 1959b *Dictionary of the Asmat Language*. Francis Jutte and Martin van Roosmalen, trans., Our Lady of the Lake Press. Syracuse.
 1959c *Kaetic en Wambon, Twee Awju-dialecten*. Martinus Nijhoff.
- DRVODELIĆ, Milan
 1962 *English Croato-Serbian Dictionary*. Školska Krjiga.
- DUNNEBIER, W.
 1951 *Bolaang Mongondowsch-Nederlandsch woordenboek. Met Nederlandsch-Bolaang Mongondowsch register*. Martinus Nijhoff.

- DUROISELLE, Charles
1906 *A Practical Grammar of the Pāli Language*. The British Burma Press.
- DYEN, Isidore
1965 *A Sketch of Trukese Grammar*. American Oriental Society.
- ECKMANN, János
1966 *Chagatay Manual*. Indiana Univ. Pub. Uralic and Altaic Series Vol. 60.
- EINARSSON, Stefán
1949 *Icelandic Grammar, Texts, Glossary*. The John Hopkins Press.
- ELBERT, S. H.
1947 *Trukese-English and English-Trukese Dictionary*. Naral Military Government.
1974 *Puluwat Grammar*. Pac. Ling. Series B, No. 29.
- ELKINS, Richard E.
1970 *Major Grammatical Patterns of Western Bukudnon Manobo*. Summer Institute of Linguistics No. 26.
- ELLIOTT, W. A.
1912 *Notes for a Sindebele Dictionary and Grammar*. The Sindebele Publishing Co.
- ELMBERG, John-Erik
1968 *Balance and Circulation. Aspect of Tradition and Change among the Mejprat of Irian Barat*. The Ethnographical Museum. Stockholm.
- EMENEAU, M. B.
1951 *Studies in Vietnamese (Annamese) Grammar*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 8.
1955 *Kolami, a Dravidian Language*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 12.
- ETHERINGTON, W.
1873 *The Student's Grammar of the Hindī Language*. E. J. Lazarus & Co.
- FARR, James & Cynthia FARR
1975 Some Features of Korafe Morphology. In T. B. Button (ed.), *Studies in Languages of Central and South-East Papua*, Pac. Ling. Series C, No. 29, pp. 731-769.
- FENN, Henry C. & H. Gardnen TEWKSBURY
1967 *Speak Mandarin*. Yale Univ. Press.
- FILIPOVIĆ, Rudolf
1970 *Engesko-Havetskosrpski Rječnik (English Croato-Serbian Dictionary)*. Zora. Zagreb.
- FILLMORE, Charles J.
1971 *Santa Cruz Lecture on Deixis*. n.p.
- FLASSY, Don A. L. & W. A. L. STOKHOF
1979 Notes on Tehit (Bird's Head-Irian Jaya). *Nusa* Vol. 7: 35-84.
- FLINT, Maurice S.
1954 *Revised Eskimo Grammar Book (Canadian Eastern Arctic)*. Trinity Church.
- FORCHHEIMER, Paul
1951 *The Category of Person in Language*. Eagle Enterprises.
- FORMAN, Micheal L.
1971 *Kapampangan Grammar Notes*. Univ. of Hawaii Press.
- FORTUNE, G.
1967 *Elements of Shona*. Longmans.
- FORTUNE, R. E. (Franz Boas ed.)
1942 *Arapesh*. Pub. Amer. Ethno. Soc. Vol. 19.
- FOSTER, Mary LeCron
1969 *The Tarascan Language*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 56.
- FOULKES, H. D.
1915 *Angass Manual Grammar and Vocabulary*. Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.

- FRACHTENBERG, Leo J.
 1922a Coos. In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages, Part II*, Government Printing Office, pp. 297-429.
 1922b Siuslawan (Lower Umpqua). *ibid.* pp. 431-629.
- FREELAND, L. S.
 1951 *Language of the Sierra Miwok*. Supplement to International Journal of American Linguistics Vol. 17, No. 1.
- FRIEND-PREIRA, J. E.
 1909 *A Grammar of the Kuī Language*. Bengal Secretariat Book Depôt.
- GARGINER, Alan H.
 1927 *Egyptian Grammar*. Oxford at the Clarendon Press.
- GARLAND, Roger & Susan GARLAND
 1975 *A Grammar Sketch of Mountain Koiala*. In T. E. Button (ed.), *Studies in Languages of Central and South-East Papua*, Pac. Ling. Series C, No. 29, pp. 413-470.
- GEOGHEGAN, Richard Henry
 1944 *The Aleut Language*. United States, Dept. of the Interior.
- GILBERTSON, Major George Waters
 1923 *The Balochi Language*. Stephen Austin & Sons.
- GIRARD, Denis
 1977 *Cassell's French Dictionary*. Cassell & Co.
- GODDARD, Pliny Earle
 1911 Athapascan (Hupa). In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages, Part I*, Government Printing Office, pp. 85-158.
- GRAGG, Gene
 1976 Oromo of Wellegga. In M. L. Bender (ed.), *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*, African Studies Center, Michigan State Univ., pp. 166-195.
- GREEN, A. O.
 1895 *A Practical Hindūstānī Grammar (Part I)*. Oxford at the Clarendon Press.
 1893 *A Practical Arabic Grammar, Part II*. Oxford at the Clarendon Press.
 1915 *A Practical Arabic Grammar, Part I*. Oxford at the Clarendon Press.
- GREENBERG, J. H.
 1966 *Language Universals*. Mouton.
- GRIERSON, G. A. (ed.)
 1906 *Linguistic Survey of India Vol. 4, Muṇḍā and Dravidian Language*. Government Printing Office.
- GUISASOLA, Florentino Castro
 1944 *El Enigma del Vascuence Ante las Lenguas Indeuropas*. S. Aguirre. Madrid.
- GUY, J. B. N.
 1974 *A Grammar of the Northern Dialect of Sakao*. Pac. Ling. Series B, No. 33.
- HAAS, Mary R.
 1940 *Tunica*. Extract from Handbook of American Indian Languages, Vol. IV, n. p.
- HALL, Edward T.
 1973(1959) *The Silent Language*. Anchor Books Edition, Anchor Books.
 1963 A System for the Notation of Proxemic Behavior. *Amer. Anthro.* 65(5): 1003-1026.
 1969(1966) *The Hidden Dimension*. Anchor Books edition, Anchor Books.
 1968 Proxemics, *Current Anthropology* 9(2-3): 83-95.
 1974 *Handbook for Proxemic Research*. The Anthropology of Visual Communication.
- HALL, Robert A.
 1938 *An Analytical Grammar of the Hungarian Language*. Supplement to Language, Jour. of the Ling. Soc. of Amer. Vol. 14, No. 2.

- HANKE, A.
1909 *Grammatik und Vokabulirium der Bongu-Sprache*. Archiv für das Studium Deutschen Kolonial Sprachen, Band VIII, Druck und Kommissionsverlag von George Reimer.
- HARKINS, William E.
1953 *A Modern Czech Grammar*. King's Crown Press.
- HARRIES, Lyndon (C. M. Doke ed.)
1950 *Bantu Grammatical Archives I, A Grammar of Mwere*. Witwatersrand University Press.
- HAZON, Mario
1961 *Dizionario Inglese-Italiano, Italiano-Inglese*. Garzanti.
- HEAD, Brian
1978 Respect Degrees in Pronominal Reference. In Joseph H. Greenberg (ed.), *Universals of Human Language, Vol. 3, Word Structure*, Stanford Univ. Press, pp. 151-211.
- HELD, G. J.
1942 *Gramatica van het Waropensch*. Verhand. K.B.G.K.W. 77(1).
- HELTBERG, Kristine
1970 *Studies on Slavic Derivation*. Odense University Slavic Studies Vol. 1, Odense University Press.
- HILDERS, J. H. & J. C. D. LAWRENCE
1957 *An Introduction to the Ateso Language*. The Eagle Press. Kampala.
1958 *An English-Ateso and Ateso-English Vocabulary*. The Eagle Press. Kampala.
- HINZ, John
1944 *Grammar and Vocabulary of the Eskimo Language*. The Society for Propagation the Gospel, the Moravian Church.
- HOFF, B. J.
1968 *The Carib Language*. Verhand. K.I.T.L.V. 55, Martinus Nijhoff.
- HOFFMANN, J.
1903 *Mundari Grammar*. Bengal Secretariat Press.
n.d. *A Mundari Grammar with Exercises (Part I and II)*. The Catholic Orphan Press. Calcutta.
- HOIJER, Harry
1946 Tonkawa. In Harry Hoijer (ed.), *Linguistic Structures of Native America*, Viking Fund Pub. in Anthro. No. 6, Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research, pp. 289-311.
1974 *A Navajo Lexicon*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 78.
- HOLLIS, A. C.
1905 *The Masai, Their Language and Folklore*. Oxford at the Clarendon Press.
1969(1909) *The Nandi, Their Language and Folklore*. Oxford at the Clarendon Press.
- HONY, H. C.
1967(1949) *A Turkish-English Dictionary*. Oxford at the Clarendon Press.
- HORNE, Eliner C.
1963 *Intermediate Javanese*. Yale Univ. Press.
- HORBAK, Philip A.
1944 *Horbak's English-Slovak Dictionary*. Jednota Printery.
- HUDSON, Grover
1976 Highland East Cushitic. In M. L. Bender (ed.), *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*, African Studies Center, Michigan State Univ., pp. 232-277.
- HUFFMAN, Franklin E.
1970 *Modern Spoken Cambodian*. Yale Univ. Press.
- INGRAM, David
1978 Typology and Universals of Personal Pronouns. In J. H. Greenberg (ed.), *Universals of Human Language, Vol. 3, Word Structure*, Stanford Univ. Press, pp. 213-247.

- INNES, Gordon
 1966 *An Introduction to Grebo*. School of Oriental and African Studies, Univ. of London.
 1967 *A Practical Introduction to Mende*. School of Oriental and African Studies, Univ. of London.
- İz, Fahir & H. C. HONY
 1968(1954) *An English-Turkish Dictionary*. Oxford at the Clarendon Press.
- JACOB, Judith M.
 1968 *Introduction to Cambodian*. Oxford Univ. Press.
- JENSEN, John Thayer
 1977 *Yapese Reference Grammar*. The Univ. Press of Hawaii.
- JOAN, Gili
 1943 *Introductory Catalan Grammar*. The Dolphin Book Co.
- JOHNSTON, Harry H.
 1919 *A Comparative Study of the Bantu and Semi-Bantu Languages*. Oxford at the Clarendon Press.
- JONES, Robert B.
 1961 *Karen Linguistic Studies*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 25.
- JONES, William (Truman Michelson revised)
 1911 Algonquian (Fox). In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages, Part I*, Government Printing Office, pp. 735-873.
- JORDAN, A. C.
 1966 *A Practical Course in Xhosa*. Longmans.
- JUANMART, J.
 1906 *A Grammar of the Maguindanao Tongue*. C. C. Smith, trans., Government Printing Office. Washington.
- KAEGI, Adolf
 1949 *A Short Grammar of Classical Greek*. B. Herder Book Co. St. Louis.
- KAKATI, Banikanta
 1962 *Assamese, Its Formation and Development*. Lawyer's Book Stall.
- KÄRRE, Karl, Harold LINDKVIST, Ruben NÖJD & Mats REDIN
 1965 *Engelsk-Svensk Ordbok*. Svensk Bokförlaget. Stockholm.
- KAY, Paul
 1970 Some Theoretical Implications of Ethnographic Semantics. *Current Direction in Anthropology, Bulletins of the A.A.A.*, Vol. 3, No. 3, Part 2, pp. 19-61.
- KIRK, J. W. C.
 1905 *A Grammar of the Somali Language*. Cambridge at the University Press.
- 北村 甫
 1974 『チベット語文法・会話』東京外大, AA 研 言語研修テキスト, 東京.
- KITTEL, F.
 1903 *A Grammar of the Kannada Language*. Basel Mission Book and Tract Depository.
- KLOEID, Terry J.
 1969 *Thargari Phonology and Morphology*. Pac. Ling. Series B, No. 12.
- KOEFOD, H. A.
 1958 *Teach Yourself Danish*. The English Universities Press.
- KOELLE, S. W.
 1854 *Grammar of the Bórnú of Kánurí Language*. Church Missionary House.
- KOHNEN, B.
 1933 *Shilluk Grammar*. Missioni Africane. Verona.
- KOLIA, J. A.
 1975 A Balawaia Grammar Sketch and Vocabulary. In T. E. Button (ed.), *Studies in Languages of Central and South-East Papua*, Pac. Ling. Series C, No. 29.

- KRAFT, Charles H. & H. M. KIRK-GREENE
1973 *Hausa, Teach Yourself Books*. The English Universities Press.
- KROEBER, A. L.
1911 *The Languages of the Coast of California North of San Francisco*. *Univ. of Calif. Pub. Archaeology and Ethnology* 9: 273-435.
- KROEBER, A. L. & George William GRACE
1960 *The Sparkman Grammar of Luiseño*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 16.
- KRUEGER, John R.
1977 *Tuvan Manual*. Indiana Univ. Pub. Uralic and Altaic Series Vol. 126.
- LANE, T. O'Necill
1922 *Larger English-Irish Dictionary*. The Talbot Press.
- LANGDON, Margaret
1970 *A Grammar of Diegueño*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 66.
- LANYON-ORGILL, Peter A.
1955 *An Introduction to the Thai (Siamese) Language for European Students*. The Curlew.
- LAWES, W. G.
1896 *Grammar and Vocabulary of Language Spoken by Motu Tribe (New Guinea)*. Charles Potter, Government Printer.
- LEE, Kee-Dong
1975 *Kusaiean Reference Grammar*. The Univ. Press of Hawaii.
- LESLAU, Wolf
1966 *The Ethiopic Languages*. Supplement in A. N. Tucker & M. A. Bryan, *Linguistic Analyses, the Non-Bantu Languages of North-Eastern Africa*, Oxford University Press.
- LEWIS, Chaelton T. & Charles SHORT
1969 *A Latin Dictionary*. Oxford at the Clarendon Press.
- LÉVI-STRAUSS, C.
1969(1946) *The Elementary Structures of Kinship*. J. H. Bell, J. R. von Sturmer & R. Needham trans., Erye and Spottiswoode.
1976(1962) 『野生の思考』大橋保夫訳. みすず書房.
- LEWIS, GROUT
1893 *The Isizulu: A Revised Edition of a Grammar of the Zulu Language*. American Board Commissioners for Foreign Missions. Boston.
- LIEBER, Michael D. & Kalio H. DIKEPA
1974 *Kapingmarangi Lexicon*. The Univ. Press of Hawaii.
- LINDGREN, Erik
1933 *Engelsk-Svensk Ordbok*. P. A. Norstedt & Söners Förlag.
- LORRAIN, J. Herbert & Fred. W. SAVIDGE
1898 *A Grammar and Dictionary of the Lushai Language*. The Assam Secretariat Printing Press.
- LOUNSBURY, Flyod
1963 *A Formal Account of Crow- and Omaha-Type Kinship Terminologies*. In Ward Goodenough (ed.), *Explorations in Cultural Anthropology*, McGraw-Hill. pp. 351-387.
- LYDALL, Jean
1976 *Hamer*. In M. L. Bender (ed.), *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*, African Studies Center, Michigan State Univ., pp. 393-438.
- LYONS, John
1968 *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge Univ. Press.
1977 *Semantics, No. 2*. Cambridge Univ. Press.
- MACINTYRE, J. L.
1915 *A Grammar of the Nupe Language*. Society for Promoting Christian Knowledge. London.
- MACUCH, Rudolf
1965 *Handbook of Classical and Modern Mandaic*. Walter de Gruyter & co.

- MADAN, A. C.
1905 *Swahili (Zanzibar) Grammar*. Oxford at the Clarendon Press.
- MAINWARING, G. B.
1876 *A Grammar of the Róng (Lepcha) Language*. Baptist Mission Press.
- MALANDA, Alfred
1952 *A New Acholi Grammar*. The Eagle Press.
- MARCONNÈS, Francisque
1931 *A Grammar of Central Karanga*. Witwatersrand University Press.
- MARSACK, C. C.
1962 *Teach Yourself Samoan*. The English Universities Press.
- MARTIN, Samuel E. & Young-Sook C. LEE
1969 *Beginning Korean*. Yale Univ. Press.
- MASON J. Alden
1960 *The Language of the Papago of Arizona*. The University Museum, Univ. of Pennsylvania.
- MATISEFF, James A.
1973 *The Grammar of Luhu*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 75.
- MATSON, Dan Mitchell
1964 *A Grammatical Sketch of Juang*. Unpublished Dissertation Paper, Univ. of Wisconsin.
- MATTESON, Esther
1965 *The Piro (Arawakan) Language*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 42.
- MAUNSELL, R.
1894 *Grammar of the New Zealand Language*. Upton & Co.
- MCELHANON, K. A.
1972 *Selepet Grammar, Part I: From Root to Phrase*. Pac. Ling. Series B, No. 21.
1973 *Towards a Typology of the Finisterre-Huon Languages, New Guinea*. Pac. Ling. Series B, No. 22.
- MCGREGOR, A. Wallace
1905 *A Grammar of the Kikuyu Language*. Richard Clay & Sons.
- McMANUS, Edwin
1977 *Palauan-English Dictionary*. The Univ. Press of Hawaii.
- MESSER, Ellen
1978 *Zapotec Plant Knowledge: Classification, Uses, and Communication about Plants in Mitla, Oaxaca, Mexico*. In *Prehistory and Human Ecology of the Valley of Oaxaca*, Vol. 5, Part. 2, *Memories of the Museum of Anthropology, University of Michigan*.
- MIDDENDORF, E. W.
1890 *Das Runa Simi order die Keshua-Sprache*. F. A. Brockhaus. Leipzig.
1891 *Die Aimara-Sprache*. F. A. Brockhaus. Leipzig.
1892 *Das Muchik order die Chimu-Sprache*. F. A. Brockhaus. Leipzig.
- MILIER, Wick R.
1965 *Acoma Grammar and Texts*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 40.
- MILNE, Leslie
1921 *An Elementary Palaung Grammar*. Oxford at the Clarendon Press.
- MIRIKITANI, Leatrice T.
1971 *Speaking Kapampangan*. Univ. of Hawaii Press.
- 宮岡伯人
1978 『エスキモーの言語と文化』弘文堂、東京。
1980 「エスキモーの言語空間」『言語』9(9):38-41.
- MÖLLENDORFF, P. G. von
1892 *A Manchu Grammar*. The American Presbyterian Mission Press.
- MORRIS, H. F. & B. E. R. KIRWAN
1972(1957) *A Runyankore Grammar*. East African Literature Bureau.

- MOTUS, Cecile L.
1971 *Hiligaynon Lessons*. Univ. of Hawaii Press.
- MÜLLER, F. Max
1870 *A Sanskrit Grammar for Beginners*. Longmans, Green and Co.
- MURDOCK, George Peter
1967 *Ethnographic Atlas*. Univ. of Pittsburg Press.
- NADZHIP, E. M.
1971 *Modern Uigur*. Nauka.
- NANDRIS, Grigore
1961 *Colloquial Rumanian*. Routledge & Kegan Paul.
- NEFFGEN, H.
1918 *Grammar and Vocabulary of the Samoan Language*. Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.
- NEWMAN, Paul
1970 *A Grammar of Tera*. Univ. of Calif. Pub. Ling. No. 57.
- NEWMAN, Stanley
1946 The Yawelmani Dialect of Yokuts. In Harry Hoijer (ed.), *Linguistic Structures of Native America*, Viking Fund Publications in Anthropology No. 6, The Viking Fund, pp. 222-248.
- NGATA, Apirana
1964 *Maori Grammar and Conversation*. Whitcombe & Tombs.
- NIDA, Eugene A.
1975 *Componential Analysis of Meaning, An Introduction to Semantic Structures*. Mouton.
- NIELSEN, B. Kjaeralff
1964 *English-Dansk Ordbog*. Gyldendal.
- OLMOS, André de
1875 *Grammaire de la Langue Nahuatl ou Mexicaine*. Imperimerie Nationale. Paris.
- OLSON, Mike
1975 Barai Grammar Highlights. In T. E. Button (ed.), *Studies in Languages of Central and South-East Papua*, Pac. Ling. Series C, No. 29.
- ORSZÁGH, L.
1974 *English-Hungarian Dictionary*. Akadémiai Kiadó.
- OTT, Willis G. & Rebecca H. OTT
1967 Ignaciano. In *Bolivian Indian Language: I*, Summer Institute of Linguistics No. 16, pp. 85-137.
- OTTAVIANO, John C. & Ida OTTAVIANO
1967 Tacana. In *Bolivian Indian Language: I*, Summer Institute of Linguistics No. 16, pp. 139-207.
- PALMER, F. R.
1976 *Semantics, a New Outline*. Cambridge Univ. Press.
- PATON, E. F.
1971 *Ambryn (Lonwolwol) Grammar*. Pac. Ling. Series B, No. 19.
- PEEKE, M. Catherine
1973 *Preliminary Grammar of Auca*. Summer Institute of Linguistics No. 39.
- PETTER, Rodolphe
1952 *Cheyenne Grammar*. Mennonite Publication Office. Newton (Kansas).
- PETTIGREW, W.
1918 *Tāngkhul Nāga Grammar and Dictionary (Ukhrul Dialect)*. The Assam Secretariat Printing Office.
- PICKETT, Velma Bernice
1959 *Vocabulario Zapoteco del Istmo*. Serie de Vocabularios Indigenas Mariano Silva y Aceves, Num. 3, El Instituto Linguistico de Verano.
1960 *The Grammatical Hierarchy of Isthmus Zapotec*. Language Vol. 36, No. 1, Part 2, Language Dissertation Paper No. 56.

- PODVESKO, M. L.
 1948 *English-Ukrainian Dictionary*. Radianc'ka Shkola.
- POKORNY, Julius
 1914 *A Concise Old Irish Grammar and Reader, Part I, Grammar*. Hodges, Figgis & Co.
- POLAK, J. E. R.
 1894 *A Grammar and a Vocabulary of the Ipurimá Language*. Kegan Paul, Trench, Trüner & Co.
- POPPE, Nicholas N.
 1960 *Buriat Grammar*. Indiana Univ. Pub. Uralic and Altaic Series Vol. 2.
 1963 *Tatar Manual*. *ibid.*, Vol. 25.
 1964 *Bashkir Manual*. *ibid.*, Vol. 36.
- PORTMAN, M. V.
 1887 *A Manual of the Andamanese Languages*. W. H. Allen & Co.
- PREISSIG, E. R.
 1918 *Dictionary and Grammar of the Chamorro Language of the Island of Guam*. Government Printing Office.
- PRENTICE, D. J.
 1971 *The Murut Languages of Sabah*. Pac. Ling. Series C, No. 18.
- PRIEST, Perry N. & Anne M. PRIEST
 1967 Siriono. In *Bolivian Indian Grammar: II*, Summer Institute of Linguistics No. 16, pp. 195-255.
- PUKUI, Mary Kawena & Samuel H. ELBERT
 1971 *Hawaiian Dictionary*. Univ. of Hawaii Press.
- QUEVEDO, Samuel A. Lafone
 1893 *Notas ó sea Principios de Gramática Mocoví*. Talleres de Publicaciones del Museo.
- RAJAONA, Siméon
 1972 *Structure du Malagache*. Fiamarantsoa.
- RAKNES, Ola
 1927 *Englesk-Norsk Ordbok*. H. Aschehong & Co.
- RANAWAKE, Edwin
 1968 *Spoken Sinhalese for Beginners*. M. D. Gunasena & Co.
- Randall, Robert A.
 1976 How Tall is a Taxonomic Tree? Some Evidence for Dwarfism. *Amer. Ethno.* 3: 543-553.
- RAY, Punta Sloka, Muhammad Abdul HAI & Lila RAY
 1966 *Bengali Language Handbook*. Center for Applied Linguistics.
- RAY, Sidney Herbert
 1962 *A Comparative Study of the Melanesian Island Languages*. Cambridge at the University Press.
- READ, A. F. C.
 1934 *Balti Grammar*. The Royal Asiatic Society.
- RICHARDSON, Irvine
 1957 *Linguistic Survey of the Northern Bantu Borderland, Vol. 2*. International African Institute.
- ROBINS, R. H.
 1958 *The Yurok Language, Grammar, Texts, Lexicon*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 15.
- ROBINSON, Dow Frederick
 1966 *Aztec Studies II, Sierra Nahuatl Word Structure*. Summer Institute of Linguistics No. 22.
- ROERICH, George N. & Tse-Trung LOPOSANG PHUNTSHOLE
 1957 *Textbook of Colloquial Tibetan*. The Government of West Bengal, Education Dept. Education Bureau.
- ROMUALDEZ, Norberto
 1908 *Bisayan Grammar*. Pag Pahayag Co.

- ROSBOTTOM, Harry
1967 Guarani. In *Bolivian Indian Grammar: II*. Summer Institute of Linguistics No. 16.
- ROSSITER, Ernest
1919 *A New Grammar of the Tahitian Dialect of the Polynesian Language*. Church of Jesus Christ of Latter Day Saints.
- SANDBERG, Graham
1888 *Manual of the Sikkim-Bhutia Language or Dé-Jong Ké*. Oxford Mission Press.
- SANDERSON, Meredith
1922 *A Yao Grammar*. Society for East Promoting Christian Knowledge.
- SAPIR, Edward
1921 *Language*. A Harvest/HBJ Book.
1922 The Takelma Language of South-Western Oregon. In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages, Part II*, Government Printing Office, pp. 1-296.
- SASSE, Hans-Jürgen
1976 Dasenech. In M. L. Bender (ed.), *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*, African Studies Center, Michigan State Univ., pp. 191-221.
- SAWYER, Jesse O.
1965 *English-Wappo Vocabulary*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 43.
- SCHACHTER, Paul & Fe T. OTANES
1972 *Tagalog Reference Grammar*. Univ. of Hawaii Press.
- SCHLEGEL, Stuart A.
1971 *Tiruray-English Lexicon*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 67.
- SCHOEMBAS, Jakob
1949 *Aztekische Schriftsprache*. Carl Winter Universitätsverlag. Heidelberg.
- SCHÜTZ, Albert J.
1969 *Nguna Grammar*. Univ. of Hawaii Press.
- SEKHAR, A. C.
1953 *Evolution of Malayalam*. Deccan College Postgraduate and Research Institute.
- SHARMA, Mukunda Madhara
1963 *Assamese for All*. Shri Kalicharan Pal.
- SHIPLEY, William F.
1964 *Maidu Grammar*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 41.
- SMITH, Edwin W.
1907 *A Handbook of the Ila Language*. Oxford Univ. Press.
- SMYTH, Herbert Weir
1956 *Greek Grammar*. Harvard Univ. Press.
- SOHU, Ho-Min & D. W. BENDER
1973 *A Ulithian Grammar*. Pac. Ling. Series C, No. 27.
- SPAGNOLO, L. M.
1933 *Bari Grammar*. The Nigrizio Printing Press School. Verano.
- SPALDING, A. E.
1969 *Salliq: An Eskimo Grammar*. Education Branch, Dept. of Indian Affairs and Northern Development.
- SPENCER, Halold
1914 *A Kanarese Grammar*. The Wesleyan Mission Press.
- STECHISHIN, J. W.
1951 *Ukrainian Grammar*. Ukrainian Canadian Committee.
- STEINEN, Karl von Den
1892 *Die Bakäiri-Sprache*. KF. Kochler's Antiquarium. Leipzig.
- STILMAN, Galina, Leon STILMAN & William E. HARKINS
1964 *Introductory Russian Grammar*. John Wiley & Sons.
- STRESEMANN, Erwimlohi
1918 *Die Paulohisprache*. Martinus Nijhoff.

- SUNDERMANN, D. Heinrich
 1913 *Niassische Sprachlehre*. Martinus Nijhoff.
- SWADESH, MORRIS
 1971 *The Origin and Diversification of Language*. Aldine Atherton. Chicago.
- SWANTON, JOHN R.
 1911a Tlingit. In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages, Part I*, Government Printing Office, pp. 159-204.
 1911b Haida. *ibid.* pp. 205-282.
- TAYLOR, F. W.
 1953 *A Grammar of the Adamawa Dialect of the Fulani Language*. Oxford at the Clarendon Press.
- TEKIN, TALÂT
 1968 *A Grammar of Orkhon Turkic*. Indiana Univ. Pub. Uralic and Altaic Series Vol. 69.
- TEETER, KARL V.
 1964 *The Wiyot Language*. Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 37.
- TEMPLE, RICHARD C.
 1902 *A Grammar of the Nicobarese Languages*. *The Census Report on the Andaman and Nicobar Islands*, Chapter IV, Part II. Superintendent's Printing Press.
- THALBITZER, WILLIAM
 1911 Eskimo. In Franz Boas (ed.), *Handbook of American Indian Languages, Part I*, Government Printing Office, pp. 967-1069.
- THOMAS, DAVID D.
 1971 *Chrau Grammar*. Univ. of Hawaii Press.
- THOMPSON, E. DAVID
 1976 Nera. In M. L. Bender (ed.), *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*, African Studies Center, Michigan State Univ., pp. 484-494.
- THOMPSON, LAURENCE C. & M. TERRY THOMPSON
 1971 Clallam: A Preview. In Jesse Sawyer (ed.), *Studies in American Indian Languages*, Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 65, pp. 251-294.
- THOMSON, N. P.
 1975 Magi Phonology and Grammar. In T. E. Button (ed.), *Studies in Languages of Central and South-East Papua*, Pac. Ling. Series C, No. 29, pp. 599-666.
- THRELKELD, L. E.
 1892 *An Australian Language as Spoken by the Awabakal*. Charles Potter, Government Printer.
- THURUEYSEN, RUDOLF
 1961 *A Grammar of Old Irish*. D. A. Binchy & Lsborn Bergin, trans., The Dulbin Institute for Advanced Studies.
- TINDALL, HENRY
 1857 *A Grammar and Vocabulary of the Namaqua-Hottentot Language*. A. S. Robertson.
- TOZZER, ALFRED M.
 1921 *A Maya Grammar, with Bibliography and Appraisal of the Works Noted*. Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard Univ. Vol. IX.
- TRAGER, GEORGE L.
 1946 An Outline of Taos Grammar. In Harry Hoijer (ed.), *Linguistic Structure of Native America*, Viking Fund Publication in Anthropology No. 6, The Viking Fund, pp. 186-221.
- TRAIL, RONALD L.
 1970 *The Grammar of Lamani*. Summer Institute of Linguistics No. 24.
- TRYON, D. T.
 1967a *Dehu-English Dictionary*. Pac. Ling. Series C, No. 6.
 1967b *Nengone Grammar*. Pac. Ling. Series B, No. 6.
 1970 *An Introduction to Maranungku*. Pac. Ling. Series B, No. 15.

- TRYON, D. T. & M. J. DUBOIS
1969 *Nengone Dictionary. Part I, Nengone-English.* Pac. Ling. Series C, No. 9.
- TSCHEKÉLI, Kita
1958 *Einführung in die Georgische Sprache, Band I.* Amirani Verlag. Zürich.
- TUCKER, A. N.
1940 *The Eastern Sudanic Languages.* Oxford Univ. Press.
- TUCKER, A. N. & M. A. BRYAN
1957 *Linguistic Survey of the Northern Bantu Borderland, Vol. 4,* International African Institute.
1966 *Linguistic Analyses, the Non-Bantu Languages of North-Eastern Africa.* Oxford Univ. Press.
- TUCKER, A. N. & J. Tompo Ole MPAAYEI
1955 *A Maasai Grammar with Vocabulary.* Longman, Green & Co.
- TURTON, Davis & M. L. BENDER
1976 Mursi. In M. L. Bender (ed.), *The Non-Semitic Languages in Ethiopia,* African Studies Center, Michigan State Univ., pp. 533-561.
- TUUK, van Der
1971 (1864) *A Grammar of Toba Batak.* Jeune Scott-Kimball, trans., Martinus Nijhoff.
- TWEDDELL, Colin Ellidge
1958 *The Iraya (Mangyan) Language of Mindoro, Philippines, Phonology and Morphology.* Unpublished Dissertation Paper. Univ. of Washington.
- TYLER, Stephen A.
1969 *Koya: An Outline Grammar.* Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 54.
- UPIA, Randolph
1975 Highlights of Ömie Morphology. In T. E. Button (ed.), *Studies in Languages of Central and South-East Papua,* Pac. Ling. Series C, No. 29, pp. 513-598.
- VOEGELIN, Charles F. & Florence M. VOEGELIN
1957 *Hopi Domains.* Supplement, International Journal of American Linguistics Vol. 23, No. 2.
1977 *Classification and Index of the World's Languages.* Elsevier. New York.
- WALKER, W. Seymour
1921 *The Siwi Language.* Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.
- WARD, Ida C.
1936 *An Introduction to the Ibo Language.* W. Heffer & Sons.
- WELMERS, W. E.
1976 *A Grammar of Via.* Univ. of Calif. Pub. Ling. Vol. 84.
- WELY, F. P. H. Prick van
1971 *Cassell's English-Dutch, Dutch-English Dictionary.* Cassell & Co.
- WHITEHEAD, John
1964 (1899) *Grammar and Dictionary of the Bohangi Language.* The Gregg Press.
- WHITNEY, Arthur H.
1956 *Teach Yourself Finnish.* English Universities Press.
- WHORF, Benjamin Lee
1946 The Hopi Language, Toreva Dialect. In Harry Hoijer (ed.), *Linguistic Structures of Native America,* Viking Fund Publications in Anthropology No. 6, The Viking Fund, pp. 158-183.
- WHYMANT, A. Neville J.
1926 *A Mongolian Grammar.* Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.
- WIEKREMASINGHE, M. de Z.
1916 *Sinhalese Self-Taught.* E. Marlborough & Co.
- WIELENGA, D. K.
1909 *Schets van een Soembaneesche Spraakkunst.* Landsdrukkerij. Batavia.

- WILDHAGEN, Karl & Will HÉRAUCOURT
 1972 *English-German, German-English Dictionary*. Vol. I, II. Brandstetter Verlag. Wiesbaden.
- WILLIAMS, James
 1932 *Grammar Notes and Vocabulary of the Language of the Makuchi Indians of Guiana*. Collection Internationale de Monographies Linguistiques "Anthropos" Tome VIII.
- WILLIAMS, Monier
 1857 *A Practical Grammar of the Sanskrit Language*. Oxford at the University Press.
- WOLFENDEN, Stuart N.
 1929 *Outlines of Tibeto-Burman Linguistic Morphology*. The Royal Asiatic Society.
- YAR-SHATER, Ehsan
 1969 *A Grammar of Southern Tati Dialects*. Mouton.
- 吉田集而
 1976 「トバ・バタック族の親族呼称について」『国立民族学博物館研究報告』1(3): 592-603.
 1977 「ハルマヘラ島における民俗方位の構造」『国立民族学博物館研究報告』2(3): 437-497.
 1978 「トバ・バタック族の病気の民俗分類」『国立民族学博物館研究報告』3(3): 410-464.
 1980 「普遍性と相対性」『民博通信』18: 14-23.
 n.d. 「空間認識の類型化について」(準備中)
- YOSHIDA, Shuji
 1980a Folk Orientation in Halmahera with Special Reference to Insular Southeast Asia. *Senri Ethnological Studies* 7: 19-88.
 1980b Time Reckoning. *ibid.* 7: 89-106.
 1980c Folk Classification of Sago Palm (*Metroxylon* spp.) among the Galela. *ibid.* 7: 109-117.
- ZIERVOGEL, D.
 1954 *The Eastern Sotho*. J. L. van Schaik.